明治三十一年十月二十日發兌

女鑑

第百六十七號

東京國光社

女鑑第百六拾七號

目録

青山延于の母



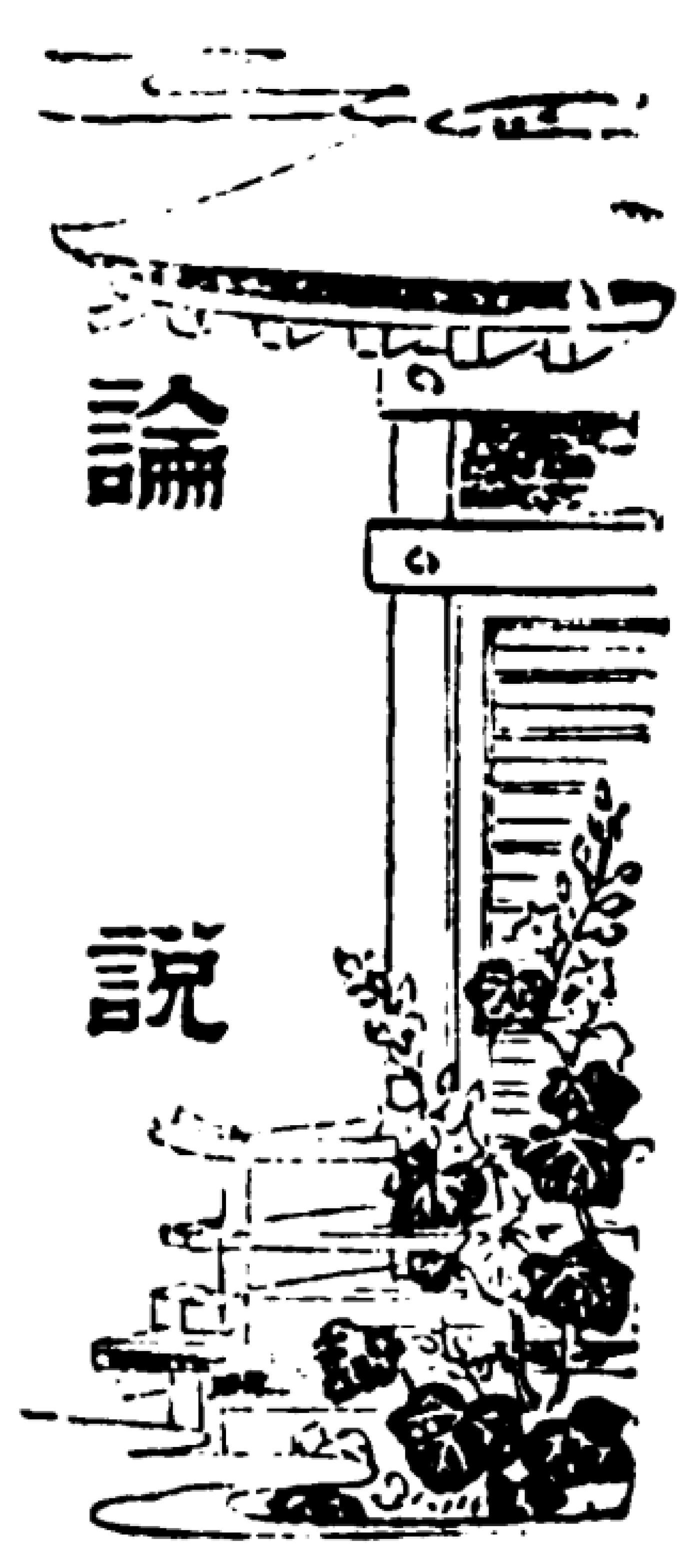
中秋無月に就きて

月々に月見ぬ月はなけれども、月見る月は八月の月。げに月々に月はあれども、八月の月は尤も明く、尤もさら、尤も澄みぬるものなれば、八月を月見月とはなせり。されば、むかしも今も此の月を偏に目出度がりて、巴蕉が句にも、三日月の頃より待ちし今宵かな。など云ひ、はやく明月を見むものと待てる、此の人のみならず、みな人の望む所にて、われらも殊に、三日月の頃よりにはなく、秋のはじめより、否夏より、否春より、否々去年秋のくれしより、早く來年の中の秋十五日をと、偏に七夕の一夜の如く思ひあこがれ「秋はなほ木の下かげもくらかりき月は冬こそ見るべかりけり」の歌も感じ稱するものあるも、何の秋はてし後、附會歌、何かは秋にこらて見んやとて、さはりなき月影もたゞ心空に仰ぐのみ。やう／＼春立ちて、てり

もせず、くもりもはてぬおぼろ月夜にしくものなしとながめし人もあれど、何とてはおぼろの月、明月にしかむ。はやく霞の衣ぬげよなどうそぶきぬるも幾度。春も去りたり、夏は殊更夕立のあつさを洗ひつくしたる軒の玉水に、月の落つるも涼し、夜半の水鷄の戸を叩くにも月見よとての音など云ひめつるあれば、忘れては我かとぞ思ふ片岡のならの葉分けて出る月かげ。など云へど、何とて、かやうの月、秋と見るべき。かた岡のかたおとしの心やなど云ひて、偏にたゞ中の秋をまち、十五日の月を待ち、雲かゝらずならば思ひがけぬ人も來り、しかも雁がねの列みださずに亙るかげのうつらばなど、滿るに滿るをまち、晴るゝに晴るゝをまち、しかも人もとひ、厂もとひ、鹿もとひ、まして櫻の花のかへりさかばとまでに、まちしを、かなしや、むねんや、情なや、宵になるも月出でず、夜半すぐるも出でず、せめて雲かゝりたる月にても又身にしむるかたもあらん、あはれ、我が心をいとをしみて、影うすくともあらはれよ、雲ながらも出でよ、夜の更くるに、一寸の影だもと偏に心にいのりぬれど、遂に美人のかげは雲ながらもあらはれず、遂にくだかけの聲する

もいと憎く、狐に食ますゞと叱るほどに、くだかけの聲もしばしやみたり、月はなほ出でず。雲ながらも影もあらはさず。あはれかくと知らば、春の月、冬の月、夏の月、かくは捨て、かくはのゝしらざりしものをと思ふも、それたゞ我が空なる月のたゞ滿つるをまちたる我が思ひの淺はかなりしにて、たとへ、この夜の月出で、人もとひ、厂も來りしとて、明日はとくかげんを、かげしとて、己がなせし月ならず、空なる月のかぐるをいとふとて、つかむ事も、握ることも出來ざるべし。萬事皆しかり。たゞ己が力に叶ふほどにみたしめて、空なる事をまつべからず、人をたのむ、神をたのむ、佛をたのむ、みな空なり。たゞ我が力もて、我をみたしむへし。もし空なる事のみつるを強ひてまたば、やがて、我が、空の月の滿つるをまちしに異ならず、口惜しく、悲しき目に遭ふべし。





割烹と禮節と（六）

石井泰次郎

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

有。住。齊。氏。

有住齊氏は、奥白河阿遜の藩士にして、二十歳の頃、大脇晋輔重恒の門に入りて、松岡氏が傳統の禮節を學び、又松岡明義氏に付て其所論を研究し、終に松岡氏が禮節の傳統を以て氏に託するに至りたるなり。松岡氏が禮節の傳統は、實に近世禮節の根據として、後世に傳ふべき物なり。其傳統の齊氏に傳はれる順序を畧記せんに、

伊勢貞丈
水島元成 ―― 伊藤幸氏
伊藤幸督 ―― 伊藤幸辰

松岡辰方	松岡行義
松岡明義	有住齊

松岡辰方は伊勢貞丈が門に學び、後伊藤幸辰が門に學びて、時世に實用せらるべく、古今の禮節を、用捨考究して、敎授の門を張り、表面には一百年來の流行に隨ひて、水島が小笠原を敎授し、裏面には貞丈翁が確守せる故實の事を敎授し、以て時世の大勢を考へて、實用せらるゝを主旨として、其名聲、舊幕諸藩に聞えたりし禮節家なりしなり。齊氏は其傳統を受けて、禮節故實に精通し、國學者中にも、其故實の事に渡りては、氏に質問をなして敎を仰ぐもの多く、隨て敎授に、著述に、故實に依て其方法を論せざるはなし。然れど、氏を目するもの、氏の意見の深淵を探らず、氏が敎授の傳統を尋ねずして、只故實に精通せるを以て、氏が故實禮節の敎授者なるを目して、禮節を學習する者は、氏を小笠原清務氏の次に置て是を歡迎し。又禮節の可否を論せんと欲せる者は、現今の實用に故實を正すの必用なしとなし、小笠原の僞稱を迷信して、即故實禮節の正統を不信に歸したるなり。

有住齊氏は禮節家の正統、將故實禮節の首唱者を以て歡迎すべき禮節家なり。一百年來

の流行に依らず、二百年來の弊風をたのまず、足利時代の禮節のみを確守せず、遙かに上古に逆泝して、神代禮節の樣に至るまで、殘る所なく考證、研究して敎授の門を張りたる禮節家なり。伊勢貞丈翁が所論を主眼として、松岡辰方が講述を修め、水島元成が附會説を放棄して、律令格式に、記錄物語に、歌書國史に附て、立座禮節の出處を尋據して、伊勢翁が執行せし、近古流の禮法に偏せず、水島氏、松岡氏が敎授せし、近世流の禮法に偏せず、又實用と名稱して、國風も思考せざる現今の田舍禮節の群に一步も踏込せず、伊勢翁、松岡氏が上に出で、兩氏が未だ世上に敎授せざりし、禮節敎授法を起し、故實禮節と稱して門下に敎授せる禮節家なり。

然るを、世人は、氏が禮節家の大家なるを知らずして、小笠原清務氏と並べ稱したるは天地の別ちをも分別しあたはざるが如し。小笠原清務氏も定めて所論あるべし。定めて著書あるべし。論者は未だ不幸にして、是あるを聞かざるなり。

故實禮節とは何ぞや。是他ならず、(僞稱禮節家小笠原の三文字を以て、伊勢家の禮節敎授法を、乱雜に敎授し、近古、中古、上古にもあらぬ事を、作意して敎授せる小笠原流の禮節家が夢裡にも知る事を得ざる)上古、中古、近古、近世の正直なる繼跡ある禮節を初めとして、時世に用ゐらるべく、其順序を設立せる禮節を云なり。

氏が禮節家の正統にして、又禮節に一身を勞せられたる程度は、大方かくの如し。なほ氏が禮節に付て盡されたる事實を、其著書、筆錄に付て陳述せん、

著書には、

◎標ハ既發行○ハ未發行

○故實禮節（男禮ノ部）
○同（女禮ノ部）
○雪姑首尾（婚禮ノ部）
◎類聚婚禮式是は雪姑首尾ヨリ取レルモノ也
○類聚元服式（一名丁年式）
○類聚產所式
○類聚祝之書
○故實禮節（茶之湯ノ部）
○年中儀式
○源氏物語者證釋圖
○源語考演題
○梨花一辨
○女禮式ト婚禮式
○古事類苑（布帛門冠服門）十卷

右の外、筆錄、日記、紀行を藏せり。古事類苑中の十卷は知らず、他は皆論者が借覽せし所なり。まづ其中につきて、雪姑首尾の緒言を擧げて、類聚婚禮式の比評を試みんと欲す。

雪姑首尾緒言

一日本書紀神代卷上諾冊二尊條一書曰陰神先唱曰美哉善少男時以陰神先言故爲不祥更復改巡則陽神先唱曰美哉善少女遂將合交而不知其術時有鶺鴒飛來搖其首尾二神見而學之即得交道○日本紀私記曰止豆木乎之閉止里止豆木乎之倍止利（天文寫本・和名鈔）八雲御抄亦仝○物產相感志曰鶺鴒俗呼雪姑○毛詩品物圖攷云脊令在原傳脊令雝渠也飛則鳴行則搖不能自舍耳とみはたり故に婚儀の交教鳥と稱呼す因て題號と爲し本邦故實の婚法を蒐集し適宜の法を設て古今大禮の法則嚴重なりしを泰西に向て誇らんとす首尾の二字は起原より整備に至るを指すなり

一編纂の要旨は捷覧を思惟して六門に別つ第一婚儀考証首事第二結納之部第三嫁迎之部座敷裝飾第四調度之部并衣服第五饗饌配酌之部第六雜事并三つ目以下尾事と爲し一部毎に參考一卷を附記し先蹤を用捨して故實を不失を要す

一本朝開闢以降未佛典漢籍を不交頃の禮法は萬質朴にして自然今の泰西法に粗似たり熟考するに天然の淳直なるは何國も亦然るならん韓籍わたりて人造の法則出來り剰弘仁の朝天下儀式男女衣服皆依唐法の詔書下るに及て太古固有の全體遂に跡なく典籍すら傳はらず僅に正史中一二行を摭拾するのみ悲哉今日探知する術なきに至れり故に婚禮の考證最も粗也足利氏禮法を設置せしも猶唐禮に泥めり爾來數派の流名世に興りて近代は細密に過殆煩はしきに至り在て中々に禮無き如きもあり然る故に往々是を迂遠と云卑屈と嘲る者あるも亦宜ならずや於是時世を明治維新以來時運の變遷に斟量し一般一途の簡易法を設置せざるへからずと雖此伎を痛惜する人に會せず今や道已に斷絶せんと欲るにいたれり余不敏にして克之を挽回する力なしと雖先蹤を拔擢して其適否を質んとすれと蒐集の書に富ず螢雪の功微々たるを憾む

一各派の傳書に伊勢小笠原を此伎の首魁とす伊勢家は足利氏殿中の法則を掌りて古書傳書多しと雖私家諸祝儀の如きは預り知れるにも非ず故に適婚迎之記の如きもの世に遺るといへど伊勢一家の私流に止り弘く諸家一般の數則にはあらざりし也後世貞益貞丈兩氏の錯簡書出て中は上木し中は寫傳す最も摘要に便也小笠原流と稱るは仝家は元足代家弓馬の師範たれは其道自ら異なる如きなれとも是亦一家私流弓馬故實の力より編成したる祝儀法もありしならん既に傳書中長時長殿の奥書あるあり元祿年中小池甚之丞水島卜也の二氏二派に分れて小笠原流と稱し種々の書を作り出して傳書と爲す又此流派は上木するを嚴禁したれは寫も世に公にせしものなく悉皆寫傳たるか故に傳寫の誤謬甚しく文の錯亂も亦少しとせずされば爰に擧るもの丶流布の書と大同小異多からん乎

一余か師松岡氏之家傳祕書に云流儀の書に他流の書を不可看交且口授秘傳其位置に不達者に不可語是從來此門の掟也然れとも維新以來此伎の衰微せる時に際し獨飲食を忘れ大息に堪へす

此掟を破りて弘く美事を世に遺し此道の再興らん日を俟にしかじ狹く師家の掟を固守して傳書の世に斷絶するには勝れりと愚量口授口傳の秘事をも登錄して時世に適せざるを捨て簡便なるを取て遍く江湖に適否を質す

一此書編纂に洩れたるは追漸以て增補し大成せんことを欲すれは先一二の書に部門を頒つを初としやかて淨書に着手す且參攷書は悉も杜撰の責をうけさるを要て考證中に據らさることなしされは弘く考證を登記せさるへからす

一婚姻首尾編纂に差次產所及冠祭其他從前の諸祝儀の禮法も編纂せん意旨ありと雖近年多病にして衰弱したれはよく大業を果し得るや否

明治廿二年三月起稿

有住齋

女德のをしへ（十五）

三輪田眞佐子

第四憤怒

貝原益軒翁の自警編に、凡そ七情の中にて、德性を害し、人物を傷け、精神を損ふものは、怒より甚しきはなし。學者こゝに於て、尤も意を加へ痛くこれを抑ふべし。放過する勿れ、怒るとき言を發すべからず、恐くは過激の言あらん。これを戒めてよ。人を責むる辭は迫切激勵すべからず。奴僕に於て亦忿勵を戒むべし。事不可なるあらむ則ち詳に處すべし。怒を以て事を敗るべからず。とあり、亦女子もこれを假りて自警に供すべし。

すべて女子は天性柔和なれど、暴怒して過激なる行爲を外に現さゝると同時に、反りて

内に鬱憤の積りて、仄に火にも入らまし水にも投げましとおもふもあり、殆ど堪忍の及ばざる傾きあり。亦諺に、女子の一念は岩をも透すといふ如く、たま／＼憤怒するときは、その精神はど／＼狂亂するに至るを以て、苟も女德を養はんと願ふ女子は、つねに憤怒を抑制するやうつとむべし。然らずして精神の狂亂に委ねんか、如何なる失態を惹き起さんも知るべからず。

聞く、總て野蠻人は短慮なりと。蓋し彼等は未だ國家なる制度の下にあらず、唯我が意のまゝを行ひて、他人の利害を考へざる習慣なれば、一朝その意を遂ぐる能はざるときは、忽ち怒る氣質となるらん乎。文明人とて憤怒し易きもの少なからず、そは亦氣隨の習慣に由るならん。如何となれば、得意の地位にありて屢々憤怒し易き人も、失意の境遇に墮落すれば、おのづから平温の風と變せし例もありければなり。亦概して老年に向ふにつれて憤怒の度を減ずるは事實なり。そは若輩はその血氣の盛なる勢に乘じて憤怒せし證にはあらざるか。兎に角女子たるもの怒憤を戒めざるときは、舅姑を安んずること能はず、良人を慰むること能はざるべし。亦時とすれば、憤怒のあまり兒童の頭部を打ち、施いて腦病の原因を作る母さへありと聞く。なは婢僕だに、内君の憤怒を恐れて暇を乞ふことありとかや。されば、憤怒を戒むるは女德を養ふにつきて肝要なることぞ

かし。

第五　傲慢　小野の小町は出羽の郡司の娘なりけるが、容貌の嬋妍たりしは、さながら芙蓉をあざむかんばかりなりしのみならず、文才秀でゝ尤も國詩に堪能なりければ、世人に仰望せられけるを以て、おのづから傲慢の氣風となりて、衆人を蔑視しけるが、やがて頭に霜蓬をいたゞき、艶色衰ふるに至り（花のいろはうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに）と感涙を濺ぎ、遂に文屋康秀が三河の椽となりて下るとき（わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ）と哀願する醜態を顯はしけりとかや。易に曰く、亢龍悔ありと。實に人たるもの、身のほどを知りて傲慢の心を制せずば、幸福なる生涯を送ること能はざるべし。今日美貌のため、あるは學才のため、傲慢の心を生じ、過度の望を懷き、遂にその目的を達せざるより、獨立など非倫の説を唱ふるものは、小町の末路を以て鑑となすべし。

亦易に、天道は盈を虧き而して謙を益し、地道は盈を變じて謙に流く、鬼神は盈を害して而して謙に福す、人道は盈を惡みて而して謙を好む。とあり。されば、女子は感情に富むを以て、能く泣き能く笑ふと同時に、一旦零落すれば忽ち萎痺して立つ能はず、一般世人に向ひては萬事卑屈に流るゝめり。若し亦良人の名聲に醉ひ。あるは、一家の富貴

に乘ずれど、反りて男子よりも比較上甚しき傲慢の心を起し、他人に對して不遜なる擧止を憚らざるめり。希くは世の時めく女子たち、顧みて傲慢にな陥りそ。元來傲慢の種となるものは、富と位と及び智との三ッなるが如し。されど、女徳の高まるにつれて、女子の謙遜なるは、さながら稲穂の成熟するに從ひて、その頭を垂るゝが如し。そも〳〵富と位とを恃みて自ら傲慢なるものあらんも、誰かこれを心中にて敬せん。亦智を以て傲慢するものは、あるは惡まれ、あるは陽に敬して陰に遠けらるゝものぞかし。唯ある女子こそ自ら謙遜せんも、人はこれを欽慕するに至るべけれど、必竟傲慢の人の望みて然も得べからざる快樂を得るに至らん。世人が、女學の研究は往々弊害を生ずといふ所以のものは、その才學を恃みて傲慢となるを以てなり。文字ある女子戒めざるべからず。されど、おのれは更に言はまほし。傲慢の心あるものは、未だ敎育の完成せざる女子なりと。

なほ注意すべきことは、外面は謙遜を装ひ、裏面にその反對をほのめかすものは、反りて忌むべきものなり。亦謙遜と誤信して卑屈に失するなかれ。

史談



青山延于の母

鹽井ふく子

は丶その露あまりにれきまどふべからず、さりとて又つゆなくぞあるべからず。いつくしき庭の撫子れぼし立てむはよく〳〵の事なりかし。あはれ、字は子世、通稱を量介、雲龍、又拙齋など號して、水戸藩の鴻儒と世に知られたる青山延于。母は内田氏にて、父を延彜と云ひ、祖父を興道といひて、其に水藩儒臣たり。内田氏人となり、貞淑温順にして、よく婦道を執り、夫、舅姑に仕へて孝養貞順至らざるなく、家を治め、子を敎へ、奴婢を御する、みな法あり。内田氏もと生みの子なく、七去の罪たゝれそれたゝかしこみ仕ふるを、天あはれと思ひてや、妾のはらめるあり、やがて玉の如き男子生みれとせしは、即ち延于にて、内田氏は腹をもいためずこの賜ありけるに、いたくよろこび、たゝちに巳か子とし、いたくめでいつくしみける。さながら生める子の如くなれど、延于もまた信濃なるそのはらにしはなきと云ふを知らず、たゝ誠の母、生みの母と思ひなつかしみ、いぬる度さむる度、母よと呼びぬ事はなかりき。さるに延于やう〳〵若竹の節のびるに從ひ、たゝ思ふさまに遊ぶをのみ好み、父のみの敎も、母そゞの呼びかへすもしら雲の他處にして、たゝつゞな、すみれにあこがれ、胡蝶のゆめのやがてさめなむ世をも思はず、山野に狂ひ暮らし、書讀むことなどは兎角いとひぬるに、父のみの父一節に剛く、敎へんとしては怒り、怒りては之を鞭撻し、延于を一間によびては、淳々人の道、學びの道、子たるの道、あるひは聖賢の幼き時尋常に異なる事を說き聞かし、不肖の兒となりて家聲をれとさざらむことを說き示しぬれど、延于も道理に服しぬれど、兎角遊びに心走り、又

やたらちねの庭の敎へいつしか他處に驅け出でゝ、犬を追ひ、蟬を狩り、父が不興のしもとを受くる事なほ多かるを、母は悲しみ、退きて又延于に聞かするに、孟母が機を斷つの事を語り、孟子は其の母の敎へに忽ち心をひるがへし、一筋に學に志して家を起し、名を擧げ、世を救ひたり。おろかなる母はおん身を敎ふるの道を知らずして、父君が御心をいため、家聲を落さむとするくやしさよとて、涙に敎へ諭しぬれど延于も人の子、母か泣く涙の身に浸み、やう〳〵學問をはげみ、長ずるに及び、業を立原氏にうけ、力を文章に專らにし、晝夜琢磨し、自ら柳文を寫し、文才大に進み、いたく卓絕して、時のために稱せられ、年二十餘にして、水戸の鴻儒と名にたちたる紀平洲、山本北山等と交を結び、時に水戸藩文學隆興し、高橋垣宣、藤田幽谷、川口綠野等の名高き人々と對峙して馳せ、駿々乎として先を爭ひぬ。而して文辭に至りては、皆延于を推して擅長となすに至りぬ。延于の父延彝祖父の興道、皆小官に終りぬるを、烈公の代興道館を起すや、延于を擢んでゝ小姓頭となし、總裁をかねしむるに至れり。時に延于年六十餘歲、學館にのぼり、孜々として懈らざりしとなり。而して延于人となり剛直にして、諛を憎みしかど、流俗のために容れられざりしかど、武烈二公はいたく延于を優遇し給ひ、耳に逆ふ諫言も大方は容れられきとなり。延于さやうにありがたき人となりたるは實に母の賜なりかし。

安部則任の妻

白松園主人

むかし、みちのくに、叛旗を飜へしける、安部貞任が弟に、白鳥八郎則任といふものありけり。貞任、暫しは猛威を振ふものから、天誅のがれがたく、遂に、將軍源賴義のために、一族數を盡して、うちほろばされける時、則任は降人に出でけるを、やがて縛められて、都にひきのぼせらる。則任が妻、初めより、さま

くに、降參をとゞめけれども、更に聞かざりければ、君强ひて、都に赴かせ給はゞ、必ず、妾が諫めまゐらせし言の葉を、思ひ出で給ふべし。幼きものも男の子なれど、所詮失はれ侍りぬべし。かゝれど、妾いかでか、獨りながらへて、天が下には住み侍らん、さきだちて、黄泉國なる、路の邊に、待ちまゐらせんとこそ、思ひ侍れとて、泣々も別れつゝ、ことし、三歳になれりける子を、かき抱きて、峨々たる高嶺によぢのぼり、千仭の斷崖より、身を投げてうせにけり。則任この由を聞きて、悔いなげき、今はとく死なでやと、官軍に請ひけれども、許されざりしかど、自から、頭を嶽に碎きて死にけり。

則任は、朝敵なれど、いふにも足らねど、此妻の心よ、夫のいふがひなく、命をしみて、生恥を晒さんとその、うたてく、身をすてゝこれを勵ましたるぞ、ゆゝしき、振舞とやいはまし。

家政

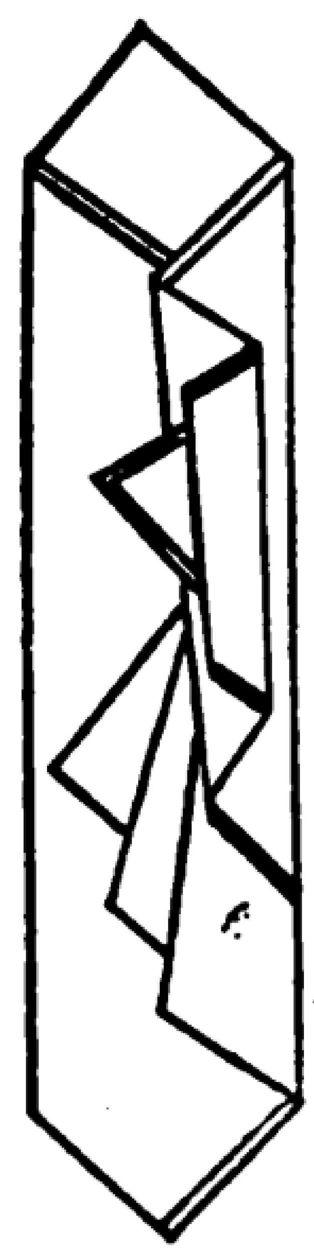
包の記

有住齊敎授

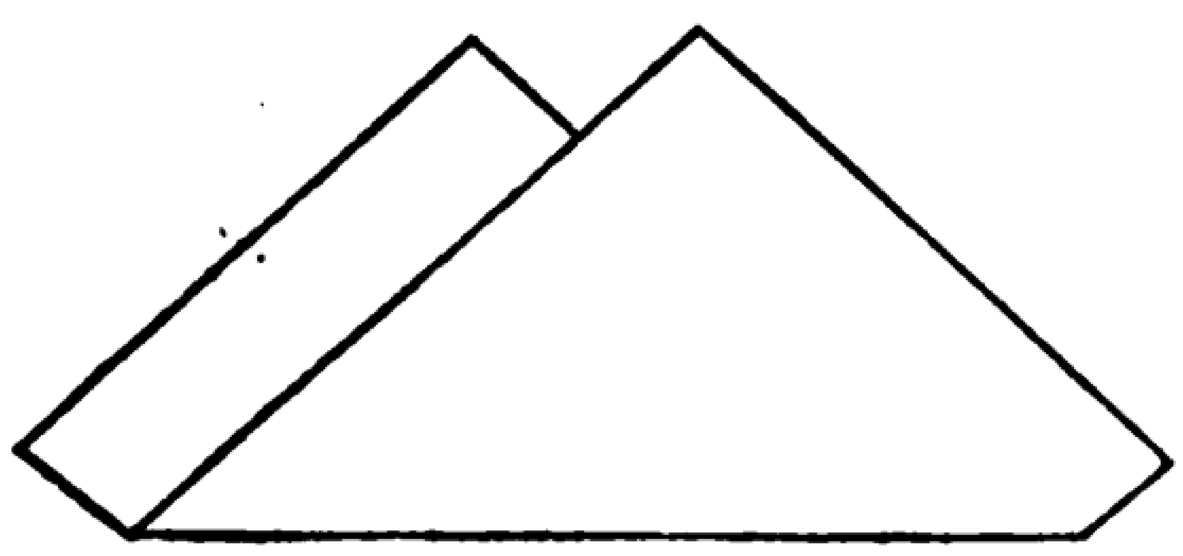
門人 平みな子
小林眞子 筆記

昆布包

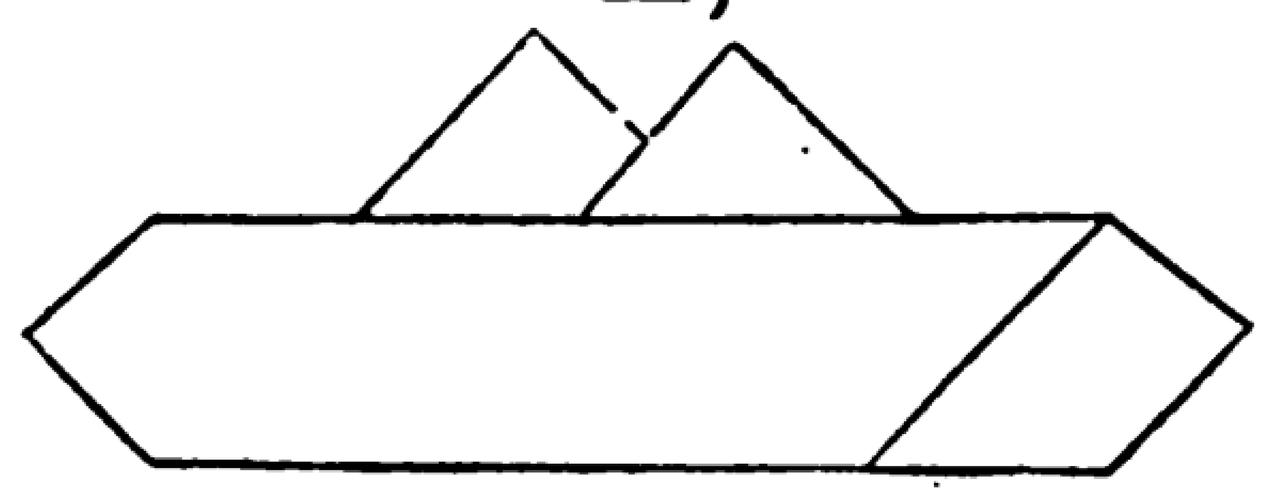
年賀言祝の臺に置く。



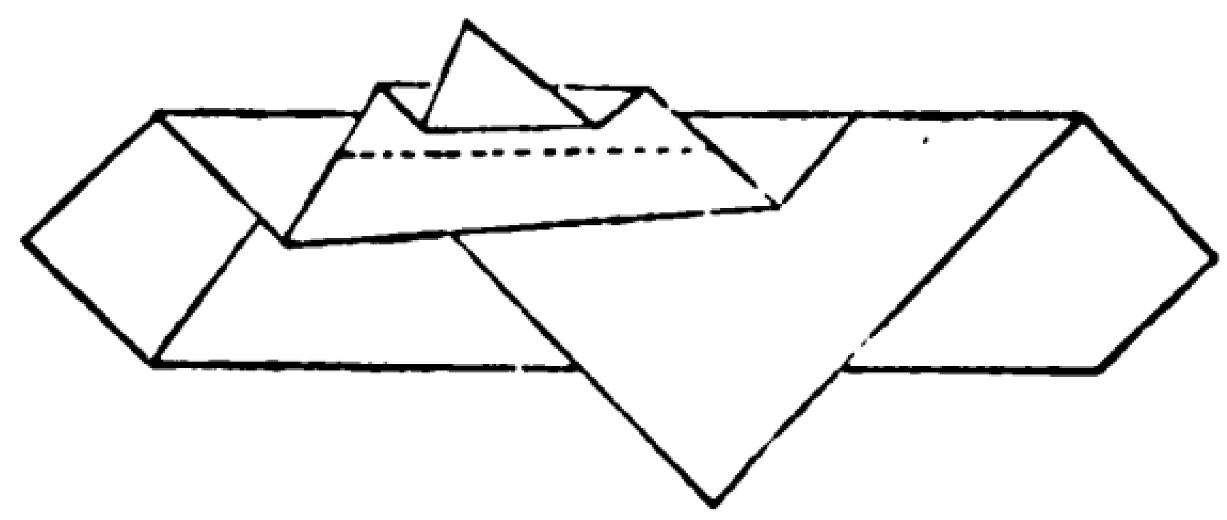
（一）



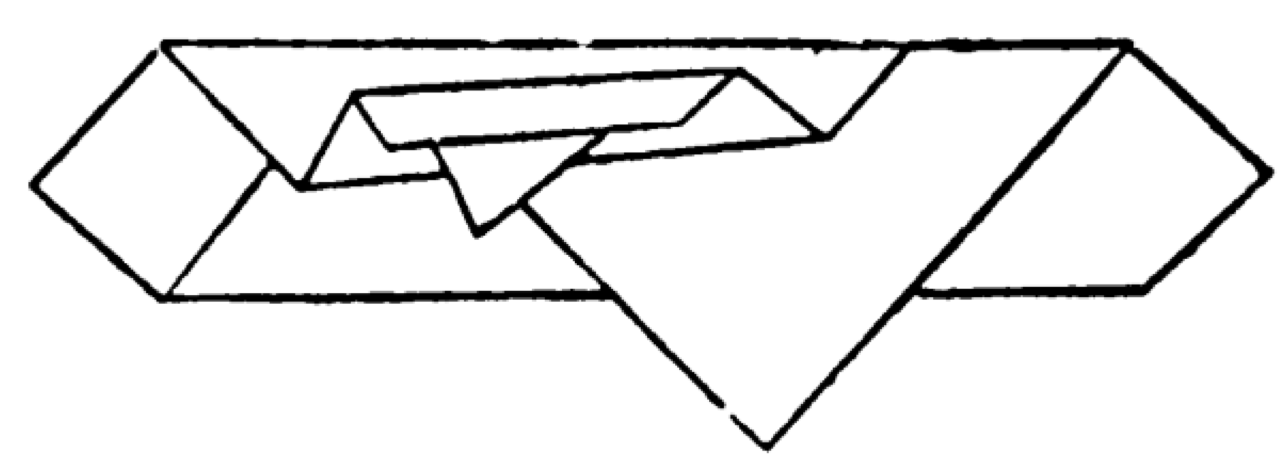
（二）



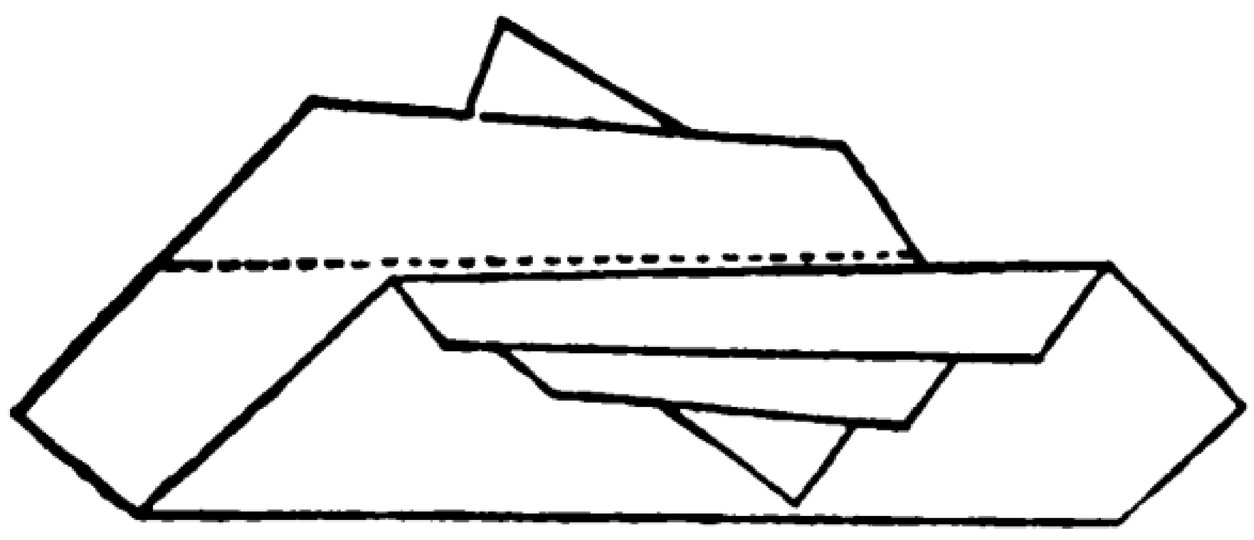
（三）



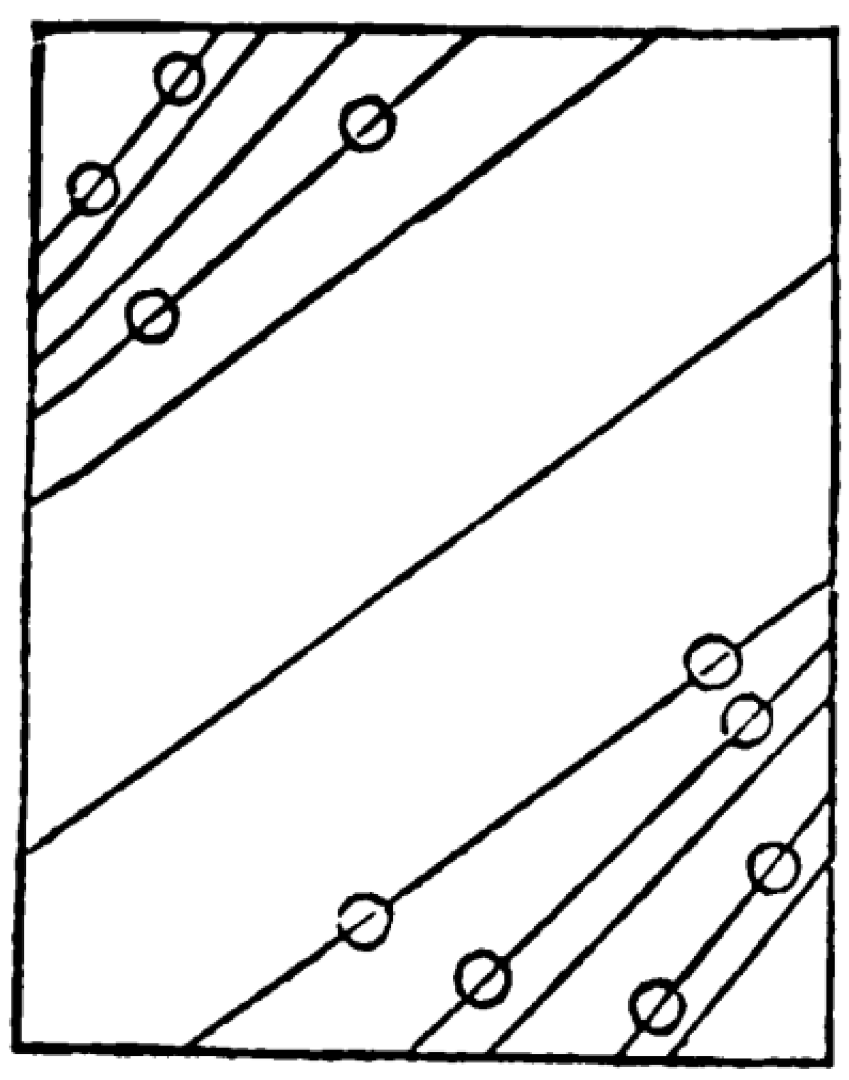
（四）



（五）



（六）



先づ裏曲の法によりて紙取をなし、第一圖の如く二つに節違に折り、次に、其下部を向ふに一つ折りて第二圖の如くし、次に之を裏反して折り端を手前に向け、第三圖の如く折りなし、其點線の處を手前に向けて折れば第四圖となる。さて斯く折りたる上の方を向ふへ開き置きて、下の方を第五圖の樣に折り、後、上の方を元の如くに其上に折り重ぬれば折り上るなり。

右の如く折り上げて、其折め〳〵に墨にて標の筋を引きて悉く開きて、之を形紙となして、更に折るをよしとす。第六圖は其折り上げたるを皆開きたるにて、即形紙を示せるなり。標を付たるは凹みたる線にして其他は凸みたる線なり。

斯の如く形紙をつくりなして、次に、つくるべき奉書など取出して、裁板の上に置きて、形紙を表を上にして奉書紙の表の上にのせて、合し、錐にて四方の横面に標をうちて、形紙を取りのけて、定木をあてゝたちれとし、次に又奉書にて裏をつくらんには、奉書紙の

上に、裁ちたるを重ねて糊にて眞中の處を着けて、四方共に一分程づゝ匂ひを殘しおきて裁ちおとすべし。かくして形紙を表にあてゝ、筋の處に定木をあて、筋付にて筋をつけて次々に折りなすべし。

茶の湯

茶禮初學

關　葦雄

偖亭主は此等の事を咄しながら、風炉の前に向ひ、帛紗を取、塵打して疊み、釜の蓋をしめ、先蓋の摘向前と拭ひ、帛紗疊直し、右の手の掌に持、籠風炉の右の方横腹の所を前より向へ拭ひ、直に前の方へ拭ひ戻し、帛紗を左手に持替、同じく左の方を前より向へ、向より前へ拭ひ戻し、又再び帛紗を右の手に持、一つ折、風炉の前、瀧口の緣を左より右へ右より左へ、中にて止、中へ拭ひ籠べし。次に帛紗を腰に付べし（但し是は土風炉面取にての規則なり、風炉により差違ありと心得べし）客方、上客は此業前中に掛物の挨拶を爲すべし。扨御軸は誠に結構に拜見仕候、虚堂和尙も稀には有之候得共如レ斯美麗特に偈の文も禪門悟道の垂辭に有之樣拜見仕、誠に茶に適當御表具も一文字、風帶は紫地の印金、中廻しは古金襴上下は古き七子地、軸は象牙又疵氣も無之十分の御藏軸數奇幾層相增候、品定て御傳來も可レ有レ之箱書付極札等も附屬勿論の事と存升、御跡にて拜見仕度抔と賞歎の言葉辨舌を盡して申述べし。二三の客も上客の翼尾に付て珍重の由を言べし。亭主は謙遜して御賞讃程の品にも無之併虚堂和尙の筆は眞正にも可レ有レ之、亡父も至て大切に所持、極札は了意了伴二氏の極め、箱書付は澤庵和尙と申事。客は實に左樣に可レ有レ之普通の品に無レ之、又御跡に

て拜見を願升。御覧に可ㇾ入と云。又四方山の閑話有て可ㇾ然、亭主は咄ながら勝手口に下り、時刻にも相成候間飯末の湯漬差上可ㇾ申と云て一禮勝手口を〆切、此時客方は御都合次第と云、又亭主の身分に依りては御給仕は御通の衆を御遣可ㇾ被ㇾ下抔と云へし。

一膳不殘出し勝手口締切

不羨曰膳付捽方は、飯椀は左の方、汁椀は右の方、向付は膳向の正面、前に箸を付る（但箸は利久形杉の兩細口なり。前の縁へ捽掛る）飯汁共に始めは輕く盛付るをよしとす、向付も同樣なり。扨亭主は席次の間疊敷なれど、出口を座帚にて輕く帚べし、次に膳を控へ、勝手口に据て大皷張を引明け、膳を持出、先上客の前に持往進むべし。上客は些少進み出て兩手を出し膳を受取、直に戴くべし。是則辱しと言意なり。亭主も同じく時宜すべし。退入て次客の膳を持出進む、次客も上客の如く請取、直に戴くべし、三客四客五客迄段々如此して膳出し終らば、亭主は勝手口の際にて不加減にも可有之、なれ共寛々食上り可ㇾ被ㇾ降と云て勝手口を締切べし。客方も輕く一禮難有と言べし。次に客は互に御相伴抔と挨拶して飯を喰ふべし。婦人は疊紙を出し、膝の側に置、左右の手にて飯椀の蓋を取、打反し。下座の方に置、次に汁椀の蓋を取、飯椀の蓋の上へうつむけて重ね置べし。重ね難きは打反して並べ置べし、而後箸を右手にて下より取、左手を添て持直し、先汁椀を取り汁を二口吸、下に置、飯椀を取飯を喰ふべし、二口喰ふて飯椀を置、汁椀を持、實を喰て後汁を吸べし。下に置（但し此時多分汁は吸切に成ものにて。蓋をして置べし）次に飯を喰、向付を喰べし（但し是は多分作り身加減酢を掛、山葵を加へ有もの也、酢と山葵とを能箸にて捽交て喰ふべし。

（未完）

女禮

有住常子

片側列座膳進め様

片側に客人の並居たまふ時には、其人數に隨ひて、膳を一行に人數だけ持て出で、

一の人は靜にすゝみて持出るに、二の人、三の人と次第に早く進みて持出るなり。

まづ二三尺ほどづゝ隔てゝ持出で、御前に至り、右座に御並びの時は、踏止まりて、左足を右足の先に横につけて右に向直りて進みて、左足を半足ひきて、跪きて居ながら膳を下に靜にまがらぬやうに置くべし。さて居りて、膳の足をおして、進め參らすべし。一同おなじ様に早きおそきなく進めをはりて、左右の手を前にひきて、右の手を右膝頭につけて、右膝をすこし引て、左の手を左膝頭につけて、左膝をすこし引て、共に引ときに左右を爪立て、左右の手を膝の上に置きて、右の膝頭をすこしうかして右の方下座へ、ひらきて、共に立かへるべし。

ひらき様は、左の膝を疊にずらして、右の膝をうかめて右にめぐる事なり。下座の人、早めになすべしそれより次第にめぐりて一同そろひて、皆々下座をむきたる時、共に立あがりて、左足より進めて、立かへるべし。

同 左

左座に並居たまふ時には、膝のつかひかた左をうかめて立かへる如く、すべて、足のふみかたも右のうらうへになすなり、そのほかたがふことなし。

同 引様

まづ進み出で、

稽古の時には下座に配膳人なみ居て、右座の時は、右の方より、まづ爪立て、右膝をうかめて、右に腰を捻りて、ますぐに向ひ立て、一番の人進みゆくべし、其次も次も、同時に右に捻りて、二番の人右に

ひらきて一番の居たる所まで横に進みて、其所にて右足を左足の先につけて直に向直りてあとにつきてゆく、三番四番も、皆かくの如くして一行に進み出るなり。

左座の時は左膝よりすべてうらうへになすべし。

立かへりたる時も、あとの人、一番の所に至りて、右座の時は左足を右足の先につけて右にあゆみて、先の居りたりし所に至るべし、あとよりつぎの人もかくし、つぎ〳〵もかくして、一番の人、一番の所に前の如く居る様になすべし。これは稽古の時の様也。

引時には、進み行きて前の如く御前に至り、前よりも遠く、膳より二三尺隔て丶跪きて、左右の手を進めて右膝を進めて右を居ゑ、左膝を進めて左をすゑ、しかと居りて、

これは膳のとりあげよき程に進む進みやうなり。

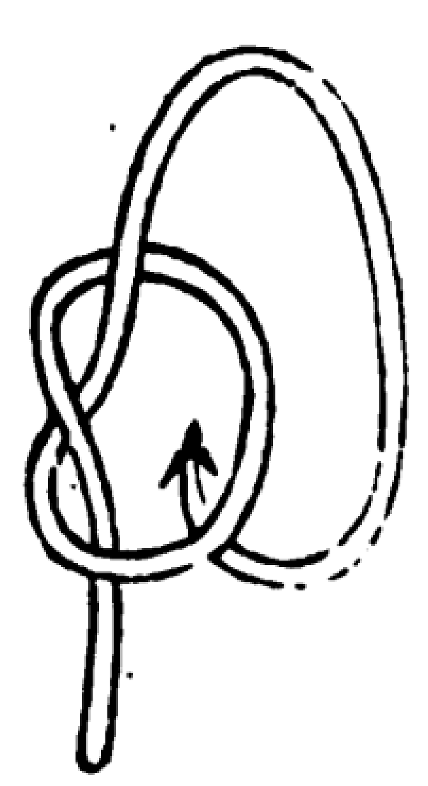
左右の手にて膳の足をもちて引よせて、待て、右左と膝を引て爪立て、あとの人より下座の方へめぐりて立ちて立かへるべし。

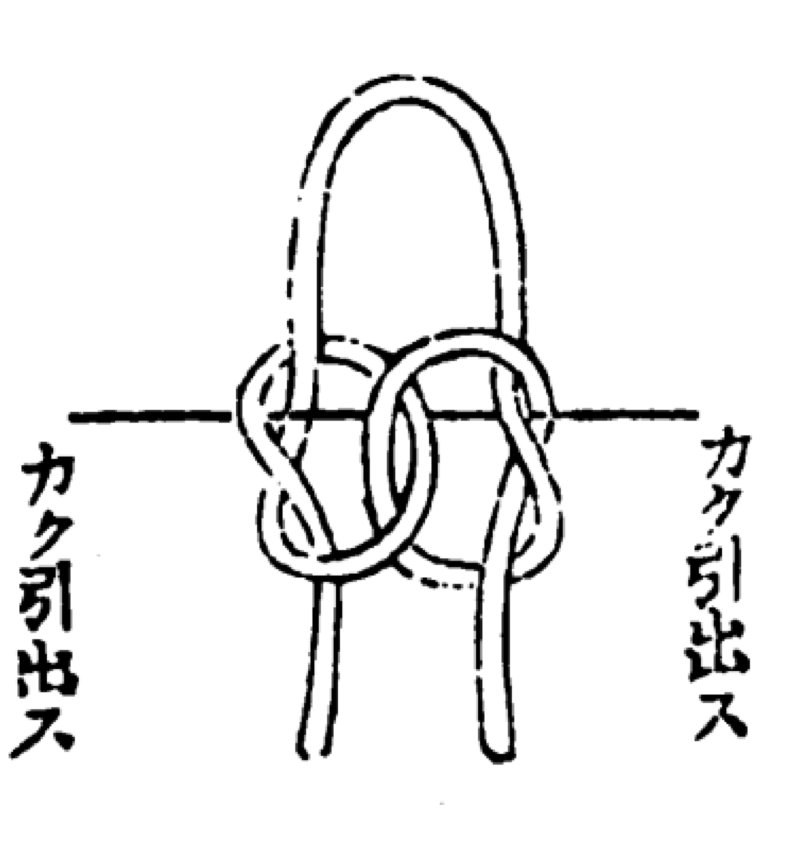
新撰 結物百種

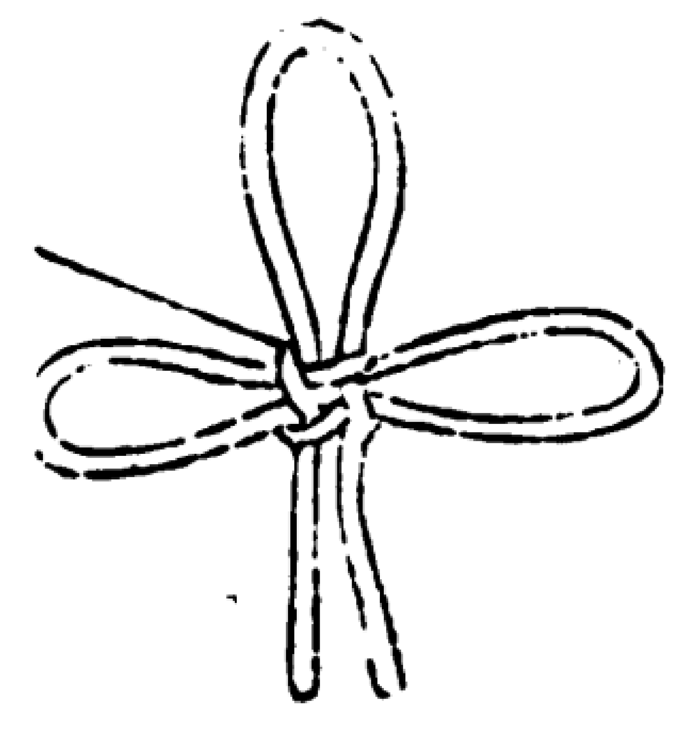
百草菴一無

上巻結　是は神の道具に用ちる結なり。御簾、或はすだれ、或は幕等に用ゐ來れるも、當世は小袖の袖口の飾に用うるもよし。

（石井泰次郎云　上巻は總角なり。近世の書に總角の人形と分ちて記せり。通常は入形に結ぶよし見ゑたり。伊勢家の結の記にも、入形に結びたり。同記に、あげまきは鎧のうしろ、又は御簾などに付くるなりと見えたり。）







此の處人形なり

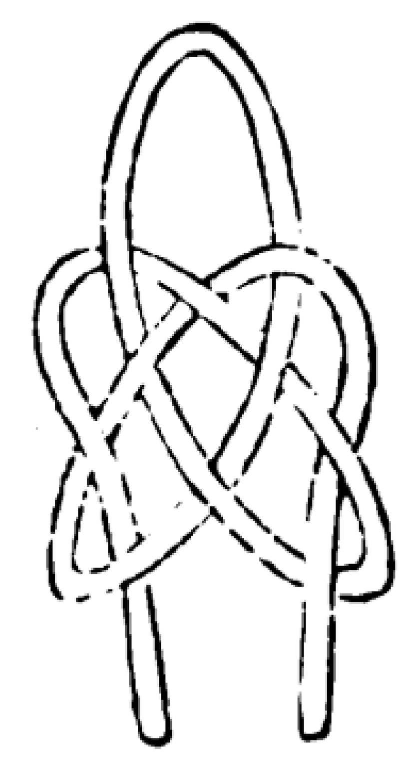
結び上り

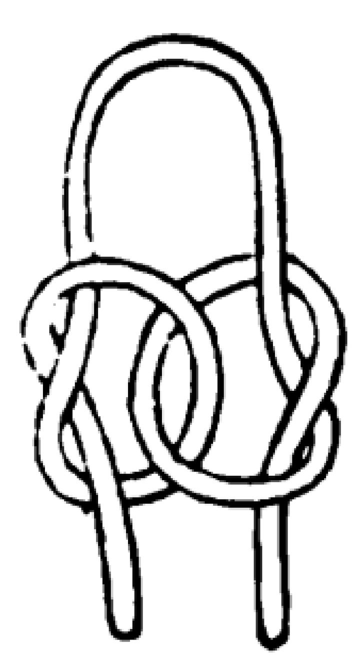
四ッ菱結及總角じめ（泰次郎いふ、是は華縵結と同じく佛具に用うるよし書に見えたり。）





結び上り





斯くして上下に引き締むれば總角じめなり。結び上りの下部の如し



これたびは、西山たい子の君はさらぬことありて「たちぬひ」をやすむ。

だいどころ

四季料理の取合せ

秋の部

一 椀盛

黒鯛の切身に、初茸、つまみ菜、口柚子○鯛の切身に、みる貝、みつば、口柚子、よせかれひ、せんまい、木口牛房、柚子○海老のたゝきに、松茸、冬瓜○鶉のたゝき、さゝ松茸、花菜○竹筴魚の切身に、初茸、つまみ菜、柚子○そぼろ豆腐、まつたけの薄切、鴨、おぼろかけ○鴨の作り身、半月しんぢよ、しぼりゆば○かき、松たけ、ふきのたう。

一 酢の物

さけのはらで、大根おろし、甘酢○さけのさいがた大根おろし、防風○しめあぢ、防風、わさび○貝のは

しら、大根おろし、甘酢○かき、生のり、こまく＼防風、甘酢○ひらめ作り身、黄菊、三杯酢○鮒ほそ作り、大根おろし、合酢○ばらの薄作り、茗荷のせん、からし、酢味噌○さよりのほそ作りに、貝のはしら、生姜酢○鱚のうす作りに、くらげのせん、三杯酢。

一燒物

鮭、白燒にして、すり生姜○鮭てり燒に、柚子皮、甘鯛○いな白燒に、すり生姜、生醤油○鴨すき燒に、ふと煮の葱○うづらを燒て、大根おろし、生醤油○鴫の丸燒、松茸、すり柚子○小鯛鹽燒、ゆり根白煮、すどり生姜○松茸の笠、らん切、醤油付燒○きわだまぐろの傳法燒、葱の白根をほそくきり、はうろくにしき、火にかけて少しやけたるとき、まぐろの肉を刺身の如くきりて、葱のうへにのせ、燒けたるのち、わさび醤油にて用ふ。



秀歌集（三十二）

鹽井正男

○

播磨路や須磨の關屋の板びさし
月もれとてやまばらなるらし

○之は金葉集の歌にて、藤原の師俊卿のよみ給へるなり。此の歌播磨路にくし、播磨がたとあらためて入れよと、撰者基俊朝臣の申されしに、はりま路にても何のにくき事やある、改ためずぞ集に入れしとならぞ、入るべからずと師俊かたくな云へるを、同じ撰者清輔朝臣之を聞き、はりまがたは勿論、神妙なれぞ、播磨路にてもまた除くべからずとて、遂に其

まゝに入れしとなり。○はりま路やのやは語をつよめたるのみなり。○須磨は播磨の名所にて、むかし關のありし所なり。板びさし○板のひさしにて、板をつゞり作りたる屋根なり○月洩れとてや、月を洩らせむとてせし事にやとの意なり。○まばらなるらし。まばらなのであらうとの意にて。○らしは、證據のあるを見て、らしいと想像せしなり。

○一首の意は、播磨路の須磨にすゑある關屋の板びさしは、大層まばらに葺いてあるが、これは月洩れと云つてまばらにふいたのであらう、どうも此の板ひざしから月の洩れてをるを見ればどうもさうらしいとの意にて、板ひざしのあらくまばらなる所の中々にみやび心に、みやびによみなせし歌にて風雅に才あり、殊に、はりま路やを改めさせざりし強き心のほどもをかし。

○

漕ぎかへるあまの小舟の友なれや
　ゆらの戸渡る春のかりがね

○之は元良親王が海邊歸雁をよみたるにて、

○一首の意は小舟を漕ぎかへる海士の友だちであらうか、ゆらのとまりを渡るはるのかりがねはとの意にて、ゆらの戸を渡る舟と同じく見立てゝよみしにて、何となく風情ある歌なり。

○

まつほどは散るてふことも忘られて
　さけば悲しきやま櫻かな

○之も同じ御子が百首御歌の中なり。○まつ程は。まつて居るまはとの意なり、○ちるてふ事○散ると云ふ事との意なり。○さけば悲しき。○悲しきは身にしみて覺ゆる意なり。

○一首の意はまつて居るほどはちることも忘れてはやく咲けばよいはやく咲けばよいとたゞ咲くことをのみ思ひ、さけば、早も散る事の思はれて、はやも

身にしみ悲しく思はれる山櫻であるわいとの意にて、櫻の花のはかなきさまをよみし歌なり。

○

中々に大宮人の影見れど
　　むかし戀しき夜半の月かな

○之は月あかゝりける夜、源俊頼前の中宮に詣でゝ人に物云ひけるに昔の事など申出して、女のよめるなり。○中々に、反つてとの意なり。○大宮人。宮中に仕へまつる人なり。

○一首の意は、人が問はでこそ月の色を見ても悲しく淋しく身に染みて覺ゆべきなれ、されど、大宮人の御身がかうとひ給ひて、その影を見れど、昔此の中宮も世にときめき、大宮人のしげく仕へたるにと思へど、中々に、君がとはれた影見て、昔が忍ばれ、實に悲しくも戀しくも思はれて身にしむる此の夜半の月であるわいとのあはれなる歌なり。

○

君はさは月見てのみや思ひ出る
　　わが面影ははなれぬものを

○君はさは、君はさやうにとの意なり。○月見てのみや思ひ出る。○月を見てのみ思ひ出るのかの意にて、月見てのみやのやは思ひ出るの下につけて見るべし。○我が面影ははなれぬものを。○我が心にはむかしの事が絶えず面影にたちてはなれ去らないものをとの意なり。

○一首の意はあなたはさやうにたゞ月を見る時ばかり思ひ出すのであるが、我しはさやうに淺い心ではない、もう絶えず昔が心に見え面影に立ちて忘れも離れもせぬをとの意にて又其才も心も先の歌にまさりたり。

源氏物語講義（第十三）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

てぐるまのせんじなどのたまはせても、又いらせたまひては、更にゆるさせ給はず。かぎりあらむみちにも、おくれさきだゝじとちぎらせ給ひけるを、さりともうちすてては、えゆきやらじとのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

　かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり。いとかく思うたまへましかばと、いきもたえつゝ、きこえまほしげなることはありげなれど、いとくるしげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを、ごらんじ果てむとおぼしめすに、けふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよりと聞えいそがせど、わりなくおもほしながら、まかでさせたまひつ。

○てぐるまのせんじ　てぐるまとは輿の車轍を去り上輿にして四人の人して舁くものなり。固宮中には車寄と云ふ所ありて、車にて參内するものは、其の所にて車より下りて、其より以内へは車を引入るゝことを禁じたるものなり。若事ありて特別の勅許を蒙るものは、即このてぐるまに乘ることあり。女御更衣にして輦の宣旨許されたることは、其の例甚少し。唯　仁明天皇の女御藤原澤子の病氣によりて退出する時、特に輦を許されたることあるのみ。今桐壺更衣は　陛下の寵幸非類なき故、特にその例に徵して手輿の宣旨仰出されしなり。宣旨をのたまはすとは、更衣に手輿の特典を許さるべき勅詔を下したまふをいふ。斯樣に常例を越えて、手輿の宣旨までも仰出され、公然御退出を許されたるやうに定りても、陛下は再御息所の御局へ入らせ給ひて、急に御心變りでもしたらむやうに、更に御許容あらせられずて、又下のごとく、盡きぬ御名殘の御物語を繰反し

たまふなり。

○かぎりあらむ道にも云々　かぎりあらむ道とは死出の旅路をいふ。人の命は長しとも限りあるべきものにて、一度は死ぬが當然なり。故に死に行くことをかぎりあらむ路といへり。にもは非常のことを擧げて通常のことに對へたるなり。並大抵の事ならむには、しむしも御側を離隔せじ。たとひかぎりあらむ道にも、おくれさきだゝじといへるにもなり。おくれさきだゝじとちぎらせたまひけるものをの下に、忘れ給へるか、などの句を補ひて見るべし。其の方が死なむ吾も諸共に死なむ吾が逝かは其方も一所に逝け、と豫々固く契約したることのあつたものを、然るを今斯やうに頼少くなれるは、其方は最早以前の契約は忘れ給へるにかとなり。御大患の御息所にむかひたまひて、かゝる無理を仰せらるゝも、悲嘆のあまりにはげにさもあるべきことなり。

○さりともうちすてゝはえゆきやらじ　假令其の約束は忘れたといふとも、吾ひとりをこの宮中におきざりにして、ヨモヤ其方一人にては行かれはすまいと仰せらるゝなり。評釋にこれを評して、この御詞いとく切に哀にて、鬼神もおしぬぐひつべしといへるはさることなり。

○女もいといみじとみたてまつりて　女は御息所をいふ。いみじは悲しきよしなり。御息所はこの陛下の切なる御詞をきゝて、病苦の間にもかくまで吾が身を思召し下さるかと甚悲しきことに見奉りたるなり。依りて病苦を抑へて言葉に盡しがたき心を一首の歌にて御答へ申上げたるなり。

○かぎりとて　はこれがこの世の見收め、陛下との御對顏もこれかぎりであるといひての意なり。とてはといひてなり。

○わかるゝ道　所謂死出の旅路をこえて生死所を異にするをいふ。

○いかまほしきは命なりけり。何卒して今一度生反り

て、陛下の御側に侍りたい。生かまほしきは吾が命であるわいまあと云ふほどの義なり。生かまほしきといふ内に行くといふことをも兼ねて、陛下の御側へ行きたいと云ふ意なるを知らせたるなり。

○いとかくおもうたまへましかば　これは歌にひきつゞきて御息所の陛下に申上ぐる詞なり。病苦を忍びてやう／＼これまで言へるなり。いとは俗にいふホンニの意なり。かくの下にならむの語を補ひて見るべし。おもうたまへましかばは、思ひ奉りましたならばなり。この言葉の下には「何事もかねて聞えまほしきことも多かりしものを、かゝるべしとは思はざりし身の、今はそのかひも侍らじ」などいへる意を含めて見るべし。半句ばかりをいひかけて跡は遂にいひきりえざりしよしなり。「遂にゆく道とはかねてきゝしかど、きのふ今日とは思はざりしを」といへる古歌のごとく、人は遅かれ早かれ、一度は死なねばならぬ。さることゝは誰も承知してはをれど、末期の際までモー吾は死ぬと覺悟するものはあらじ。御息所とても今の今まで死なうと覺悟はせざりき。即こゝはその意にてホンニマア斯様のことにならうと早くより豫知し奉りましたならば、申上げておきたき事も山々御座りましたものを。世に讎敵多き皇子の身の行末のこと、つゞきては便り少き母北の方の身の上のことなど、色々御願申上おきたきことは澤山御座りましたものを、今俄にかうならうとは、神ならぬ身の夢にも存知し奉らぬことにて有りき。今となりては何と思ひてもそのかひもなきことよといふほどの意ある所なり。よく／＼含味すべし。

○いきもたえつゝ　この下に、僅に御いらへありといふ文字を省けり。上のごとき盡きぬ御遺言も、その半分をもえ申上げず。喘々たる氣息今にも絶えさうにして、かく申上げたるよしなり。

○きこえまほしげなることはありけなれど、いとくるしげにたゆげなれば　御息所の様子なり。評釈に

きこゑまほしげありげ苦しげたゆげなど、更に四つのげ文字を重ねたるは皆他より推量りたる御息所の有様なり。いと〳〵くはしくめでたしといふべし、と云へるはいひあてたる評といふべし。御息所と陛下とのこの間の有様は、尋常の筆にては書き現し難けれど、作者が只推量の語をかきて讀者の想像に任せたるものなり。

○かくながらともかくもならむを、御らんじはてむと思しめすに　陛下は御息所が今にも息を引取らむとする御様子を見てこのまゝ死ぬか生きるか何れになりとならむ様を見はてむと思しめして、又々御退出を止めさせ給ふなり。

○けふはじむべきいのりども　今日より改めて更衣の里亭にて修すべき御病氣平愈の御祈禱なり。

○さるべき人々　しかるべき人々なり。即 修法すべき明僧智識の人々なり。

○うけたまはれる、こよひよりといそがせど　うけたまはれるがこよひよりはじめむとて既に其の用意も整ひ居ることなれど、今更御退出の時間を延期もしがたかるべきよし申しあひて、人々の御退出をいそがせどの意なり。法修のこと承れる明僧智識の人々が今宵より病人の御側で祈禱をはじめむ筈なり。それにつけては宮中にては萬事に憚りあれど、一刻も早く退出せねどならぬと申上げて御退出を急がすなり。

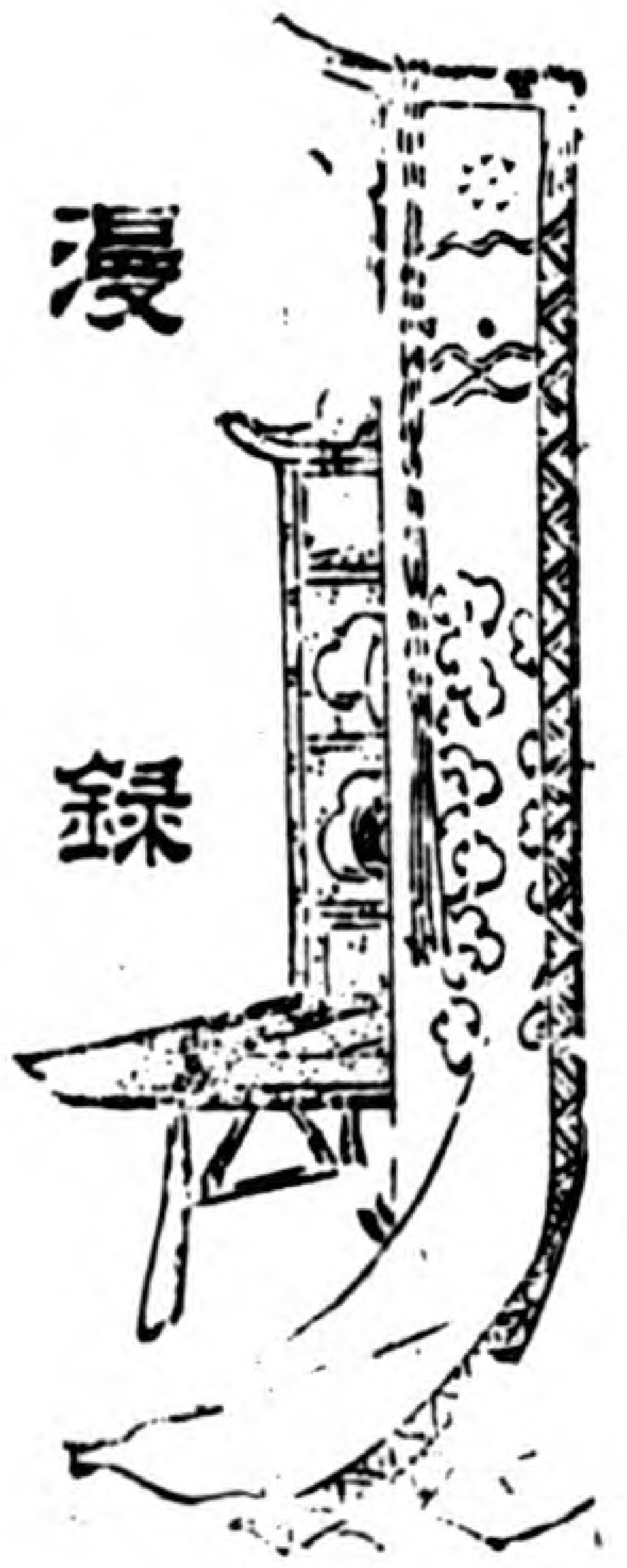
○わりなくおもほしながら　わりなくは無道理無分別の意なり。陛下の御心中には、人々のすゝめを無躰に哀しくおぼしめすけれどもなり。

以上をとりすべて申せど、

陛下は御息所御退出のことをやう〳〵御納得ありて、　仁明天皇以來類例もなき手輿の宣旨の特典をまで仰出されながら、又御息所の御局へ出御あらせられて、兎ても退出は出來がたからむと急に御變心でもしたるごとくに、マア見合せたら良からむと仰

せられて更に勅許もなくして宣ふには、限りのあるべき死出の旅路までも、互に手取り交して遅れまじ先だゝじと兼て約束したことのあつたものを、今はそれを忘れたるか。よしそなたの病氣か危篤なりと云ひても、朕ひとりをうち捨てゝはよも其方一人では行かれまじと仰せらるゝをきゝて、御息所は陛下が斯くまで我が身の上を思召し下さるかと思へど悲しさに堪へかねて一首の歌を以て勅答申上けた、是か今生の別れ、この世の見收めであるといひて別れゆくその死出の旅路を、獨り超ゆるが悲しき故に、願くば今一度蘇生して御側に侍候したいと思へど生かまほしきは我が命で御座りますと僅に一首の歌を洩して、ホンニマアこのやうにならうと豫てより前知して居りましたならばとやう／＼半分言ひかけて、今にも息もきれさうに悲嘆に暮れて御座つた。時に御息所は萬感交胸に迫り來るやうすにて、この外いろ／＼申上げたさうなことはありさうに見ゆれど、身は病苦の爲めに疲れ切つて、誠に苦しさうにだるさうである故、陛下には强ひても御問遊ばされねど、この危篤の御容躰に、又今更の御心迷ひをなされて、死ぬとも生くとも生死の際の別るゝまでは、兎にも角にもこの儘にして成り行くやうを御覧ぜむと思召さすやうなるを、更衣に扈從の人々は、言葉を盡して云はるゝには、豫て病氣平愈の爲、今日より事改めて御祈禱をせむとて、然るべき道々の名僧智識等の仰承れるものが、今宵より病人の枕元で祈禱を始むる積りてある。宮中にては萬事に憚多き故、一刻も早く御退出するが宜しからむと奏上して御退出をいそがしむる故に、陛下にはむしやうに哀しく思召すけれども、今は據なく御退出を許したまふなり。





漫録

主從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

孟子に曰、佚道を以て民をつかへば勞すといへども怨ずとあり。此の心は、本民に佚樂させん爲に民をつかへば、民苦勞すといへども上を恨みず、力を盡して働くなり。又主人は、家來をひどく使ひ難義させては、其難義骨折料を別に加增して遣はす樣に致すべし。唯家來に骨をおらせて、利德は手前一人取時は、骨折し者も恨み、外によろしからぬ事出來して、大ひなる損毛する事もあり。用も調ひがたし。其利德を分ちつかはせば、我も心持よし。人もよし。是苦樂を民と共にする儀にして、仁者の仕方なり。兎角上に仁の心うすき時は、下に不忠の者多く出來るもの也。楚の項羽は、戰功の人に知行を遣はさんとして、感狀迄書しかども、其所領を惜みて終に遣はさず、夫故に漢の高祖に打負て、不覺の名を取しは殘念なる事也。是根性黑きより發りし事なり。歌に、

平生に我身のうへをしまつせよ
人の爲にはものをたしむな

御明君の仰には、國々百姓の年貢、或は献上物迄、其當りより過分に取納るは是公賊也。强に盜賊は下郎斗りにあらず、盜賊の大ひなるは下を貪る上なり。我なんぞ賊をせんとて、諸軍勢に兵粮の下行を一倍して給はり、近國の百姓は軍役御免なり。と、これを見給べし。天下をしろし召御大將はかくの如し、只利樂を民にあたへんとの思召也、是神佛の御慈悲にひとし、又關西の貪將は徹塵に亡び、關東の仁將は日に增し御繁昌は御存知の通りなり。上に立人の大人用務て仁を行へ、勤て貪欲を去れ。又臣たる者は知行官錄に心を掛

ず、唯忠義をはげむべし、前に勤賞ありともこれが爲に勤せず、後に斧鉞の誅ありとも是が爲に恐れず。とは眞田が事也。是よき手本也。金鉄の士は眞田が忠を學ぶべし。

古語にいわく、●人を利する者は天かならず是に幸ひし、人を害する者は天必是に禍ひすといへり。愛を以見る時は、唯人の爲によき事をなすべし、人の爲に惡敷事をなすべからず。是餘人の德にあらず、我身の德となる、人たる者心得べきの第一なり。

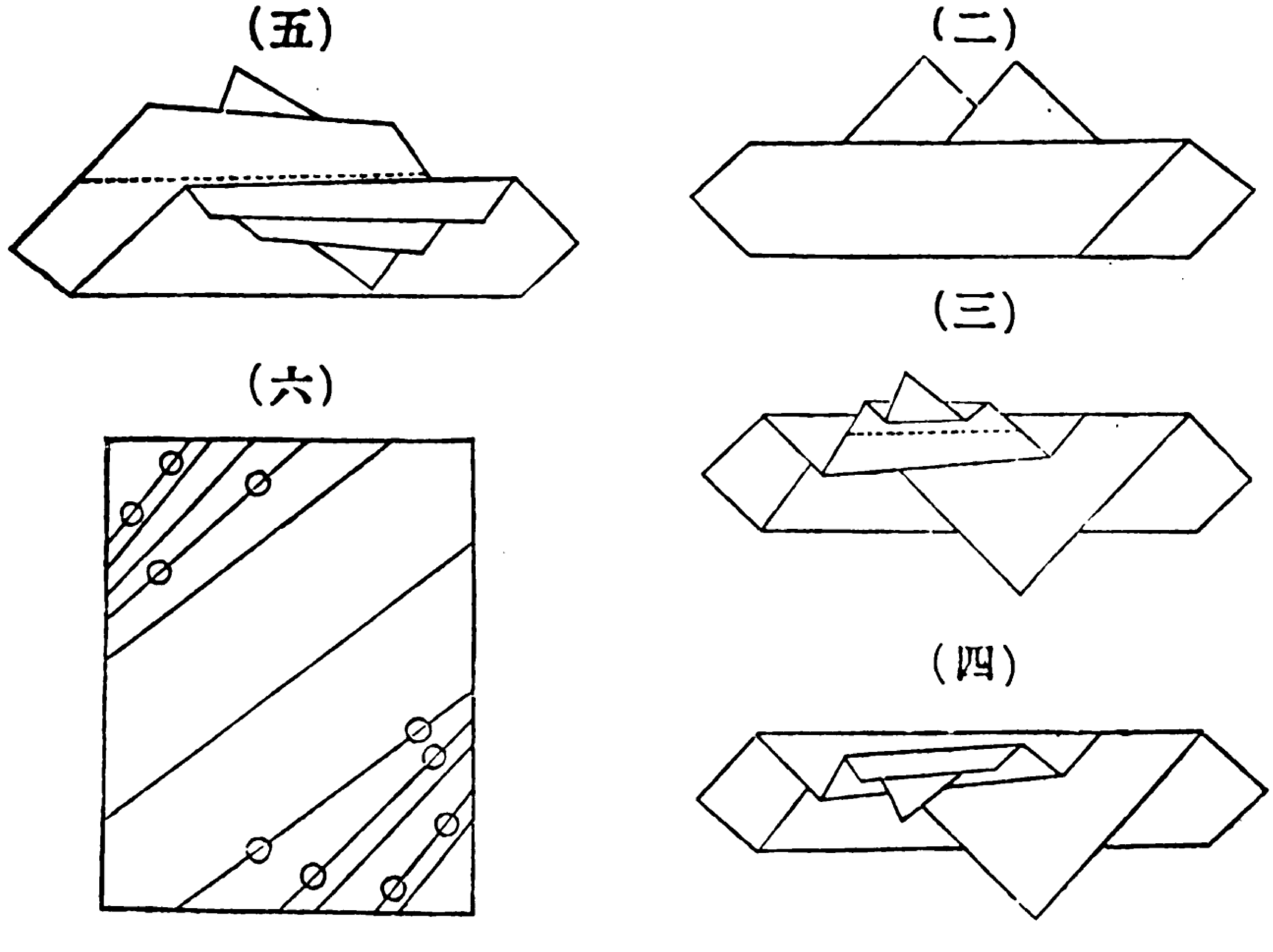
又家來たる者は、主人の恩惠の早きを望むべからず、唯己れが勤むべき業を大切に勵めて、其餘は忘れたるが如くにせよ。初にいふ如く、主人の物を掠め、又ははやく我儘を好み、家を持我身上にして暮したきなど決して思ふべからず。若思ふ人は、主親をはなれて六つか敷といふ事を篤としらぬ淺智惠の人なり。こなた衆は主人にならぬ故、主人の心遣ひ苦勞をしらぬなり。●主人は家來の行末をぞふしてこふしてと常に苦勞たへず、少の店を持するにも、大体の事にはあらず、大ひ●なる元手の入事也。これによつて見れば、主人は家來の爲に奉公するやうなものなり、早くしれるやふに●へぞ、家來は身の爲に奉公し、主人は家の爲、先祖の爲に奉公するなり。必わろく思ひ給ふな。恐ながら天子將軍樣と少しもかはらぬ御米の飯に御菜をそへて、飽迄くらひ暖かに着て何が不足ぞ。若望が叶ひ我身上となつて見られよ、中々一ト通りで行ものにあらず、其時、主人に勤て居る内は結句安しんなりしが、今は大苦勞を求めたりといふ事を始めてしるべし。此事は別家したる人に問給へ。然れども、一生主人がゝりにてもならねども、あまり事を急ぎ給ふなといふ事なり。

（以下續く）

浮世いかだ舟

作者不詳

自慢するは下手藝といふ事



先づ裏曲の法によりて紙取をなし、第一圖の如く二つに節違に折り、次に、其下部を向ふに一つ折りて第二圖の如くし、次に之を裏反して折り端を手前に向け、第三圖の如く折りなし、其點線の處を手前に向けて折れば第四圖となる。さて斯く折りたる上の方を向ふへ開き置きて、下の方を第五圖の樣に折り、後、上の方を元の如くに其上に折り重ぬれば折り上るなり。

右の如く折り上げて、其折め〱に墨にて標の筋を引きて悉く開きて、之を形紙となして、更に折るをよしとす。第六圖は其折り上げたるを皆開きたるにて、即形紙を示せるなり。標を付たるは凹みたる線にして其他は凸みたる線なり。

斯の如く形紙をつくりなして、次に、つくるべき奉書など取出して、裁板の上に置きて、形紙を表を上にして奉書紙の表の上にのせて、合し、錐にて四方の横面に標をうちて、形紙を取りのけて、定木をあてゝたちれとし、次に又奉書にて裏をつくらんには、奉書紙の

上に、裁ちたるを重ねて糊にて眞中の處を着けて、四方共に一分程づゝ匂ひを殘しれきて裁ちれとすべし。かくして形紙を表にあてゝ、筋の處に定木をあて、筋付にて筋をつけて次々に折りなすべし。

茶の湯

茶禮初學

關　葦雄

偖亭主は此等の事を咄しながら、風炉の前に向ひ、帛紗を取、塵打して疊み、釜の蓋をしめ、先蓋の摘向前と拭ひ、帛紗疊直し、右の手の掌に持、籠風炉の右の方横腹の所を前より向へ拭ひ、直に前の方へ拭ひ戻し、帛紗を左手に持替、同じく左の方を前より向へ、向より前へ拭ひ戻し、又再び帛紗を右の手に持、一つ折、風炉の前、瀧口の縁を左より右へ右より左へ、中にて止、中へ拭ひ籠べし。次に帛紗を腰に付べし（但し是は土風炉面取にての規則なり、風炉により差違ありと心得べし）客方、上客は此業前中に掛物の挨拶を爲すべし。扨御軸は誠に結構に拜見仕　候、虚堂和尚も稀には有之候得共如レ斯美麗特に偈の文も禪門悟道の垂辭に有之樣拜見仕、誠に茶に適當御表具も一文字、風帶は紫地の印金、中廻しは古金襴上下は古き七子地、軸は象牙又疵氣も無之十分の御藏軸數奇幾層相增候、品定て御傳來も可レ有レ之箱書付極札等も附屬勿論の事と存升、御跡にて拜見仕度抔と賞歎の言葉辨舌を盡して申述べし。二三の客も上客の翼尾に付て珍重の由を言べし。亭主は謙遜して御賞讃程の品にも無之併虚堂和尚の筆は眞正にも可レ有レ之、亡父も至て大切に所持、極札は了意了伴二氏の極め、箱書付は澤庵和尚と申事。客は實に左樣に可レ有レ之普通の品に無レ之、又御跡に

て拜見を願升。御覽に可ㇾ入と云。又四方山の閑話有て可ㇾ然、亭主は咄ながら勝手口に下り、時刻にも相成候間麁末の湯漬差上可ㇾ申と云て一禮勝手口を〆切、此時客方は御都合次第と云、又亭主の身分に依りては御給仕は御通の衆を御遣可ㇾ被ㇾ下抔と云へし。

一膳不殘出し勝手口締切

不淺曰膳付拵方は、飯椀は左の方、汁椀は右の方、向付は膳向の正面、前に箸を付る（但箸は利久形杉の兩細口なり。前の緣へ持掛る）飯汁共に始めは輕く盛付るをよしとす、向付も同樣なり。扨亭主は席次の間疊敷なれど、出口を座箒にて輕く箒べし、次に膳を控へ、勝手口に据て大皷張を引明け、膳を持出、先上客の前に持往進むべし。上客は些少進み出て兩手を出し膳を受取、直に戴くべし。是則辱しと言意なり。亭主も同じく時宜すべし。退入て次客の膳を持出進む、次客も上客の如く請取、直に戴くべし、三客四客五客迄段々如此して膳出し終らば、亭主は勝手口の際にて不加減にも可有之、なれ共寬々食上り可ㇾ被ㇾ降と云て勝手口を締切べし。客方も輕く一禮難有と言べし。次に客は互に御相伴抔と挨拶して飯を喰ふべし。婦人は疊紙を出し、膝の側に置、左右の手にて飯椀の蓋を取、打反し。下座の方に置、次に汁椀の蓋を取、飯椀の蓋の上へうつむけて重ね置べし。重ね難きは打反して並べ置べし、而後箸を右手にて下より取、左手を添て持直し、先汁椀を取り汁を二口吸、下に置、飯椀を取飯を喰ふべし、二口喰ふて飯椀を置、汁椀を持、實を喰て後汁を吸べし。下に置（但し此時多分汁は吸切に成ものにて。蓋をして置べし）次に飯を喰、向付を喰べし（但し是は多分作り身加減酢を掛、山葵を加へ有もの也、酢と山葵とを能箸にて攪交て喰ふべし。

（未完）

女禮

有住常子

片側列座膳進め樣

片側に客人の並居たまふ時には、其人數に隨ひて、膳を一行に人數だけ持て出で、

一の人は靜にすゝみて持出るに、二の人、三の人と次第に早く進みて持出るなり。

まづ二三尺ほどづゝ隔てゝ持出で、御前に至り、右座に御並びの時は、踏止まりて、左足を右足の先に横につけて右に向直りて進みて、左足を半足ひきて、跪きて居ながら膳を下に靜にまがらぬやうに置くべし。さて居りて、膳の足をおして、進め參らすべし。一同おなじ樣に早きおそさなく進めをはりて、左右の手を前にひきて、右の手を右膝頭につけて、右膝をすこし引て、左の手を左膝頭につけて、左膝をすこし引て、共に引ときに左右と爪立て、左右の手を膝の上に置きて、右の膝頭をすこしうかして右の方下座へ、ひらきて、共に立かへるべし。

ひらき樣は、左の膝を疊にずらして、右の膝をうかめて右にめぐる事なり。下座の人、早めになすべしそれより次第にめぐりて一同そろひて、皆々下座をむきたる時、共に立あがりて、左足より進めて、立かへるべし。

同　左

左座に並居たまふ時には、膝のつかひかた左をうかめて立かへる如く、すべて、足のふみかたも右のうらうへになすなり、そのほかかたがふことなし。

同　引樣

まづ進み出で、

稽古の時には下座に配膳人なみ居て、右座の時は、右の方より、まづ爪立て、右膝をうかめて、右に腰を捻りて、ますぐに向ひ立て、一番の人進みゆくべし、其次も次も、同時に右に捻りて、二番の人右に

ひらきて一番の居たる所まで横に進みて、其所にて右足を左足の先につけて直に向直りておとにつきてゆく、三番四番も、皆かくの如くして一行に進み出るなり。

左座の時は左膝よりすべてうらうへになすべし。

立かへりたる時も、おとの人、一番の所に至りて、右座の時は左足を右足の先につけて右にわゆみて、先の居りたりし所に至るべし、おとよりつぎの人もかくし、つぎ〳〵もかくして、一番の人、一番の所に前の如く居る樣になすべし。これは稽古の時の樣也。

引時には、進み行きて前の如く御前に至り、前よりも遠く、膳より二三尺隔て〻跪きて、左右の手を進めて右膝を進めて右を居ゑ、左膝を進めて左をすゑ、しかと居りて、

これは膳のとりわげよき程に進む進みやうなり。

左右の手にて膳の足をもちて引よせて、待て、右左と膝を引て爪立て、おとの人より下座の方へめぐりて立ちて立かへるべし。



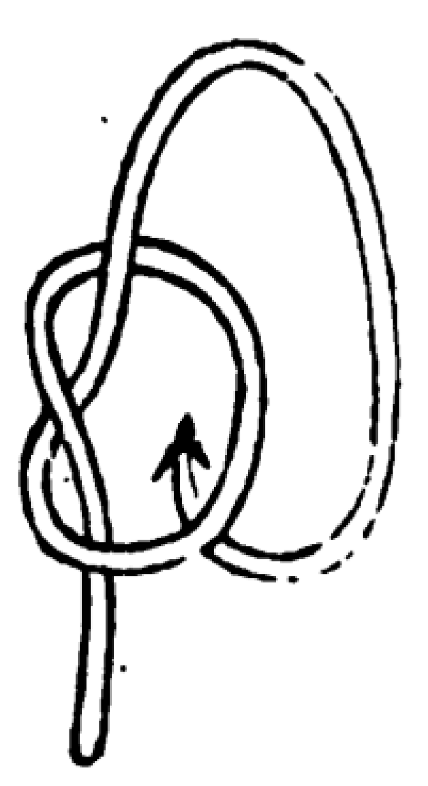
新撰 結物百種

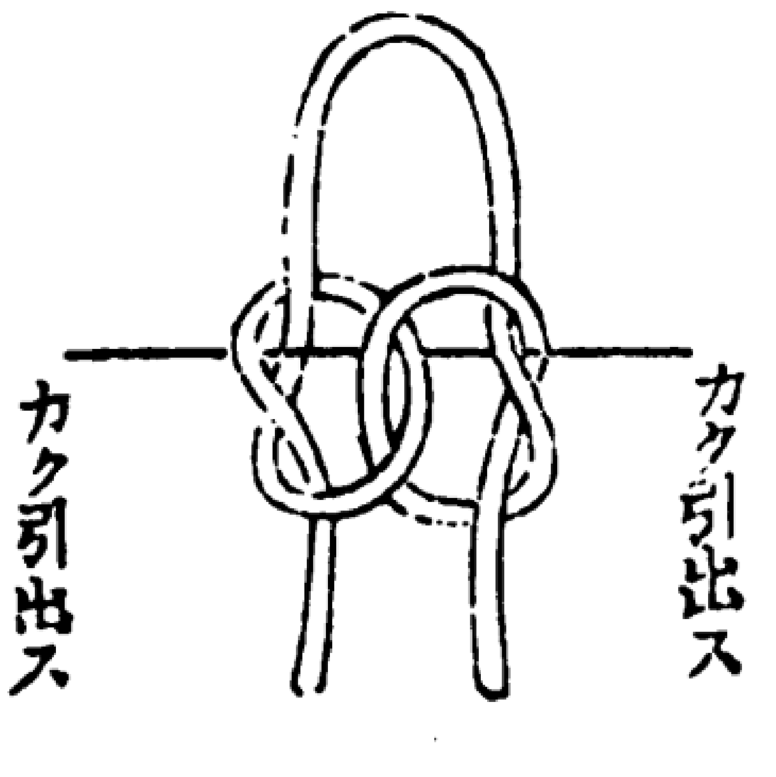
百草庵一無

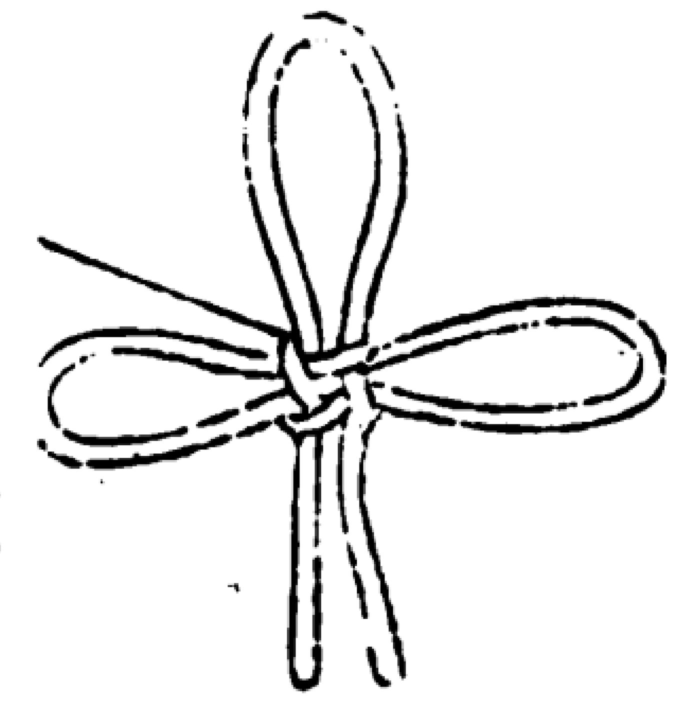
上卷結

是は神の道具に用ちる結なり。御簾、或はすだれ、或は幕等に用ゐ來れるも、當世は小袖の袖口の飾に用うるもよし。

(石井泰次郎云　上卷は總角なり。近世の書に總角の人形と分ちて記せり。通常は入形に結ぶよし見ゑたり。伊勢家の結の記にも、入形に結びたり。同記に、あげまきは鎧のうしろ、又は御簾などに付くるなりと見えたり。)

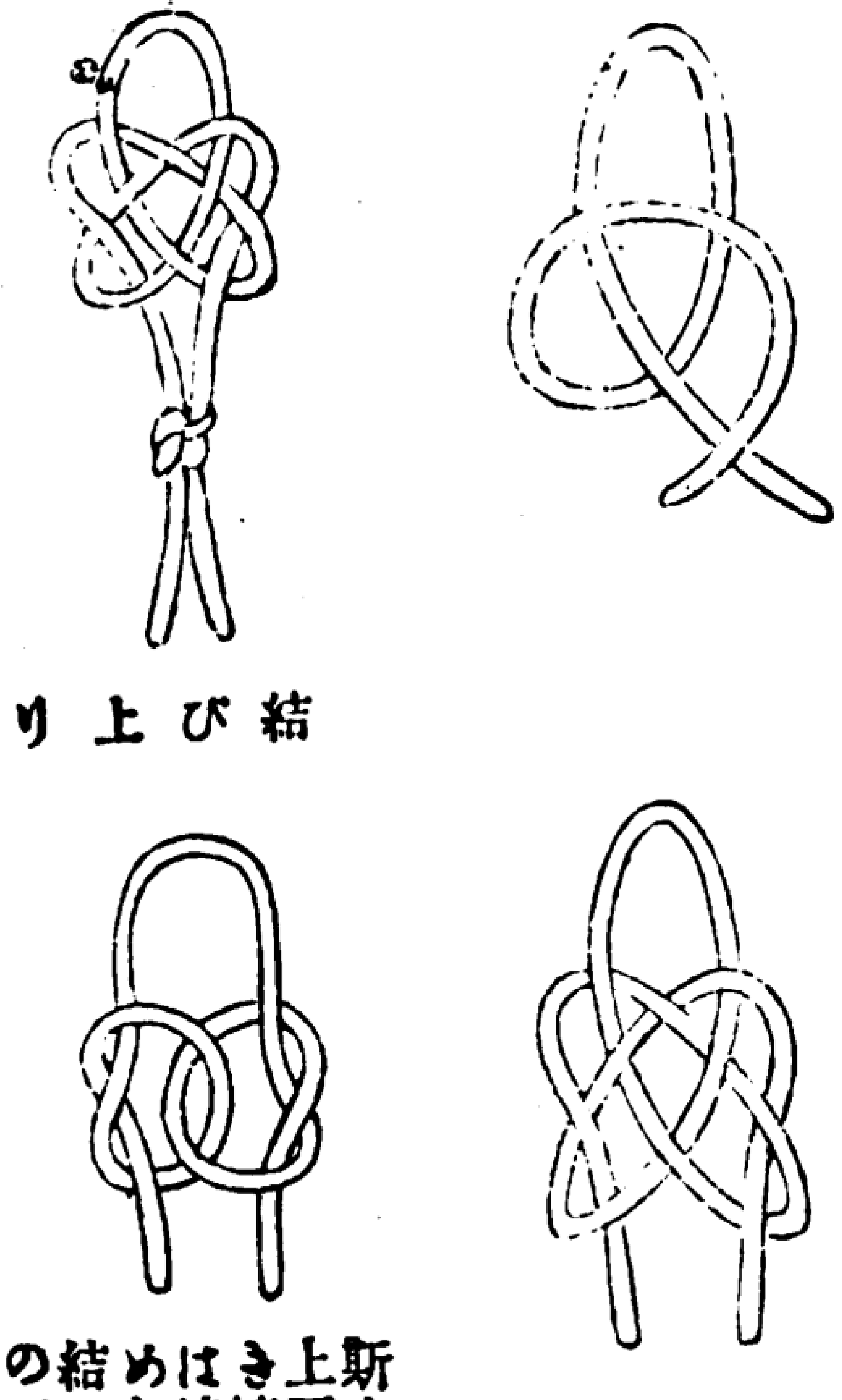






結び上り

四ツ菱結及總角じめ（泰次郎いふ、是は華縵結と同じく佛具に用うるよし書に見えたり。）



結び上り

斯くして上下に引き締むれは總角じめなり。結び上りの下部の如し



こたびは、西山たい子の君えさらぬことありて「たちぬひ」をやすむ。

だいどころ

四季料理の取合せ

秋の部

一椀盛

黒鯛の切身に、初茸、つまみ菜、口柚子○鯛の切身に、みる貝、みつば、口柚子、よせかれひ、ぜんまい、木口牛房、柚子○海老のたゝきに、松茸、冬瓜○鶉のたゝき、さゝ松茸、花菜○竹筴魚の切身に、初茸、つまみ菜、柚子○そぼろ豆腐、まつたけの薄切、鴨、おぼろかけ○鴨の作り身、半月しんぢよ、しぼりゆず○かき、松たけ、ふきのたう。

一酢の物

さけのはらご、大根おろし、甘酢○さけのさいがた大根おろし、防風○しめあぢ、防風、わさび○貝のは

しら、大根おろし、甘酢○かき、生のり、こま〳〵防風、甘酢○ひらめ作り身、黄菊、三杯酢○鮪はそ作り、大根おろし、合酢○ばらの薄作り、茗荷のせん、からし、酢味噌○さよりのはそ作りに、貝のはしら、生姜酢○鮪のうす作りに、くらげのせん、三杯酢。

一 燒物

鮭、白燒にして、すり生姜○鮭てり燒に、柚子皮、甘鯛○いな白燒に、すり生姜、生醤油○鴨すき燒に、ふと煮の葱○うづらを燒て、大根おろし、生醤油○鴨の丸燒、松茸、すり柚子○小鯛鹽燒、ゆり根白煮、すぞり生姜○松茸の笠、らん切、醤油付燒○きわだまぐろの傳法燒、葱の白根をはそくきり、はうろくにしき、火にかけて少しやけたるとき、まぐろの肉を刺身の如くきりて、葱のうへにのせ、燒けたるのち、わさび醤油にて用ふ。



學園

秀歌集（三十二）

鹽井正男

○

播磨路や須磨の關屋の板びさし
　月もれとてやまだらなるらし

○之は金葉集の歌にて、藤原の師俊卿のよみ給へるなり。此の歌播磨路にくし、播磨がたとあらためて入れよと、撰者基俊朝臣の申されしに、はりま路にても何のにくき事やある、改ためずぞ集に入れじとならぞ、入るべからずと師俊かたくな云へるを、同じ撰者清輔朝臣之を聞き、はりまがたは勿論、神妙なれぞ、播磨路にてもまた除くべからずとて、遂に其

ま丶に入れしとなり。

○はりま路やのやは語をつよめたるのみなり。○須磨は播磨の名所にて、むかし關のありし所なり。板びさし○板のひさしにて、板をつゝり作りたる屋根なり○月洩れとてや、月を洩らせむとてせし事にやとの意なり。○まだらなるらし。まだらなのであらうとの意にて。○らしは、證據のあるを見て、らしいと想像せしなり。

○一首の意は、播磨路の須磨にすゑある關屋の板びさしは、大層まだらに葺いてあるが、これは月洩れと云つてまだらにふいたのであらう、どうも此の板ひざしから月の洩れてをるを見れどどうもさうらしいとの意にて、板びざしのあらくまだらなる所の中々にみやび心に、みやびによみなせし歌にて風雅に才あり、殊に、はりま路やを改めさせざりし強き心のほどもをかし。

○

漕ぎかへるあまの小舟の友なれや
　ゆらの戸渡る春のかりがね

○之は元良親王が海邊歸雁をよみたるにて、

○一首の意は小舟を漕ぎかへる海士の友だちであらうか、ゆらのとまりを渡るはるのかりがねはとの意にて、ゆらの戸を渡る舟と同じく見立てゝよみしにて、何となく風情ある歌なり。

○

まつほどは散るてふことも忘られて
　さけど悲しきやま櫻かな

○之も同じ御子が百首御歌の中なり。○まつ程は。まつて居るまはとの意なり、○ちるてふ事○散ると云ふ事との意なり。○さけど悲しき。○悲しきは身にゑみて覺ゆる意なり。

○一首の意はまつて居るほどはちることも忘れてははやく咲けどよいはやく咲けどよいとたゞ咲くことをのみ思ひ、さけど、早も散る事の思はれて、はやも

身にしみ悲しく思はれる山櫻であるわいとの意にて、櫻の花のはかなきさまをよみし歌なり。

○

中々に大宮人の影見れど
　むかし戀しき夜半の月かな

○之は月わかゝりける夜、源俊賴前の中宮に詣でゝ人に物云ひけるに昔の事など申出して、女のよめるなり。○中々に、反つてとの意なり。○大宮人。宮中に仕へまつる人なり。

○一首の意は、人が問はでこそ月の色を見ても悲しく淋しく身に染みて覺ゆべきなれ、されど、大宮人の御身がかうとひ給ひて、その影を見れど、昔此の中宮も世にときめき、大宮人のしげく仕へたるにと思へど、中々に、君がとはれた影見て、昔が忍ばれ、實に悲しくも戀しくも思はれて身にしむる此の夜半の月であるわいとのあはれなる歌なり。

○

君はさは月見てのみや思ひ出る
　わが面影ははなれぬものを

○君はさは、君はさやうにとの意なり。○月見てのみや思ひ出る。○月を見てのみ思ひ出るのかの意にて、月見てのみやのやは思ひ出るの下につけて見るべし。○我が面影ははなれぬものを。○我が心にはむかしの事が絶ゑず面影にたちてはなれ去らないものをとの意なり。

○一首の意はあなたはさやうにたゞ月を見る時ばかり思ひ出すのであるが、我しはさやうに淺い心ではない、もう絶ゑず昔が心に見ゑ面影に立ちて忘れも離れもせぬをとの意にて又其才も心も先の歌にまさりたり。

源氏物語講義（第十三）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

てぐるまのせんじなどのたまはせても、又いらせたまひては、更にゆるさせ給はず。かぎりあらむみちにも、おくれさきだゝじとちぎらせ給ひけるを、さりともうちすてては、えゆきやらじとのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり。いとかく思うたまへましかばと、いきもたえつゝ、きこえまほしげなることはありげなれど、いとくるしげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを、ごらんじ果てむとおぼしめすに、けふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよりと聞えいそがせば、わりなくおもほしながら、まかでさせたまひつ。

○てぐるまのせんじ　てぐるまとは輿の車輪を去り上輿にして四人の人して舁くものなり。固宮中には車寄と云ふ所ありて、車にて參内するものは、其の所にて車より下りて、其より以内へは車を引入るゝことを禁じたるものなり。若事ありて特別の勅許を蒙るものは、即このてぐるまに乘ることあり。女御更衣にして輦の宣旨許されたることは、其の例甚少し。唯仁明天皇の女御藤原澤子の病氣によりて退出する時、特に輦を許されたることあるのみ。今桐壺更衣は　陛下の寵幸非類なき故、特にその例に徵して手輿の宣旨仰出されしなり。宣旨をのたまはすとは、更衣に手輿の特典を許さるべき勅諚を下したまふをいふ。斯樣に常例を越えて、手輿の宣旨までも仰出され、公然御退出を許されたるやうに定りても、陛下は再御息所の御局へ入らせ給ひて、急に御心變りでもしたらむやうに、更に御許容あらせられずて、又下のごとく、盡きぬ御名殘の御物語を繰反し

たまふなり。

○かぎりあらむ道にも云々　かぎりあらむ道とは死出の旅路をいふ。人の命は長しとも限りあるべきものにて、一度は死ぬが當然なり。故に死に行くことをかぎりあらむ路といへり。にもは非常のことを擧げて通常のことに對へたるなり。並大抵の事ならむには、しばしも御側を離隔せじ。たとひかぎりあらむ道にも、おくれさきだゝじといへるにもなり。おくれさきだゝじとちぎらせたまひけるものをその下に、忘れ給へるか、などの句を補ひて見るべし。其の方が死なむ吾も諸共に死なむ吾が逝かば其方も一所に逝け、と豫々固く契約したることのあつたものを、然るを今斯やうに頼少くなれるは、其方は最早以前の契約は忘れ給へるにかとなり。御大患の御息所にむかひたまひて、かゝる無理を仰せらるゝも、悲嘆のあまりにはげにさもあるべきことゝなり。

○さりともうちすてゝはえゆきやらじ　假令其の約束は忘れたといふとも、吾ひとりをこの宮中におきざりにして、ヨモヤ其方一人にては行かれはすまいと仰せらるゝなり。評釋にこれを評して、この御詞いとゞ切に哀にて、鬼神もれしぬぐひつべしといへるはさることなり。

○女もいといみじとみたてまつりて　女は御息所をいふ。いみじは悲しきよしなり。御息所はこの陛下の切なる御詞をきゝて、病苦の間にもかくまで吾が身を思召し下さるかと甚悲しきことに見奉りたるなり。依りて病苦を抑へて言葉に盡しがたき心を一首の歌にて御答へ申上げたるなり。

○かぎりとて　はこれがこの世の見收め、陛下との御對顔もこれかぎりであるといひての意なり。とてはといひてなり。

○わかるゝ道　所謂死出の旅路をこえて生死所を異にするをいふ。

○いかまほしきは命なりけり。何卒して今一度生反り

て、陛下の御側に侍りたい。生かまほしきは吾が命であるわいまわと云ふほどの義なり。生かまほしきといふ内に行くといふことをも兼ねて、陛下の御側へ行きたいと云ふ意なるを知らせたるなり。

○いとかくおもうたまへましかば　これは歌にひきつゞきて御息所の陛下に申上ぐる詞なり。病苦を忍びてやう〳〵これまで言へるなり。いとは俗にいふホンニの意なり。かくの下にならむの語を補ひて見るべし。おもうたまへましかばは、思ひ奉りましたならむなり。この言葉の下には「何事もかねて聞えまほしきことも多かりしものを、かゝるべしとは思はざりし身の、今はそのかひも侍らじ」などいへる意を含めて見るべし。半句ばかりをいひかけて跡は遂にいひきりえざりしよしなり。「遂にゆく道とはかねてきゝしかど、きのふ今日とは思はざりしを」といへる古歌のごとく、人は遅かれ早かれ、一度は死なねばならぬ。さることゝは誰も承知してはあれど、末期の際までモー吾は死ぬと覺悟するものはあらじ。御息所とても今の今まで死なうと覺悟はせざりき。即こゝはその意にてホンニマア斯様のことにならうと早くより豫知し奉りましたならば、申上げておきたき事も山々御座りましたものを。世に讐敵多き皇子の身の行末のこと、つゞきては便り少き母北の方の身の上のことなど、色々御願申上おきたきことは澤山御座りましたものを、今俄にかうならうとは、神ならぬ身の夢にも存知し奉らぬことにて有りき。今となりては何と思ひてもそのかひもなきことよといふほどの意ある所なり。よく〳〵含味すべし。

○いきもたえつゝ　この下に、僅に御いらへありといふ文字を省けり。上のごとき盡きぬ御遺言も、その半分をもえ申上げず。喘々たる氣息今にも絶えさうにして、かく申上けたるよしなり。

○きこえまほしげなることはありけなれど、いとくるしげにたゆげなれば　御息所の様子なり。評釋に

きこゆまほしげありげ苦しげたゆげなど、更に四つのげ文字を重ねたるは皆他より推量りたる御息所の有様なり。いと〳〵くはしくめでたしといふべし、と云へるはいひあてたる評といふべし。御息所と陛下とのこの間の有様は、尋常の筆にては書き現し難ければ、作者が只推量の語をかきて讀者の想像に任せたるものなり。

○かくながらともかくもならむを、御らんじはてむと思しめすに　陛下は御息所が今にも息を引取らむとする御様子を見てこのまゝ、死ぬか生きるか何れになりとならむ様を見はてむと思しめして、又々御退出を止めさせ給ふなり。

○けふはじむべきいのりども　今日より改めて更衣の里亭にて修すべき御病氣平愈の御祈禱なり。

○さるべき人々　しかるべき人々なり。　即修法すべき明僧智識の人々なり。

○うけたまはれる、こよひよりといそがせど　うけたまはれるがこよひよりはじめむとて既に其の用意も整ひ居ることとなれど、今更御退出の時間を延期もしがたかるべきよし申しあひて、人々の御退出をいそがせどの意なり。法修のこと承れる明僧智識の人々が今宵より病人の御側で祈禱をはじめむ筈なり。それにつけては宮中にては萬事に憚りあれど、一刻も早く退出せねばならぬと申上げて御退出を急がすなり。

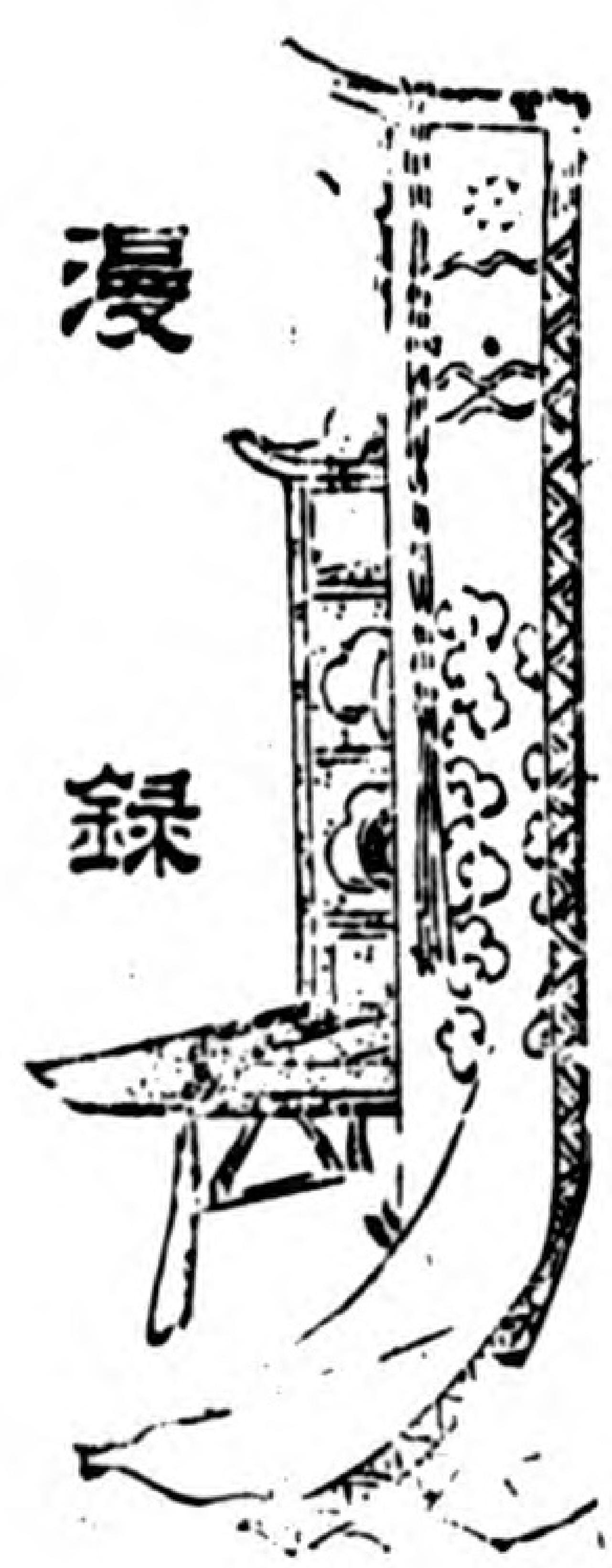
○わりなくおもほしながら　わりなくは無道理無分別の意なり。陛下の御心中には、人々のすゝめを無躰に哀しくおぼしめすけれどもなり。

以上をとりすべて申せば、

陛下は御息所御退出のことをやう〳〵御納得ありて、　仁明天皇以來類例もなき手輿の宣旨の特典をまで仰出されながら、又御息所の御局へ出御あらせられて、兎ても退出は出來がたからむと急に御變心でもしたるごとくに、マア見合せたら良からむと仰

せられて更に勅許もなくして宣ふには、限りのあるべき死出の旅路までも、互に手取り交して遅れまじ先だゝじと兼て約束したことのあつたものを、今はそれを忘れたるか。よしそなたの病氣が危篤なりと云ひても、朕ひとりをうち捨てゝはよも其方一人では行かれまじと仰せらるゝをきゝて、御息所は陛下が斯くまで我が身の上を思召し下さるかと思へば悲しさに堪へかねて一首の歌を以て勅答申上げた、是か今生の別れ、この世の見收めであるといひて別れゆくその死出の旅路を、獨り超ゆるが悲しき故に、願くば今一度蘇生して御側に侍候したいと思へば生かまほしきは我が命で御座りますと僅に一首の歌を洩して、ホンニマアこのやうにならうと豫てより前知して居りましたならばとやう／＼半分言ひかけて、今にも息もきれさうに悲嘆に暮れて御座つた。時に御息所は萬感交胸に迫り來るやうすにて、この外いろ／＼申上げたさうなことはありさうに見ゆれど、身は病苦の爲めに疲れ切つて、誠に苦しさうにだるさうである故、陛下には強ひても御問遊ばされねど、この危篤の御容躰に、又今更の御心迷ひをなされて、死ぬとも生くとも生死の際の別るゝまでは、兎にも角にもこの儘にして成り行くやうを御覧ぜむと思召さすやうなるを、更衣に扈從の人々は、言葉を盡して云はるゝには、豫て病氣平愈の爲、今日より事改めて御祈禱をせむとて、然るべき道々の名僧智識等の仰承れるものが、今宵より病人の枕元で祈禱を始むる積りてある。宮中にては萬事に憚多き故、一刻も早く御退出するが宜しからむと奏上して御退出をいそがしむる故に、陛下にはむしやうに哀しく思召すけれども、今は據なく御退出を許したまふなり。





漫録

主從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

孟子に曰、佚道を以て民をつかへば勞すといへども怨ずとあり。此の心は、本民に佚樂させん爲に民をつかへば、民苦勞すといへども上を恨みず、力を盡して働くなり。又主人は、家來をひどく使ひ難義させては、其難義骨折料を別に加增して遣はす樣に致すべし。唯家來に骨ををらせて、利徳は手前一人取時は、骨折し者も恨み、外によろしからぬ事出來して、大ひなる損毛する事もあり。用も調ひがたし。其利徳を分ちつかはせば、我も心持よし。人もよし。是苦樂を民と共にする儀にして、仁者の仕方なり。兎角上に仁の心うすき時は、下に不忠の者多く出來るもの也。楚の項羽は、戰功の人に知行を遣はさんとして、感狀迄書しかども、其所領を惜みて終に遣はさず、夫故に漢の高祖に打負て、不覺の名を取しは殘念なる事也。是根性黑きより發りし事なり。歌に、

平生に我身のうへをしまつせよ
　人の爲にはものをたしむな

御明君の仰には、國々百姓の年貢、或は献上物迄、其當りより過分に取納るは是公賊也。强に盜賊は下郞斗りにあらず、盜賊の大ひなるは下を貪る上なり。我なんぞ賊をせんとて、諸軍勢に兵粮の下行を一倍して給はり、近國の百姓は軍役御免なり。と、これを見給べし。天下をしろし召御大將はかくの如し、只利樂を民にあたへんとの思召也、是神佛の御慈悲にひとし、又關西の貪將は微塵に亡び、關東の仁將は日に增し御繁昌は御存知の通りなり。上に立人の大人用務て仁を行へ、勤て貪欲を去れ。又臣たる者は知行官祿に心を掛

ず、唯忠義をはげむべし、前に勲賞ありともこれが爲に動せず、後に斧鉞の誅ありとも是が爲に恐れず。とは眞田が事也。是よき手本也。金鉄の士は眞田が忠を學ぶべし。

古語にいわく、●人を利する者は天かならず是に幸ひし、人を害する者は天必是に禍ひすといへり。愛を以見る時は、唯人の爲によき事をなすべし、人の爲に悪敷事をなすべからず。是餘人の德にあらず、我身の德となる、人たる者心得べきの第一なり。

又家來たる者は、主人の恩惠の早きを望むべからず、唯己れが勤むべき業を大切に勤めて、其餘は忘れたるが如くにせよ。初にいふ如く、主人の物を掠め、又ははやく我儘を好み、家を持我身上にして暮したきなど決して思ふべからず。若思ふ人は、主親をはなれて六つか敷といふ事を篤としらぬ淺智惠の人なり。こなた衆は主人にならぬ故、主人の心遣ひ苦勞をしらぬなり。●主人は家來の行末をどふしてこふしてと常に苦勞たへず、少の店を持するにも、大体の事にはあらず、大ひ●なる元手の入事也。これによつて見れば、主人は家來の爲に奉公するやうなものなり、早くしれるやふに●へむ、家來は身の爲に奉公し、主人は家の爲、先祖の爲に奉公するなり。必わろく思ひ給ふな。恐ながら天子將軍樣と少しもかはらぬ御米の飯に御菜をそへて、飽迄くらひ暖かに着て何が不足ぞ。若望が叶ひ我身上となつて見られよ、中々一ト通りで行ものにあらず、其時、主人に勤て居る内は結句安しんなりしが、今は大苦勞を求めたりといふ事を始めてしるべし。此事は別家したる人に問給へ。然れども、一生主人がゝりにてもならねども、あまり事を急ぎ給ふなといふ事なり。

（以下續く）

浮世いかだ舟

作者不詳

自慢するは下手藝といふ事

今はむかし、物ごとじまんくさきは、未練のゆゑ也。物の上手のうへからは、すこしもじまんはせぬ事也。我より手うへの者共、ひろき天下にいかほども有也。諸藝ばかりにかぎらず、侍道にも、武邊口上以下、さらに自慢はならぬものを、今の世は貴賤上下それ〴〵にじまんして、ころたかにからげんはきちらし、わがまゝをするものおほし。そのくせに、おのれか疵をかくさんとて、よきものをそしりわらふ事有。あるものざしきをたてゝ、絵をかくする白鷺の一色をのぞむ。ゑかき心得たりとてやき筆をあつる、亭主のいはく、いづれもよささうなれ共、此白さぎのとびあがりたる羽づかひが、かやうではとばれまいといふ。ゑかきのいはく、いや〳〵此とびやうが第一のでき物じやといふうちに、本の白さぎか四五羽うちつれてとぶ。亭主これを見て、あれ見給へ、あのやうにかきたいものじやといへば、ゑかき是を見て、いや〳〵あの羽づかひではあつてこそ、それがしがかきたるやうにゑとぶまいといふた。

紙表具の狂歌の事

今はむかし、御出入を申表具やの有しが、浮世坊に申けるは、何にても表具のことのあらば、弟子共にさせて參らすべし。のりかげんはそれがし見申て、さしひきをいたさん。代物をも取申まじといへば、さらばとて達磨をとり出しつかはすとてかくぞよみける、

御無心を申さつまのかみへうぐ
たゞのりかげん頼みこそすれ

謠曲翁解譯

藤井行麿

して「とう〳〵たらり〳〵らたらりあがりらゝりとう
同　ちりやたらり〳〵らたらりあがりらゝりとう
して「所千代までおはしませ
同　我らもせんしうさふらふ
して「とう〳〵
して「鶴と亀との齢にてさいはひ心に任せたり

とうたらり〳〵ら　同　ちりやたらり〳〵ら　同　たらりあかりらゝりとう　千歳「なるは瀧の水〳〵日は照とも　同　たへずとふたりありうとう〳〵〳〵　千歳「たへずとうたり〳〵所千世までおはしませわれらも千秋さむらふなるは瀧の水日は照ともたへずとうたりありうとう〳〵　して「あげまきやとんどやひろはかりやとんどや　して「さしいたれどもまゐらふれんげりやとんどや　して「千早振神のみことの昔より久しかれとぞいはひ　同　そよやれい地やとんどや　して「千年の鶴は萬歳樂とうたふたりまたはんたいの池の龜はかうにさんきうを備たり天下太平國土安隱今日の御祈禱なり在原やなしよの翁ともあれはなしよの翁ともそやいつくの翁とも　して「そよや　下　千秋萬歳の祝ひの舞なれは一まひまはふ萬歳樂まんさいらく萬歳樂萬歳樂

此能樂の文詞を見るに、瀧によそへて鶴龜をひきいで、大御世をほぎたることとなるが、養老の瀧によりていへるとおもはるゝは、翁すみて三番叟の千歳にいふことゝだに、多度の太夫どのに一寸現相まをさふといふことと。あり。此言葉をいつの頃よりか横訛りて、あどの太夫どのといふ、此考は別にいふべし。

續御紀を見るに、曰

日本根子瑞淨足姬天皇天下所知看斯大御世遍美濃國當耆郡多度山爾醴酒泉顯祁理御謚元正天皇登申奉始者一品氷高內親王止白御父波天武天皇御同母乃御姉爾天元明天皇御齡老給倍留爾依靈龜元年皇太子聖武爾寶位袁譲給波武止欲志祁禮止母幼稚爾於波之坐祁禮婆元正天皇爾御位乎受禪志給比聖武天皇能天平二十年四月御齡六十九歲爾而崩御坐祁留美濃爾行幸坐祁留者御年三十八歲爾而坐志那理靈龜三年九月天皇其地爾行幸在而大御體乎滌賀斯都留爾御痛悉除古理病人諸母愈多利支養老元年八月甲戌遣二從五位下多治比眞人廣足美濃國一造二行宮一九月丁未天皇行二幸美濃國一諸國司等詣二行宮一奏二風土歌舞一云々といふ事あり。此酒泉を見顯し親にあたへし孝子、上奏せしに

より、太夫といふ尉を給はり、郡主となし給ふ。郡主は今の郡長、近古の宿老庄屋の如く、其村里の長となり、調貢のとり立なとする役なり、村里の百姓崇めて大尉どのといふ。不如意と成り役はやめても古庄屋などいふ如く、大家の格となり、さて此尉の字は位のもじにて、年寄の意はなけれど、謡曲高砂に、尉と姥として老爺の如くなせるより、若年寄宿老などいふこゝろのもじとなり、つひに老人の事のやう成しものならん。かゝる變化は猶いくらもあることなり。扨此瀧叡慮にかなひ、まゞ／＼幸行ありて浴養なし給ふに、僻遠の地御徒然なるを、諸國の長官参候し、御きげん伺ふに、藝人ども召つれきたり、歌舞を叡覧に入奉る、其うちに、いづれの國より出しものなるか、齢一百歳にあまる老翁色白き男と、いろ黒き男と、身に福祿壽の三德をそなへ、あやにをかしき愛敬をもち、常にゑめるが如きおもゝちにて、殊に藝の仕かた上手なりければ、聖上をはじめ奉り、大宮人みなも稱譽せられしが、還幸の時は都へも出で、其業することゝなりしに、人生限りあれど遂に神去りけるより、其後は此ふたりの容貌を面にきざみ、これを着てまねすることゝはなれるものならん。抑此伎藝は、岩戸神樂の業招天鈿賣命の洒落儛よりおこり、とり／＼に分派してつたはるが中に、此散樂ぞかりめでたきはあらず。さるを、雅樂寮の冷人ともいやしめて、朝鮮音にて散樂といへるは、役に立ぬ樂といふこゝろならんが、此名つひに此樂の本名と成れり。舞を亂舞といへるもおなじこゝろなるべし。よく／＼思へど此樂こそ本樂とはいふべかりけれ。雅樂は唐土よりわたりし譜にて、吾朝のものにあらず。能樂は皇國の言語をもちて、皇國にて作れる樂なれど、これこそ却て本樂なれ。しかれども、こゝろつらきは、足利のみだれ世、鎌倉にて、僧侶の著作せるものゆゑ、佛家の因緣因果に引つけ、成佛得達を主として、佛語を以て文章をなせり。忌々しき究みなれども、坊主ならではものしらぬ亂世、時の

勢ひは詮すべなし。されども、世に行はれて、朝廷にても叡覽在せられ、公家、武家、其他式内式外の大社にまで、神能と唱へて神前にて忌はゞからず、奏樂する事となりしも、皇國の言語にて皇國の樂なれど、神もみゆるし給ひ、おのづからしかなれるものならん。さて謡樂を見るに、此翁ばかりは、いさゝかも佛語なくして獨別なり。はじめにしるせる謡その文句をふたゝびいへは、

とう〳〵たらりたらりらたらりあがりらゝりとう、ちりやたらり〳〵ら、所千代までおはしませ、我等も千秋さむらふ、鶴と龜との齢にて、幸こゝろに任せたり
中略　鳴は瀧の水日は照とも絶ず、とうたりありうとう〳〵、　千早振神の命の昔より、久しかれとぞいはひ、そよや靈地やとんとや、千年の鶴は萬歳樂とうたふたり、また磐臺の池の龜は、甲に三球をそなへたり、天下太平國土安穩今日の御祈禱なり、在原やあれはなしよの翁どもそやいづくの翁とも、千秋萬歳の歡びの舞なれど、一まひまはふ萬歳樂〳〵〳〵

解　とう〳〵は瀧の水の落る音動蕩にて、たらりは垂り水の逆まき落るをいふ、たらりあがりらゝりとう〳〵とはたり下りさがりてはまたあがり瀧壺に玉ちるさまを打かへし〳〵うたふなり、所千代までおはしませど此所に永く居ませとねがひ、我等も其御蔭に鶴龜の齢にあひて永き幸を蒙らんといふ詞にて一段とし、鳴は瀧の水日はてるとも絶ずとうたり〳〵とまたうちかへし言ほぎて、いかなる旱魃にも、萬物を生育する水は涸ることなしと御世の豊なるをいはひ、千早振神の命の昔よりは天孫降臨の時、天照大御神言壽詔曰　寶祚之隆當與天壤無窮矣と詔して天降らしめ給ひしをいへるなり。そよといふはこれが則それじやといふが如し、次にいふそよやは、日本の地はそれゆゑ靈驗の地なり、とんとやは富足たる地なり、磐臺の池は所謂水の江の浦の島子かあそびし蓬萊山をいふにて、龜の背山なるべし。夫木集に、防人をよめる歌、立波に數

の音をうちそへてから人よせぬ沖津島守。といふ歌ある島にて、日本國のつくしの沖にあるはなれ島にて、俗にれいはすの島といふ、須勢理姫命鎮坐ます島なり。斯くめでたき地にして、萬國に比類なきを祝詞して、さて在原姓の老爺と見ゆるか、あれはいづれの國より出來りし翁なるか、今日の御祈禱千秋萬歳樂の舞をめでたくまひをさめたり。アヽ芽出たし〳〵といふ意を言外に含めてとめたるものなり。

井蛙漫錄

井上頼文

大塚瓢平ぬしは、若狹國大飯郡和田村の人にて通稱を庄太郎といふ。つねに歌よむことを好み、はやくより、その道の博士につきてまなびれしとか。この頃、雁のたよりにつけて、難波江のよしあしわけてよと、巳れが山田のかりはにれてこされたる言の葉の花籠よ。清き渚によるなみの、なみ〳〵ならぬが多かれど、伊勢の濱荻さや〳〵に、ひとふじありと覺ゆるを、いさゝかかりとりてなん。

大塚瓢平

山家卯花　すむやたれ片山里にのがれきて世を卯の花のかきねつくるは

朝郭公　鳴渡る朝妻山の郭公たがきぬ〳〵の床にきくらん

夏月　月影の出れはれなし涼しさもそふ心地する夏のよの空

夏草滋　かさなりて茂けるなつのゝ草みれは八重は葎に限らさり鳬

夕立　照日かけ曇る斗りもすゝしきをふる音たかし夕立の雨

夕　れのづから雲のゆきゝもたづまりて吹風たねし夕ぐれの空

旅泊　明日は又いくねの浪路へだつらんれなじ港

にはつるとま舟

深山鳥　珍らしき音にもなく哉鳥の名をとふべき人もたえし山路に

鏡　世の中の人の心もかゝらまし曇るかゞみはとる人ぞなき

樵路月　柴人はつま木か上に夕月の桂もそへてかへりきに見

筐底楮餘（四）

紫光

○秋の雨はげにあはれなるものかな。同じくしめやかなるものから、春の雨は何となう心のどかに、この雨はれなば、やがて花のたよりもきこえぬべし、などこゝろにまたるゝを、これはたゞもの淋しく、一雨ごとに蕭殺たる氣は世にみちくべし、などおもふに、こゝろもいとゞしめるべし。まして降りつゞく、この頃よ夜のけはひものさびしきに、獨ほの暗き燈にむかひて窓の外に點滴のひゞきを聞く、げに物あはれども何とも言はむ方ぞなきや、床になく虫の音もしめりてきこゆ。

○彼の白河樂翁公が雨の風情を叙したる中に、秋雨のあはれを記して、

秋くるころの雨はきのふにかはりて、何となうさびし、荻のうはかせ、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心ちぞする。つねにきゝなれしかけひの水の音迄もあはれふかくこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいてやゝ夜さむのころ、鳴からしたる虫の音の、雨のをやみに幽なる聲して、枕ちかく鳴よるもあはれなり。この雨に木々もそめなんとおもへむたけなどもれいいでなん、くりなどもはやれつべしなど、、童の物淋しげに、燈火にむかひつゝいひいづるもげにさま／＼なり夜深き鐘の音のうちしめるものから、流石に秋は聲冴えてきこゆるにぞ、まつ夜、わかれのれもひまでも思ひいで、鐘撞く人の

心をもあはれとれもふむかり感情はいと深かりけり紅葉の染そふも、白菊のうつりゆきてひとさかり見するも、尾花の露重げに打しほれたるに、龍膽の恨ふかく咲きたるあたりもつきぐ＼し、朝顔の皆枯れたる中にさゝやかに、赤う咲きいでたるがひるすぐるまでも凋みれくれたる、又あはれなり。野分の風はれぞろ＼しきものから雨は夕立にれとらざれど、さすがにあはれをそふるは秋のならひなるべし。といはれたるは、流石にいみじきものから、われは猶ふりつゞきたる雨のあはれを措かれたるをぞあかずは思ふ。強ちにわが心のかたよれるにはあらざるべし。

○かゝる頃山ちかき里にありて、夕ぐれ方などひとり窓に凭りてながめいださむに、常には目の前に登ねたりし山々も、雨雲ふかくれはひかさなりたれど、聊も見ねわかぬに、麓の森のたち迷ふ狭霧に、やう＼消ねゆかむとするなど、ものあはれなるけしきは、げに深く身にしむやうにればゆべし。

○またかゝる夕暮に、雨のしめぐ＼とふりそゝぐ野道を、村の少女ともればしきが、傘かざしてたゞ獨素足に草ふみて小走にあゆみゆく後姿は、いとあはれなるものなり。袂なども露にぬれそぼちたるが。

○今宵孤燈のもと物淋しく、かゝるよしなしごとをのみかきしるしぬ。われは、れもふ、かゝる秋の雨夜にも、一家親しく團欒して、笑語長閑ならむ家庭の樂はそもいかなかりなるべきと（九月二十五日夜しるす）

歸省雜錄（二）

白松園主人

早く、葉月も過ぎて、長月にもなりぬ。秋風そよと立ちそめしより、桐の一葉も數そひて、夜毎にまさる虫の音も、野末に靡く尾花が袖も、更け行く月に、荒るらむ心地して、露になまめく女郎花、黄菊白菊折り添へて、野路の秋萩踏み分けつゝ、父兄の墓に詣うでゝ

見れど、荊棘路を遮りて、青塚苔滑かに、千草高く生ひ茂りて、葛の裏葉のかへすぐ、年頃諸方を漂泊して、家を顧みるに邊なく、かゝる不孝の悲しさに、標の松のみ、青やかにみづ枝さして、迎へ貌なるも哀れなり。ふし拜みつゝ、つくぐとうち守るに、零露瀼々として、松吹く風に、虫の音しげし。

金風一たび至りて、燈火親むべくなりぬ。近き頃に、再び東へ上らんとて、その心がまへに、急はしきものから、年頃納めおきつる、篋底を探りて、父兄が手ならし、書ども、取り出で見るに、古反古などの中に、一時のすさびに物しつる、作文詩歌などればかり。彼れこれ見もて行くに、彼の兼好法師が「一人靜りて後、ながき夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじと思ふ反古など、やりすつる中に、なき人の、手ならひ、繪がきすさびたる、見出たるこそ、只そのをりの心地すれ」といひけんも、げにとればねて、わりなく戀しさまさりけり。さるが中にも、兄がまだ、いと若かりし時物せる、椹野の里歌と、題するものありけるを、開き見るに、我郷里、小郡村の地圖を物して、それに長歌を添へたり。其の緒言に曰く

椹野といふは、小郡村の庄名なり、小郡村は、往古、上郷中郷下郷の、三郷に分てりしを、後中郷を二つに分ちて、上下に附けて、これより上中郷下中郷と、唱へたり。今又はぶきて、唯に、上郷下郷といへり。抑、小郡村は、吉敷郡の中に、ありといへども、その實、別に一郡を成せるが如き、廣き村になれれど、やがて小郡とはいへるにて、猶熊毛郡を、一名小周芳といへる如きなるべし。今玆に、物せる椹野の里歌は、椹野とはいへれども、下郷のみにて、上郷のかたは、すべて述べず、且つあるが中に、小村、小川、社寺なども、漏したるが多かり、さるは、此歌は、唯目に見ね、心に浮ぶがまゝを、ものせるにて、此處漏れたり、此れいはでは、かなはずなどやうに、強ちなる、むづかしきわざをせず、かの東下といふ

もの丶如く、道中記にはあらじかし、されど茲に、別に村名、川名、社名、寺名など、すべて揭て、圖さへ物して、覗ん人のたよりとす。かく記して、自から測量せる地圖を、挿入し、さて長歌を、七五の調に作りていはく、

（呉竹）くれたけの
（枕方）まくらべちかくなりわたる（鳴）
（楢野里）ふしの丶さとのあさぼらけ
おどろかれつ丶まきとを（槇戸）
（八幡鼓音）やはたのつゞみねもあやに（鮮）
あけていづみのみねにある（泉峯）
ふかきいづみとおほかみの（泉　大神）
（御稜威）みいつはいまもいにしへも
かはるときなくいやながに（瀰永）
（糸掛）いとよりかくるやなゐだの（柳井田村）
（關　板屋跡絶）せきのいたやのあとたゑて

（明治の初め小字柳井田村に砲台を築き關を据ゑられけるが今は除かれて跡絶ゐぬ）

（鳰水澤涸）にほのみざは丶かれぬれど
むかしにかへらぬ鳳丈の

（鳳丈池は關を作る時埋められたり今は關除かれたれ共鳳丈池は昔にかへる由なし）

（池水鏡）いけのおもてのみづかゞみ
（掛忍草）かけていつかはしのぶぐさ
れふしやどせるまつのきの（生寄　松の木川）
（川水上）かはのみなかみたづぬれど
つきのみやこのかつらがたに（月部　桂が谷）
（長延）ながくのびたるやまてやま（山手山）
しづまりませるおほかみの（鎭座　大神）
（本社山口）もとつやしろはやまぐちの
いせのやしろのわけみたま（伊勢社　分靈）
（皇孫統御）すべらみまごのしろしめす
おほやしまぐにいやとほに（大八洲國　瀰遠）

ひらけゆけどもこのみやは
　みたにのかげのいやせばに
うもれゆきつゝたにぐゝの
　さわたるとこぞなりにける
あはれ〳〵とよをおもひ
　くにのためにとあづまなる
おほぬがはらのつゆとのみ
　きえにしひとのなきたまを
しづめまつれる招魂社
　みそらしぐるゝあきはのみや（秋葉神社は高き山上にあり）
いがきのまつのこかげより
　ふりさけみれどめもはるに
ちまちたのもにしづのをが
　みなわかきたりとりつくる
たりほのいねのやつかほの
　おきつみとしのさかえをぞ
いそしみさわぐゆふまぐれ
　ふせやののきにいぶせくも
ゆふけのけぶりたつなべに
　信光寺のかねきこゆなり
さだめなきよのたゞずまゐ
　きのふのふちはけふのせに
になひいだせるたなものゝ
　わたらひしげき津の市や
このもかのもにやどはあれど
　たびのうきねをなぐさむる
うかれめだけのなよたけの
　（津市の尻並松原のかしらに遊び女住めり）
よながくひとをまつばらの
　あらしのかぜはみにしめど

みかのゆふづきいらぬまに
そでふりはへておもふどち
はこぶやあしのあはしまや
もりのこかげにかず〳〵の
かはらぬちぎりをいのるまに
（粟島のほこらは若き男女が詣づる處なり近江國筑摩の社に似たり）
よはほの〳〵とあけわたり
とよさかのぼるひがしづの
かはにわたせるながはしの
おともとゞろとふみならす
あしもとすゞしみなづきの
まつりのよみやのみあかしは
みちくるしほにてりわたり
おきにしらぶるものゝねは
よせくるなみをなごめてむ

（嚴島の社は川上にあり祭の宵宮には川下に幸し來りて絃歌を舟に奏する例也）
きしにかゝれるおほぶねも
たなゝしぶねもうらやすく
むすぶとまやのゆめさめて
あしたのかはぎりたえ〴〵に
あらはれわたるあまごひやま
かよふちどりのなくなべに
ふちふのわたりもみえにけり
ふちふのわたりもみえにけり

又、吾妻に出でゝのすさびとればしく、東京の節句、といふを題にて、

節句をいはふ事は、昔髮ゆひたりし時、せしわざなり。今は、暦の面に出たる、祝日をこそ祝ふべきなれ。今をおきて、昔をせんは、髮きりたる者の、するわざならずとて、師にも敎へられ、役塲よりも、今を祝はざらん家は、すべきやうありと、ふれたりけ

るより、やう／＼國旗を揭げて、今を祝ふやうになりぬるは、己が十五六歳の頃なりき。されどなほ、昔をあながちに、え思ひ絶えで、其日になれど、桃を折り、菖蒲をひき、菊を飲むわざは、昔のまゝに今もすめり。田舎こそあれ、東京なんどは、さるものにて、早うより、思ひすてつらんと、思ひつるは、東京を思ひすごす、田舎びたる心なりき。東京は、田舎にもましてこそすなれ、唯桃を折らず、菖蒲をひかず、菊を飲まぬが、異りたるなり。菊をのめどこそ、菊の節句ともいへ、菖蒲をひき、桃を折れどこそ、桃の節句、菖蒲の節句ともいふなるを、いかなれど、かうむねとすべきわざを、うちすてつるぞといふに、そは故あることにて、舊暦の節句をぞ、今の暦の日に直してすなれど、折は一月、はたふた月も早くて、桃も、菖蒲も、菊も、ほゝゑみだにせず、つれなくしらぬかほなれど、折りも、引きも、飲みもせられぬぞ、いと／＼あいなきや。六日の菖蒲、十日の菊とは、おそくて、及ばぬをいふ事なるが、こは余りに早ければ、いかにいひてかよからん。昔の名殘を惜むとならば、昔せし、昔の暦の、まことの日にこそ、すべきなれ、など田舎人に聞かせたらば、うちもとくべければ、こは別に、深き故ある事にやあるらん。おのれ、今年東京にのぼりて、五日の節句に、ゐあはせたりけるに、舊暦にては、三月の二十日なりければ、山吹の花、今をさかりと、さきみだれたり、

山吹の花さくころにあつまぢは
　軒のあやめもにほふなるらむ

とつゞけたりしも、田舎びたる心ならんか。（未完）

兩縣令競レ義婚レ孤女（三）

湘玉女史譯

前に述べし如く、養娘は老婆が日々に打ち罵りて虐く使ふに堪へ兼ね、賈公の家に回るを待受け、仔細に老

婆の所爲を告訴んと思ひ、先づ小姐の房に到りて其事を稟し知らせたるに、月香は斷然肯かずして說き諭やう、汝の腹立はさることながら、當初我等兩人は賈公の爲に錢を用ゐて買はれたるもの、我は原より他に擡擧られて安樂に日を送らんは指望ざりしなり。よしや今日賈婆に行届かぬ取扱ありとて、固より賈公の干り知りたることにあらず。さるを你より老婆の所爲を賈公に告げなば、家内に波風立ちて、賈公が這段われらに盡し與たる美情を沒了して恩を仇にするに似たり。我と儞とは世に薄命なる人と生れたるなれば、何事も只索耐忍ぶを上とす、必告訴んなどの心は起すまじと寛めければ、養娘もそのまゝ思ひ止りたり、一日賈公は商を做し終りて旅より家に回り來りたるに、圖らずも養娘が外にありて水を汲むに撞着たり、但見れば他の面貌は以前に比れば甚く黑を帶び、頰の肉も瘦殺たり、賈公はいと怪みて養娘に向ひ、われ兼て儞は專ら小姐に伏侍て居よと言置たるに、誰か儞に水を汲めと命じたるや、先づ水桶はこゝに放着け、人を叫て擔はせんと言ひければ、其場に水桶を放了たるが、養娘は渝らぬ賈公の情ある語に感じ、嬉しさと悲しさとこきまぜて、覺えず幾點の涙を流したり。賈公はこの体裁を見て盤問はんとする時他は手にて、涙を拭ひながら忙々的家の裏に奔り去りたるゆゑ。賈公は心の中深く疑ひ、老婆に逢ふやいなや、石小姐と養娘の身の上に甚か變りたることなきやと問ひたるに、老婆は甚の事もなしと答へたり。賈公心にかゝらざるにあらねど、初歸の際とて事體多頭に紛れ其儘に閣き幾日を過したるが、或日賈公はふと近隣の人を訪ひ、回り來りて老婆の房にゆきたるに、他は房に居らざりしゆゑ、廚下にもや往きたるならん、他を尋ねて說話せんと廚下の方に往く折しも、養娘が廚下より出で來るに撞見たり他の養娘は托盤も持たず、右の手には飯を盛りたる大碗を拿ち、左手には一隻の空碗を拿ち、其碗の上には一碟の醃菜葉兒を頂たり。賈公は他れの樣子を知らん

と思ひて、閃く隱處に入りて看居たるに、養娘は小姐の房中に走り入れり、賈公は其譯を省り得ず、這飯は誰か喫するものなるや、特に些の葷腥ものも添へあらざりしがと怪みに堪へざるより、厨下には往かずして、悄々的石小姐の房の前に向ひたる門の縫裏より張ひ居たるに、小姐はかくとも知らざれば、かの碟にありし醃菜葉兒を以て飯を食し居れり。これを見たる賈公はさてはと省り、心中大に怒り、走りゆきて老婆と鬧を引起たり。老婆は騷がす道やう、葷腥は儘有り他に與へて喫はしめざるにあらず、丁頭が怠りて房へ擕びゆかざるならん、されどとて老娘親ら飯を擔ひて房に往くことは出來がたし。賈公道ふ、われ原倆に話したるは、石家の養娘は只房の中に在りて小姐の伴となし置けよ、我家の厨下には走使的も少からざるに、誰か他を房より出して飯を擕ぜせたるや、又前日われ家に回り來りたるとき、養娘は兩眼に涙を噙着べ、外街に在りて水を汲み居るを見たり、このときわれ已に心に疑へり、これ必家中のものが他に無理な働きを爲さしむるならんと思ひしが、身の匆忙き儘に細に問はざりしが、原來倆恁地に恩に背き義を忘れ、小姐への仕向迄も都て怠慢にし、現に厨下には許多の葷菜を放着ながら、却りて小姐には白飯を喫はしむるとぞ、是甚の道理ぞや、われ家に在りてすら、尙かくの如き苛き取扱を爲す、われ外に出しあとは、三度の食事も碌々宛行はぬこともあるべし。我這番回來りて他們の面貌を見るにいづれも著實に黑く瘦たり。老婆道ふ、別人家の丁頭を倆這般にいたはるは何故ぞ、他は養ひよきゆゑ白白壯壯て居れり。倆他を收用て小老婆とする心なるや。賈公道ふ、放屁、是什麽なる話しぞや、倆這樣に道理に通せざる人なれど、われ倆と講嘴すまじ、明日を始めとし、當直的をして每日別に一分の肉菜を買はしめかれら兩口に供給ひ、家火中の算帳外とすべし、さすれど倆的の口食を奪丁す心配もなるべけれど、倆必歡喜ぶならん。此時老婆は自家が是からぬを覺りたれ

ど分跡はなけれど、只負惜みに口の裏にて含々糊々と嘟了けるが、其儘言語を止めたりけり。是より賈公は當直的に吩附け毎日肉菜を買求め、二ッに分け厨下の丁頭們を呼び、各自安排へて飯を小姐の房に送らせたり。幾時の間は諸事能く齊整ひたり。

人情若比二初相識一　到底終無二怨恨心一

賈昌は石小姐を奉養することにのみかゝりはて、一年餘りも外に出て丶經營を爲さゞりき。老婆も做意好を修めけれど是迄の事は互に忘れたるが如く打ち過ぎけり、月香は賈公の家に養はれてより五年の星霜を送り看々成長し見違ふ程になりけれど、賈昌の意の中には、一個の好主兒を求めて早く他を嫁入らしなど、方纔われも放心なり、其上にて外に出で丶生理をせんと、是賈公の心事にて、背地裏自らゆきて勾當たり。且賈昌は老婆の不賢を曉りたるゆゑ、他とは一向商量せず。もし湊巧緣談極まらぞ、粧奩を買ひ調へて嫁入せん、さすれど家内に風波も起らず、乾淨とすべしと思ひたるに、何ぞはからん此姻緣は好き偶を得ず、左かし好き偶を得ざるにも亦緣故あり。第一賈公は百姓にて身分低微し、第二賈公は石知縣の小姐を嫁入らす事なれど、身分の低微き人にては石知縣の名を辱しめんことを怕れ、俯就心なし、さりとて些名目のある的は、いかで百姓の家に養はれたる娘を娶とせん、是好事の成り難きいはれなり。賈公は急に緣談の調ひ難きを見、又老婆も以前とかはりて和順く、家中も供給も常規を立たり、此上生意を擔閣くこともなりがたし、只得又外に出で丶商を爲さんと決心し、出立數日前に、豫め先つ老婆を呼びて十來次も叮嚀に誡め好生、小姐と養娘の看得をせよと吩附け、又石小姐を座敷に請し來り、再三よく慰め、養娘迄も好言をもて安放せ、又老婆に吩附て道ふ、他の骨氣也儞に比ぶれど重きこと幾百分だ哩、儞何處迄も他を慢ることなかれ、若し先度過に懲りずしてわが言語に依らざるときは、われ家に回る時儞と夫妻たることを認めざらん、又當直的と厨下の

丁頭とを喚びて、都て遍く吩附たるのち方幾我が門を立出たり。

臨レ岐 費ニ盡ス叮嚀ノ語 只 爲ニ當初 受ルヿ德ヲ深一

（未完）

一本脛の鶴

龍 孫 生

鎌倉管領時めきし頃かとよ、相州三浦郡に三浦雁鋤と呼べる郷士ありけり。この人常に狩獵を好み、或は山海に得意の弓勢を試み、或は鷹野に自慢の飼鷹を放つぞ、雁鋤一代の娛樂とはしける。

偖ても雁鋤、今日しも氣に入りの下郎可內と云へるを伴なひて、身はゆらりと馬に跨り、左手には手比の弓を携へ、鷹の羽さしたる征矢幾本となく矢靫に狹みて脊に負ひ、好き獲物やあると海邊さして急ぎ出でぬ。一帶の砂原遠く連りて寄せては返す渚の海波もいとのどかに、天地共に悠々として實にや世の憂きと云ふもの無きに似たり。雁鋤是等の景色には目も止めず、獲物や如何にと鞍壺に突立上りて、四方をきつと見渡せど、得たりや得たり、斯くぞとは思ひきや數羽の田鶴渚に下り立ちて頻りに餌を求むるさまなり。雁鋤見るより大いに悅び、可內にそれと心を得させ、馬の足搔も最と靜に、矢比を計りて立止まり、弓に矢番へ、よツ引きかためて兵と射れど日比の手練に過たず、一羽の田鶴は頭より眼を射貫れたれど如何でか堪らん暫し羽たゝきしたるのみにて其の塲にたふれ友を打たれし其の餘の田鶴は驚き騒ぎて雲月遥かに飛去れり。雁鋤喜悅斜ならず、可內に擔ぎ歸らしめ、この好獲物をして我が一人の樂みにせんも興なき業なれど、明日は一族を集めて饗應せんと、それ〳〵に案內し、さて、可內其方は調理に巧みなれど手練を施してこの鶴を丸燒にして呉れよ、明日は一族の者共にこれは〳〵とぞかりに驚かし呉れんとて、雁鋤有頂天になりて其の夜は

碌々眠られもせず。

可内は主人の仰せ畏まりて、田鶴の羽を拔き腸を取り、丸燒の調理にかゝりけるに、火の追々と肉に廻るにつけて旨げなる臭は四邊にきこえぬ。ことに三浦家が門番の娘にお萩と云へる者あり、鬼も十八とやらの年頃、今しも衣の汚れなど洗ひ居けるが、得も云はれぬかんばしき臭の鼻を衝くに堪へかねて、獨り本家の厨房に來て見れば、可内が一生懸命の調理の最中なりけり。お萩見るよりはしたなくも其の肉の欲うなりて堪へられねば、日頃間好き可内どの妾の云ふこと聞き入れて、その鳥の一脛下されやと云へば、可内頭をふり、餘の事なればお前の望むこと何とて否と云ふべきぞ、されどコハ御主人が今日の珍客へ御自慢のお肴なれば、如何にお前の賴みじやとて、これ計りはと辭めば、辭まるゝ程猶お萩は望ましく、强いて乞へども可内の聞入れぬに、お萩、それでは此の後妾もお前の云ふこと賴むことは何事もきかぬ程にその心して居給へや、衣の綻び洗濯もの、お前が云ふがまに〳〵仕てあげたに、一世一代の妾の賴み如何に御主のものじやとて、其の大きい鳥の片脛位、ヨモ分けれらぬ事もあるまいに情けなきお前の心とつんと、强木の蔦がづら顏に色して見せければ、可内迷惑顏にさう腹立てゝたもんなと慰め云ふにお萩は、そんなら妾に下さるかと疊みかけられ、可内はと〳〵持て餘し思案の首を田鶴の首より長うせしが、エゝ儘よ折角のお前の賴み叶へて進せやう、したが他言は無用ぞと、脂肪ぎりたる片脛切りて與へければ、お萩、悅び袖にかくして持歸りける。

三浦家にては來客接待の用意も全く整ひ、當日第一の御馳走たる鶴の丸燒も出來たれば、雁鋤には調理の鹽梅一見せんと、可内これへ丸燒を持てとの仰せに、可内は恐る〳〵大盤に乘せて御前に据うれば篤と覽て不思議の面色、コリヤ〳〵この鶴の脛は一本より無き樣なり如何致したとの仰せに可内はぬからぬ顏、御主人

こは始めより一本脛の鶴にて候ひき。雁鋤聞くより赫と怒り、何と申す、始めより一本脛と申すか、世の中に脛一本の鶴といふものあるべきや、察するところ汝調理の折にそを偸み取りて食ひしならん、不忠極まる汝、此の儘に捨てゝは置かれずイデ手打にして呉れんと、刀の柄に手を掛くるに可内飛びしさつて先づ〳〵と頭を下げコハ存じも寄らざる御疑ひを蒙るものかな、可内御主人に對して何とて僞を申上ぐべきや眞實始めより一本脛の鶴にて候ひき、身は下郎に候へども弓矢八幡も照覽あれ、若し僞りを申上げしならば神罰立どころに至るべしと樣々に言譯するに、雁鋤も急立つ胸を押し靜め、好し左あらばこれより汝を從へて今一と度濱邊に赴き、一本脛の鶴の有りや無しやを確めん、者共馬引けッと呼はりつゝ、馬にヒラリと跨りながら後を顧て、可内若しも一脛の鶴無くんば汝其の場は立たせぬぞ、　御仰せにや及ぶべき其の時こそは御主人の御手を汚すまでもなく、下郎切腹仕るべしと、可内は早速に答へつゝ主人に從ひて昨日の濱邊に來て見れば、今日も數羽の田鶴は下り立ちたり、雁鋤それと見て、如何に可内斯く下り立てる數羽の鶴何れも長き脛を二本づゝ保つに非ずや、これにても猶廣言吐くやと眉逆立つに可内は、イヤ御主人の仰せの如く鶴とて多くは二本の脛を持ち候へど、多數の中には、一本脛の珍しきものありて、昨日射止め給ひしは其の珍しきものにてありけるなり。左れば今こゝなる鶴のみを見て下郎の罪を定め給はんは餘りに御情けなし、猶此の外をも探り給ひて御疑ひを晴し下されたしと云ふに、雁鍬は强情なる奴かな、されど今一度は汝の言葉に從ひ見んと、更に馬の首を向けかへて又十數町進めば、遙かに一羽の鶴、片脛を羽翼の間に入れ一脛にて立ち居たり、可内それと見て、御覽候へ下郎の申すことは僞りならず、一本脛の鶴こそ居候なれと云へば、雁鋤から〳〵と打笑ひ、尾籠なる言な申す者かな、イデ汝が化の皮を剝し呉れんと、發失と馬に一

鞭を加へければ馬は驀地に駈け出す、音に驚き鶴は羽たゝきし双脛を露はして飛去れど、雁鍬、如何に〳〵可内これにても猶一本脛の鶴は有りと申すかと威丈高に呼ばゝれど、可内すかさず、コハ御主人の御言葉とも覺ゑはべらず、昨日は今の鶴の如く一本脛の處を射止め給ひたればこそ其の儘に候ひしなれ、昨日とても只今の如く射止け給ふに先だち馬を駈けらせ給ひなば、畢に驚き鶴も我身の一大事なれば、逃ぐるに術よからしめんと必死の折柄、忽ち二本の脛となり申すなりとぞ答へける。

此の結局如何にと後にて聞けば、雁鍬も可内が當意即妙を感笑して罪を許し、一座の珍客は一本脛の鶴を賞味せしとなん、偖て片脛はれ萩が只一人にて食べしや否やは誰れも知らず。

執心

蓬生屋女史

蒲生君平秀實は、下野の人にて、生れながら英雄、その先、會津參議藤原氏郷氏より出でたりし事を、一夕祖母に聞き、慨然として憤を發し、誓つて祖先の名聲を興さむ事を欲しぬ。長するに及び、書をよむを好みて、晝夜書齋をはなれず、かつて下野國、鹿沼郡、鈴木石橋の家に寓せしが、折りしも年のくれ、煤掃を挑ひ、家を淸めて、春を待つ心せはしく、一家擧ていそがはし、何れも箒を取り、雜巾かくる等、働らかぬは一人とてなき中に君平は居らず、いそしき折りから、何處へは行きけるとて、家のくま〴〵くりや、厠まで殘りなく尋ねたれど、ある事なし、何處には行きけるぞと、人々眼をめぐらし、果ては屋上を見上げしに、君平は端座して、ひとり肅然書を閲し、始めより其忙しきを知らざるものゝ如し。人々驚きあきれて、やが



て屋にのぼり之を引き下せども、君平は悠然として巻を釋ざりきとなり。さやうに勉勵して遠く聖賢の道をたどり深く忠孝の道を心にをさめたり。嘗て下野、古河に在りし時、客數人と酒を飲み興せしが、酒酣なるとき、君平起つて厠に行きぬ、折りしも夏の夜もや丶更け行き、厠に聚蚊雷の如く泣きとよみ、尻を食ひ、足をくひ、かゆさに堪へざれど、厠中の塵を拂はむために、入れれける團扇をそのま丶れつとり、其不潔に染り居るをも知らず臂を拂ひ蚊を驅り、聚蚊とた丶かふ折りしも、席中楠公を論ずる者ありて曰く、楠公は忠なり、智あり、されど公の死するは早かりしなり、よろしく生を全うして　皇室をなほ補すけんことを思はず、湊川に於て戰死せしは、徒らに身を潔うして、名を售れるものなり、なほ眞の忠臣となし難しと、一人云ひし說の新たなりしに、何れも奇を好むの人情、坐客みな手を叩き、其說に雷同しけるを、君平聞きていたく怒り、己れ奇言を吐きて人をまどはす憎さよと思ひさま、卒に厠を飛び出で、蚊を拂ひ居たる團扇をそのま丶揮ひて、之を辨駁せしに、一坐其の臭の甚だしきに堪

へず、みな鼻を掩ひ、面をしかめたり。酒をつくるもの君平を見、君平が揮ふ所の團扇を指し、臭きこそ道理なれ、あれ見給へ、厠の中のものなりと、之を見れど、不潔に染みたり、座上の杯盤も、君平の衣袴も皆汚れけるに、坐客みな忙然たりしとなり。興をさまして、興を添ふ。義の爲めに前後を忘るをかしくもかしこきことゞもなり

一休和尚の話（四）

草の屋主人

さても一休の大徳、殊に答話よき事、古今無雙、世にかくれなく聞えて、物を好む者はみな之を訪ひ、之を招ぎ、和尚もまた人を撰まず、所を撰まず、之に遭ひ、之に行きぬ。上京に糸屋由右衛門と云ふがありけるが、かね〴〵一休和尚の答話の古今ためしなきよしを聞き知り、和尚が住む紫野へ參り、何にても珍らしき事を承はらむ、いなさるよりは此方へ齋に申し入れて答話承らんと思ひつゝ、和尚がり行かむとせしに、和尚は今日も旦那がり齋に招かれ、今しも歸り給ふ途すがら行きあひ、大によろこび、さて〳〵よき所にて和尚樣御目にはかゝりけるよ、明日は私方少し志す日に差し當り候へど、御坊さまへいさゝか御齋を進じまゐらせたく、たゞ今御寺へ伺候せむと志せし道に、折りよくも御目に懸りしものかな、明日は必ず御時をたがへられずに必ずよと申せは、和尚心得ぬ、して宿所は何處にやと問ひ給へど、わか宿は室町通り、そんじよ其處なりとて指しもせず分かれぬ。一休は何に心得てや、重ねては問はせ給はず、翌日は早天よりこしらへて、彼のもの、宿を問はむとて室町通りへ出でられけるが、やがて目にも入らぬほどの小さき鉈をつりてある人の門に立ち、物も云はずつと内に入り給ふ。之は一休小さき鉈をつくりあるを見て此方と判じたるなり。さて其家の座敷の口に犬の皮を敷た

るが、和尚ずか〳〵と踏み通らるゝ折りしも、亭主出であひて、さて〳〵れん路次あしき折りふし、和尚さまにはようこその御出で、御太儀の御事、して御足よごれ給はん、洗足まゐらせむと申せど、いや〳〵唯今かはをこゐてまゐり候ゆゑ、少しも苦しからずとすましきりて仰せらるゝに、しすましたる亭主ははやくも案に相違し如何にもして一ぱい喰はしたきものとて、さて御膳もこしらへ差し出しぬ。和尚蓋をとつて御覧ぜらるゝに、何れも小糖を一杯盛り入れたり、一休さあらぬ体に居給ふ處へ、亭主座敷へ出でいざ〳〵志の齋、召し上がられてと云ふを待たず、さて〳〵今日の御志は三七日にて候かと仰せらる。之れは和尚ものゝ蓋取りしに糖なりしかど、みなぬかと推せしなり、此度こそは一杯喰はさむと思ひしに、喰はされて亭主は開きたる口ふさがらざりしが、思ひもうけし事みな云ひ潰ぶされて歸さんも口惜しく、一つたりとも報はまほしくて、やがて錢百文を取出で、これは今日の布施にまゐらするなり、是によらず、居ながら御請け下されと申すに、一休聞きもあへず、心得申候此のまゝにて請取申すべけれど、投げずに此處へ賜はり候へと申されけり。云ふ事々かきけされ、亭主はたゞあきるゝばかり、さても〳〵御坊様は、きゝ及びたるよりは、答話僧にてまし〳〵給ふ。凡人は思案して、やう〳〵ひねり出せし舌のね引きも入れぬほどに、早くも仰せらるゝ古今たぐひなき御坊さまやと感じけるとなり。またある時の事なり、和尚一大事因縁の御工風なされし御時、諸旦那をはじめれん友だち、相變らず一休が話聞かんとて、朝より夜更くるまでひきもきらず訪ひきて、さまたげとなり、うるさく、かしがましげれど、御心地あしゝとて、一向人々に出であひ給はぬに、あれほどに面白き御坊さまのかくひき籠り居られては、世の中何とならさびし、如何せし事とて皆人心もとながり、折り〳〵に御見舞ひ申せど、毛髮はうじ〳〵とし給ひて、何とも色見えぬ御なやみとのみ仰

せられけるに、知音の人々、旦那だちみな心遣ひ、時の名醫を入れ替る〴〵御見舞に上せて、そが御容子を伺へど、御脈は如何にもよろしく、不思議なる御煩ひやと醫師ども、何れも〴〵申けれど、旦那知音たち寄りあつまり、げに不思議なる御煩ひ、めつ様しつねつのなやみとは思へず、如何に大德とて、若き御僧の御事もし戀の煩ひにはれはしまさずやと一人申せど、皆さもやと同じ思ひつき、とやせん、かくやせん、一層まのあたり和尚に聞き定めして、若しさやうならど、皆々よりて金の足駄履きても其の人を尋ね出して和尚が御心をとき奉らんと、彼方に云へど、いや〳〵人多く知りたりとればしめさど、中々にわかし給はぬことや侍らん、密に中よき中の知音のみ、三人ぞかり見まはり、機をはかり、色を見て、そと伺はゞ誰と名ざし給ふべし、其折りにこそ皆々して腕をつくして尋ねまゐらせむ、小田原評議、さては一決して、さやうになす事となりぬ。さて、尤も知音の者三人申合せ、和尚がり行きて御容子伺へど、一休出で合ひ、四方山のはなしありけるが、三人のうちの一人すゝみ出で此の間よりは病氣、醫師どもを引きかへ見まはせ候へど、常に變りたる事なしと皆申候さても何を煩らはせ給ふ、平常には違ひ、何とて心深く渡らせ給ふぞ、定めて戀をなさるゝと見付侍るはひがめに候か、ありのまゝに仰せ聞かされよと打ちつけて申されけるに、一休はゝ笑み、如何にも嬉しげなるれん貞ぞせにて、此の上は何をかつゝみ申すべき、此の日來戀わびさてかくの如くやつれはてゝ候。よくぞこそ尋ねさせ給ふよ、誠に身にあはぬ戀ながら日頃のよしみに叶へてたべ、わが心系による物ならなくに、みだれ苦しくてはづかしや、それぞと名をもうちあけ申すべけれど、まのあたりにて耻づかしうて申がたし一筆書きてまゐらすべし、門外へ出で給ひてより開き御覽じて返す〴〵我が望み必ず叶へたまひ、世にもうける玉の緒のべ給はらぞ、よき道を敎へ仕らんとて、奥の間

へずんど入り、一筆何をかさら〳〵と書き、引きむすび、三人に渡しはづかしさよと引き入り給へど、三人はよろこび、御心やすく思し召せとて、一同門を出で、さてもよく〳〵のわづらひ、いたされんやつれや、さても大德に思ひをそめぬるは、そも誰なるらむとて、狹く〳〵とて披らき見れど、

本來の面目坊がたちすがた
　一目見しより戀とこそなれ
我のみか釋迦も達摩もわらがんも
　此君ゆゑに身をやつしけり

とか〻れけるに、人々はあきれて、さてもをかしき御歌何處までたはぶれさせ給ふにやと人々感じ感せぬはなかりしとなり

笠子笑談集

金津常十郎

元の土

茶碗土瓶に向て曰、汝は平生いかめしき形をして、とかく口の出すぎた物じや、われは形がちいさくても、貴人高位の手にものせられ、其役がすむと棚にあがりて樂をするなり、貴樣はぎつさうがわるいから毎日しりをやかれぬ事もなく、下に置くときさへ、疊をこがさうかと思はれて、板のうへに引据られ、見る目も哀れと思ふなり、今より心を改めてたしなんだがよいといへど、土瓶例の口をやり出し、さて〳〵ちいさな形をして、口にも似合ぬ大それた事をいふ奴かな、外のわるい事ばかり見たて〻いへどなんでもいはる〻ものなり、じたいわが口より茶を出せばこそ、貴樣が其御影で貴人の前へも出され、高位の手にものせらる〻なり、其恩をもしらずして、我身勝手な事ばかりぬかしをる、そんなことをいふて居れど、折ふしは取落されてこみぢんになり、其うへでごみだめへ放下され、いろ〳〵なむさい物かぶりて、日のめも見ずに居るなり。それもしらず、あたまに口のあいた事をいふやつと大口あけてどつと吹き出せど、燒物師が聞つけて、土瓶も茶碗も

たゝきこはし、土にませて擂鉢に造りたり。
註に曰、智あるも愚なるも、皆自然に受得たる天性なれど、智をつけたいと思ても智がつきもせず、智のあるも智のなきも、受まへの性質なれど、自分まゝにはならぬなり。たとへど女の見目のよきも見目のあしきも、自分が好にてすることにてはなし、又其見目のよき女か不仕合で、見目のわるき女が仕合にありたり、是皆自然のことにして、人心に量りがたし。是のみならず、諸事の天事皆彼自然と云もの、是をなす燒物師は、此自然の物のたとへなり。故に、物皆吾身を吾物とは思ひがたし。即父母が心に男子を欲しても、此度の子は男じやと云請合もならず、女子がほしくても又同じ、もしも父母の心まかせになるものなら、誰しも片輪の子や、悪人になる子は持つまい、又同じ人間とはいへども、人々容體の差ふも、性質の差ふも、皆是自然にしてなるものなればなり。

梅の下風（十一）

白魚女史

笑止々々、上臺馮司は、けしからぬ子、勘當すべし、たゞ何事も此儘に穩便にせられよと傳吉はじめ村中へれうハい頭かき〳〵歸りし後は、れめ〳〵とれ梅親子をも、金子をも引きとりて其後は勘當のどうのと云ふ沙汰もなく、莊屋の家には新夫婦が二組、軒のつどめれどろきあきれて俄に巣を移しぬ。
なんしよのこむだかな、はむとうに庄屋の息子どんは人ではないな、たまへ聞かつしやつたかと、高聲に話しかくれど、うん、あれ聞かでどうする、内の人が歸へて來ての物語り聞ひてたゞれつたまげるどかり、それに引きかへて傳吉どんのさつばりとした事、聞いてさへ腹が沸ね立つて馬の糞か牛の糞ぶつけて、ぶつけてやつても腹がなほ癒ねぬどかりなるを、何の咎めもせす、巳れがいくぢなき故として、さつばり緣を斷つて



たゝきこはし、土にませて擂鉢に造りたり。

註に曰、智あるも愚なるも、皆自然に受得たる天性なれば、智をつけたいと思ても智がつきもせず、智のあるも智のなきも、受まへの性質なれば、自分まゝにはならぬなり。たとへば女の見目のよきも見目のあしきも、自分が好にてすることにてはなし、又其見目のよき女が不仕合で、見目のわるき女が仕合にありたり、是皆自然のことにして、人心に量りがたし。是のみならず、諸事の天事皆彼自然と云もの、是をなす焼物師は、此自然の物のたとへなり。故に、物皆吾身を吾物とは思ひがたし。即父母が心に男子を欲しても、此度の子は男じやと云請合もならず、女子がほしくても又同じ、もしも父母の心まかせになるものなら、誰しも片輪の子や、悪人になる子は持つまい、又同じ人間とはいへども、人々容體の差ふも、性質の差ふも、皆是自然にしてなるものなればなり。

梅の下風（十一）

白魚女史

笑止々々、上臺憑司は、けしからぬ子、勘當すべし、たゝ何事も此儘に穏便にせられよと傳吉はじめ村中へおうへい頭かき〳〵歸りし後は、おめ〳〵とお梅親子をも、金子をも引きとりて其後は勘當のどうのと云ふ沙汰もなく、莊屋の家には新夫婦が二組、軒のつばめおどろきあきれて俄に巣を移しぬ。

なんしよのこむだかな、はむとうに庄屋の息子どんは人ではないな、たまへ聞かつしやつたかと、高聲に話しかくれば、うん、あれ聞かでどうする、内の人が歸へて來ての物語り聞ひてたゝれつたまげるばかり、それに引きかへて傳吉どんのさつぱりとした事、聞いてさへ腹が沸ね立つて馬の糞か牛の糞ぶつけて、ぶつけてやつても腹がなほ愈ねぬばかりなるを、何の咎めもせす、巳れがいくぢなき故として、さつぱり縁を断つて



とらせ、こつちでこそ金子でも何んでもとれるを、辛苦やつしてためたる金子七十五兩も惜しいとも思はで分けてやるとは、マー佛樣か、神樣か、お江戸の水に洗へば足もきれいになるものか、わし等にや、どうしても思ひ切れない、人の事だが惜しくつて惡くつて腹が沸えかへる、そうして、大きな聲じや云はれないけど、あの婆だつて庄屋とあやしい留守中親子して晝夜出入りして居つたもの、もう幾つだい五十越してるじやないか、しはだらけの顏に白粉ついた處は、ほんにいやらしい、ほんとうに横面へ泥でも叩きつけてやりたいやうだとて、知らず〳〵束ねし藁を傍らの人の顏に叩きつけるもをかし。おら太郎兵衛どんの妻さんよ、ひどいね、わしや白粉もなすつてもいないに、何んだつてそんなに横面を叩くだいと云ふに、人もはじめて我にかへり、腹が立つとかうしたものさ、權兵衛どんの妻さんよ、お前腹はたゝないかと人の惡事をば惡みて絶えざるもの丶如きも田舍もの丶正直なるべし。おらこそ腹が立つ、お前の男も何にも取りもしないに横面ぶたれてさとて、から〳〵と笑へば、太郎兵衛のおつかさんと呼ばれしも共にから〳〵笑ひたり。でもい丶やな、あんな性わるのおかみさんもつてるより傳吉さんにはあのお專さんとか云ふいひ女を内の人が世話をするからと云ふに、一人の女は又驚きしさまして、お專てふのはあの旅宿屋の下女かへ。ウンそうよ、大層利口で、美い女だそうだ傳吉どんも、金子は持つて歸へる、身代も少しは回復出來れば妻さんなしでは萬事に不自由だらうとて、うちの權兵衛が中へはいつて昨日やう〳〵纒たのさ、お前のとこの人にも今日は話し、庄屋どんにも云つて、明日にも祝儀する積りさ。うんそうか、夫れは目出度、ちつとも早く、おむめさんに面あてに立派にして見せて遣りたいねとてはじめて安心げなるもおかし。

げに田舍ものは世話ずき、傳吉が妻を離緣してより、一人にては萬事に不都合なり、かの野尻宿の旅宿屋のお

専こそ年頃も人柄もよくあひたる縁とて、村の世話役四五人相談し、今少し父祖の身体取れこしてからにせむと云ふ傳吉に強ひてすゝめ、與惣次方に再三足を運び、今少し待ちてよゆかりもある娘の事ゆゑ、少しは支度もすべけれどなど云ふを、否仕度もいらぬ、れ専どのゝ發明が何よりの仕度、善は急げ、暇どるは不縁のもとゝて、巳が子か弟に嫁を迎ふるかのやうに、世話やきたて、やう〳〵雙方を承知させ、庄屋にも告げ村中にも聞ゑて、日ならず、れ専は與惣次を養父とし、かたばかりの仕度して傳吉方へ輿入れしに、村中は一同よろこびの席に列り、鰯の干もの、するめの燒物をひた食ひ、うま酒に舌を鳴らし、皆喜びあへど、四五人の世話役は、殊に鬼の頭にてもとりたるかのやうにはこれど、荘屋上臺も、調子合せて高砂やを唱ひ、時津風めでたく治めて、人々歸りたり。里かへりも濟み、祝儀萬端整ひ治め、何事もたゞ夫婦さし向ひの小さき家、はづかしき色もいつしか打ちとけ、ある日のこと

れ専は夫に向ひ、いつぞやより云はん〳〵と存せしが、今日まで過し來にけり、御身か伯母御れはやと云ふは、妾がいつぞや語りし父が後妻にて、れ梅どのは妾が姉とかしづきし人にて、婚禮の其日伯母御の身として手傳ひにも參られざりしは、妾を且つ耻ぢ且つ厭ひての心なるべし。つら〳〵妾思ふに、れむめどののみになく、伯母御も荘屋どのとあやしきは鏡にうつし見るやうなり、爭はれぬ證據に其まゝ過すとも、御身此村にあらんはまどゆく何時如何なる謀めぐらして御身に災するやも知れず、されど、此間妾が養父にも語りたる事なり、親の住み給ひし村里立ちはなれ給ふも口惜しからむが、身を安すせんため、暫時妾が里へ、父も老いて子もなければどと云ふ言の葉聞きて傳吉打ち驚き、さてもさてもとたゞあきるゝばかり、れ専が言葉思へど又一理あるに、さらどれ事が言葉に從ひ、暫時舅御の世話になりて、又其内によき商法にてもは

じめんものとて、少しばかりある田地を叔父馮司へ預け、よき商法の目的つくまでを托せば、馮司は目の上のこぶのとれる心地、大によろこび、さるがよからむ、よからむ、叔父其内よき商法考へれくべし、のう婆とれ早を省るも笑止なるに、れ早も流石はづかしく、まばゆく思ひし傳吉の身ら退くと云ふは、もつけの幸、一も二もなく同意して、ほんによき思案と、已がよろこびとともに、きたなき歯をあらはす。

文林



月下海

宵々につきこそやどれふるさとの
ひとむらすゝきはに出しより
東久世通禧

海上厂

津軽承昭

沖遠くつりしてかへるふねの上を
なきてすぎゆく天つかりがね

夜虫

山のはに更ゆくつきのかげれちて
むしの音ばかりすめる庭かな
前田利鬯

庭上月

虫のねをきゝわけんとて庭の面に
ふけゆく月のかげをふむかな
池田政禮

雨夜虫

小休なく雨のふる夜にふりいでゝ
なくすゞ虫のこゑぞしめれる
諏訪忠元

杜紅葉

立とまり見ぬ人ぞなきたまほこの
みちのゆくての杜のもみぢば
宮地嚴夫

岡紅葉

村雨のそめしあとこそ見えにけれ
ゆふ日の岡の木々のもみぢば
北郷久政

雨後萩　阪正臣

真はき原ふけて音なふむらさめに
あしたの露をれもひこそやれ

河邊菊　小出粲

谷川のきしはふつたのもみぢばに
まじりて咲るしらぎくのはな

初紅葉　内藤存守

立ならぶ木々を殘してあきのつゆ
さくらばかりを染はじめけり

岡月　鎌田正夫

そばの花ましろに見ねててる月の
影ものさびしをかこねのみち

野鶉　三浦千春

かり人のいる野のすゑの秋かぜに
いのちまつまのうづらなく也

野月　下田義天類

むしの音も空にあまりて大野はら

故郷鶉　三輪義方

澄むかげひろし秋の夜のつき

かたばかり殘る檜垣のかげしめて
うづらなくなり古きみやこに

故郷池　山川鶉一

昔をうかぶるはしとなりにけり
木の葉こぼるゝふるさとの池

待霄小待従　佐々豊水

世の中に住みわづらひし身の病を
いのりし言葉ゆかしかりけり

看護婦　赤松景福

女郎花ふすゐのとこのやみしゝを
れふしたてたるいさをゆゝしも

山家擣衣　島宮太郎

ころもうつ音こそ近くきこゆなれ
となりは遠きやまがなれども

名所擣衣　光岡正彰

玉川のながれのれとをましへつゝ
　月をともとやころもうつらむ

書籍の上に目鏡をのせたり　足立正枝

老ぬれど目さへがすみて讀む文の
　なかなる友もとはざかりつゝ

菊をかさして　近衛貞子

千世ふてふ菊をかざして老ひとも
　わかがへりけり今日の圓居に

夜聞水聲　前田朗子

耳なれし庭のかけひのみづの音も
　たかく聞ゑて夜はふけにけり

茸狩　柳原愛子

山かげはいとゞ日影のみじかくて
　たもとのたけもかられざり見

曉紅葉　西四辻茂子

我やどの庭のもみぢのこずゑより
　まづ明わたるあかつきのそら

雨後紅葉　松平健子

もずのなく片山はやしあめすぎて
　色こそまされはしのもみぢ葉

秋山路　保科節子

紅葉がり茸がりしつゝれもふどち
　こゆる山ぢぞたのしかりける

月明かなる夜友きたり　中牟田常子

さやかなる月にうかれて珍しく
　疎きともさへとふこよひかな

古宅溥　原田蒼生子

ぬしなくてゆかも簀子も朽はてし
　家のうちよりすゝき生ひに見

海上厂　鶴久子

はてもなき青海ばらをゆくかりも
　列なるともやたよりなるらん

里紅葉　服部磯子

もずのなく聲ばかりして岡のへの

里のもみぢを見るひともなし

秋月勝春色　　安東菊子

花のいろもあかぬものから秋の夜の
月のあはれははてなかりけり

名所擣衣　　足立三尾子

照る月のかつらのさとは秋ふけて
寒きよな〳〵ころもうつなり

まさごの歎　　れきつとり

習ひなるにも月はその缺ぐることの惜まれ、常なるにも花は其の散ることの哀まるゝを。月にもよそへ難く、花にもなぞらへ難きうつくしき吾がいとこの、思ひもかけぬ悲しき道にいでたちにしよ。さらぬ別のなくもがなとねがふてだにかひなき世はさるものなりけらし。旅にありて斯くときく吾は今も猶更にまことゝ思ふべきよすがを知らねど、正しく彼が父なる叔父の文は此に在りて、いはむ方なき悲しみの目の前なるはさては夢にてもあらざるべし。

あゝ彼は眞に世になきものゝ數に入りぬ。吾は國に歸りても其の面影はなかるべし。吾は叔父の許に行きても其の姿は見えざるべし。其のなき面影、その見えぬ姿は、何をこの世にとゞめ、何を吾に告げて去にし。

彼は四の時より父ひとりの下に人となりて、今年廿二の年まで、この長からぬ彼が一期は、寧不幸の淵にのみさまよひて、一日とても暖くたのしき慈母のふところは終に知らで過せしのみかは、その暖くたのしき慈母のふところを思ひ起す暇だにえずして止みぬ。彼にははらから四人ありき。姉なるは人に行きしがこれも四年のさきに世を去りぬ。曾祖母の今もすこやかにてましますは、常にふくやかなる家庭のほどを思はしむれど、誠はあらずして、はらからか相擁して心細がることは今も猶かはらぬなり。彼はこの間に立ちて、ともすれど自だにたへもえやらぬほどを忍びて、妹等をはげましなぐさめて、あたなるたのみをかけしめつゝ、

餘所がちなる父の家を守りにき。身にあまる物思ひにとぢられながらも、憂きを語らふ友とてあらぬ葎の門にあかし暮す彼が心のわびしさは、人には終に知られでこそ止みけめ。叔父は水產の事業にたづさはりて、西に走せ東に巡りて、一日とても身の安きを覺ゆる暇だになけれど、まして家なる兒等が衣やれ軒傾きたるをわぶるなどをぞ更に目にもかけざりき。一年内務省に稟議して、長柵と云へる所の磯をしつらひて、鮑の人工孵化を試み給へり、家よりは一里ばかりも隔れる里遠き海面なれど、人して常に守らするなり。はらからは父の命のまに／＼かはるがはる行きては相守りき。彼は常にいひき。吾が身は唯ひとりそこにありてあかし暮して見ばや。其の能く寂しさにたへ得べきかをためさむにと。さらぬだにかよわく物思ひがちなる身のいかでかはと人は思へど、好みて自から言へるは、彼が既にながくこの世に住まぬことを茲に洩しつゝありしよと今ぞ思ひしらる。うつくしきいとこよ。なねは早くより斯く免れぬねにしを抱きつゝ世には生れいでにしか。さりともさらぬいたづきにて頓にうまし父とめぐし妹等とをれきさりつゝいなむとは、誰かは思ひ謀らむ。すくせありてなづかしき母、親しき姉がいかばかり急ぎて召しけむとて、目の前に父と妹等とを殘しおきて、去ぬることの汝姉には思ひもかけぬ心の強さよ。あはれ今よりは汝姉が父なる吾が叔父は、心は如何ばかり矢竹に張るとも、年波の白きを加ふることは爭ひも果つまじく、まばゆく寄する眞珠の貝にも若かぬ嘆きを增しぬべく、妹等はおのれ等はらからの數の少きにも濱の砂子を拾ひつゝ、音になくことを止めざるべし。まして磯の松か枝にもふれぬべき齡のほどを、うま子に先立たれたる曾祖母のみなげきは、岩越ゆる波の穗よりもしげかるべし。消ゆる水のうたかたは、はかなしとても目の前に見つゝ消ゆるものと知れどこそ、猶思ひきはむる種はあるなれ。見もせず思ひも設けぬ吾が汝姉の、頓に斯くなれりときく吾が心

に夢と思ふことのなどて理ならざるべき。缺ぐる習の月だに、こむ夜は再圓ならむ。散るの常なる花だに、こむ日は更に咲き出づべし。吾は今より國へ歸りても、汝姉が姿は見もだに及むで、唯叔父の水產にいそしみ給へることゝ、妹等が磯を守ることゝのみ、かはれる中の名殘ならむぞいと哀しき。



雜報

●孝子　北海道、石狩國、夕張郡、角田村、字タヲツの人、士族武石宗藏が長男に、光善とて、今年十三歲なれるがあり、父宗藏は、他行して、家には居ず。母きん女は、病みて臥床にあり。わが下には弟、光彥、とて、六歲になれると、妹、より女とて九歲になると、又てつ女とて、三歲になれるとあり。家いと貧しきに、光善、手一つに、母の病を看護し、弟妹を勞はる樣、見る人、聞く人、感ぜざるはなかりけり。さるを、去し九月六日といふに、雨風いたくあれたりしがそのタラツ川の水もあふれて、洪水となれり。光善、夜の十一時ともおぼしきころ、ふと、目さむれど、水は、はやくも、床をひたせり、時に、弟妹は、おどろきさわぎて、なきさけび、母は、起居も心にまかせねど、たゞ、手足をうごかして、うめくばかりなり。かゝる中にも、光善いさゝかも、あわてず、まづ、蓆二枚を携へて、窓をれしやぶりて、二十間ばかりを隔てたる後の丘にはこびおき、さて、再、わが家にたちかへらんとすれど、水はすでに、わが肩ばかりの深さとなれるを、たゆまず、窓の下に、泳ぎつきて、母をむ、わりあへる茶箱の上に、辛うじて、たすけのせ、弟妹三人を救ひ出でゝ、恙もなく、丘にうつし、水、いよ〳〵增して、今は、軒端ちかく(屋根下一二尺)なれるを、益々ひるまず、再、母を負ひて、辛くも丘に

泳ぎつき、かの莚をもて、降りそゝく雨をさゝへ、泣き惑へる弟妹をなぐさめつゝ、かくて一日二夜がほどその丘の上にかくれるに、こゝにはじめて、救助船に救はれて、一家無事なるを得たりといふ。されども、光善は、これが爲に病にかゝりて、今、なほ療養せりと聞く。あはれこの一少年のふるまひは、實に、大人も及ばぬばかりなり。孝は百行の本なりとは、實によくいへりけり。心にまことなくば、いかでかもよく孝たらん。危きにあひて、われをかへりみず、病める母をはじめて、をさなき弟妹三人まで、急を免れしむ。これ、眞心にして、また忠の一端なりといふべし。

●又　北海道函館市、谷地頭に、大塚新作といへる人あり、今年四十一歳なるが長男貞次郎は、十二歳なり、さて、去年の十一月のことなりき。當地に、貧民救助のことありて、これが調をせしことありけれど、新作もとより貧しきに、おのれもこの徳に浴せんといふを、貞次郎、幼かれども、之を慊からずと思ひて「人として、他の救助を受くべきにあらず」とて、之を諫めつゝ、おのれは、朝毎に昇校前、牛乳配達をして、若干の料を得て、父の家計をたすくること、今にかはらずといふ。いと感ずべし。

●又　徳島縣、麻植郡、學島村に、阪東安平とて、今年六十六歳になれる人あり。子五人をもてり。五六年以前までは、村役場の小使などをつとめて、貧しきながらも、日を送りけるが、今は、年もいたく老いさらばひぬれど、起きふしも、まゝならぬに、五人の子ども、女子二人は、家に殘り居り、男子三人は、他に奉公して、その代をば、父のもとにおくり、なほ、暇あれば、交々かへりては、父の心をなぐさむといふ。子たるものは、皆、かくあるべきが道なり。

●孝女　山口縣、吉敷郡、東岐波に住める漁夫鈴木對次郎が女に、きくとて、今年、十二歳になるがあり。さきに母はなくなり、父は不具となりて、糊口にも困難なるに、きく女、看護のいとまには海岸をつみ、あ

るは、財をひろひ、又は、人の爲に、網を編みなどして、いさゝかの代を得てすきはひとし、孝養をこたりなしといふ。これも感ずべし。

●貞婦　鳥取縣、岩美郡、面影村に住める佐々木つね女は、夫、不具となれるに、一層、心を入れて之に事へて、おろそかならず。さきに、第四十聯隊軍旗奉迎のことありける折も、みづから脊負ひ行きて、之を拜觀せしめきとぞ。

●又　徳島縣、阿波國、海部郡、阿部村の人、坪野つる女は、今年四十九歳なり。去し明治十年十二月、こゝに嫁ぎて、後、同十九年といふに、夫みうせたり。これより、女の手一つに、舅姑を奉養し、子女を養育し、なほかつ、わが實父母の病にかゝれるを、日毎に、訪らひなぐさめ、或は食をおくるなど、十年がほど、かはることなしとぞ。事、知事に聞えしかば、金二圓を賜はりて、賞せられたり。

●又　左の二人も、貞操、人にすぐれたるを以て、おのも〳〵賞せられたり。

南村山郡飯塚村　推名田藏妻
推　名　せ　き

夫六年間の久き病床にあるも看護周到日夜懈らず且子女を養育し家業を勉勵し十餘年貞操一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓五十錢下賜候事

明治卅一年九月廿八日
山形縣知事正五位勳四等　曾　根　靜　夫

最上郡新庄町五日町　廣瀬潤太郎母
清　瀬　つ　な

資性温淳能く孝貞の道を守り亡夫の姉癈病に罹るや看護懇到毫も倦厭の念なし且一身家計を擔當し困難を支持し十餘年間志操一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金五圓下賜候事

明治三十一年九月廿八日
山形縣知事正五位勳四等　曾　根　靜　夫

●老母の義心　第二師團(仙台)二等軍曹三國直次郎といへるは、津輕の人なり。母病篤しと聞きて、脱營して家に歸へれり、老母見て怒りて云へるやう「汝身を軍籍に置きながら、我が病の故に脱營すとは、そも、何たる心ぞや。公私をわきまへぬにも程こそあれ。汝

が心底、見さげはてたり。今日よりは、我が子にはあらず」といふを、直次郎きゝて、感憤れく能はず、直に仙台に歸りて、脱營のよしを自首せりとぞ。老母の義心感ずるに餘あり。

●母の教訓

イガクニテ コトシノダイシケンニ ダイイチノ ホマレアル ショウショヲ エタルハ ヒトリノ メクラニシテ ソノ チチハ ボルドウ コウソインノハンジノ ヨシ

コノ メクラノ カクマデニ ヒイデタルハ ソノハハガ タンセイヲ コラシテ コレヲ ヲシヘタルニ ヨル ソノ ハハガ コレヲ ヲシヘタル シダイヲ キクニ ラテンゴ ギリシヤゴ ドイツゴヲモヨミ マタ カク コトヲ ソノコト トモニ マナビシ ノチ プラトウ デカルト アリストウトルパスカルノ デンナドヲモ ヨリカヘシ マキカヘシ マナビシト イフ

カカル ホンハ テツガクニ ココロザス モノナラデハ ヲトコニテモ コノミテ ヨムモノハ スクナキニ マシテ ヲンナノ マナブ コトハ タエテマレナルヲ ソノ コヲ ダイ プンガクシヤトナサントテ ミヅカラ クルシミテ ツトメタル ハハノ タンセイ イマヤ セカイニ ヒカリヲ ハナツニ イタレリ

ヒトナミノ コドモヲ ヲシフルモ ムツカシク ミヅカラハ コレヲ ツトメズ ガクカウノ センセイニ ウチマカセ ソノコノススムモ シリゾクモ シラヌガホナル ハハコソ ハヅカシケレ

（教育時論所載、小西延八氏の獨逸通信）

●生徒の鑑　影山とめ女といへるは、下野國、足利郡、北郷村の人、今年十三歳にて、高等小學校の生徒なり。この人、日ごろ、父母より、金子など與へらるゝ毎に、必、之を貯へれけり。それやがて、積りて、四十五圓にまで、及べるを、後、病にかゝりて命しなんとしける時、悉、之を小學校に、寄附せり。かくて、學校にては、これをもて、書籍を購ひて、備へれけりとぞ。とめ女、身はうせたれども、名は、くちじといふべし。

●褒章下賜　福岡縣士族正木昌陽氏は教育上の功勞顯著なるを以て、去月十六日賞勳局より藍綬褒章を

下賜せられたり。

福岡縣士族　正木昌陽

資性溫厚母に事へて孝弱冠福岡縣藩學修猷舘の教職に擧られ旁ら家塾を開て力を子弟の教養に致し撤藩後一旦神職となるも講學育英の事を輟めす明治五年に至り不狹學舍と改稱し講筵を開くこと日に十同而して一定の授業料を徴せす刻苦指導茲に五十年前後贄を執る者千餘人知名の士を出すこと亦尠しとせず今や齡古稀に及ぶも尚ほ孳々として怠らす啻に教育上の勞効顯著なるのみならす德行卓絶家庭輯睦洵に闔縣の師表と爲すに足る依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●受賞　熊本縣葦北郡田浦村に住める遠山彌次郎といへる人は、子孫百二十一人を有てるが、舊藩主より二十一度、八代宇土藩主より十九度、明治政府より六度、合せて四十六度の賞與を受けしといふ。

●義捐募集　北海道石狩國石狩郡若生町に住める畠山千代子外數名相議り、同道此度の水害に家を失ひ、衣も無く食も無くしていとかなしきを憐み、大方の義捐を乞ひて之を惠まんとすといふ。いと善き企なり。身の程に應じて惠は施すべきものぞ。

●和歌募集　左の趣旨にて、和歌を募るとぞ。心あらん人たちは、よみたまへや。

往にし明治二十九年六月十二日　皇太子殿下氷川公園へ行啓まし〳〵折大砂土高等小學生徒の執銃體操をみそなはし給ひて御供の官人よりかしこき御詞を傳へたまひしのみならす黄金さへ下し賜ひたることそかしこしといはんも中々なれされはこの度この賜をもて此たくひまれなる名譽を千代に八千代に傳へんと時の東宮武官黒川男の篆額本縣知事千家男の撰に係る碑を建つることゝなれはこのことはきをも後の紀念にのこさんとて洽く和歌を請ひまつりて碑と倶に大砂土の學ひの窓の寶と藏めはあはれ珍玉の御詠をたまはれかしとねきまつるになむ

一題　　寄文祝　　寄石祝

一用紙は短冊の事

一裏面へ御住所御勳位御姓名の御記入を乞ふ

一期限は十月盡日とす

一御同志の御仁をも何卒御勸誘を乞ふ

一十一月三日建碑式當日展覽場へ揭く

玉詠御屆所　埼玉縣北足立郡大宮町大字高鼻　氷室銑之助

仝　　東角井福臣　仝　　磯部重浪　仝　　後藏富哉

●割烹學校　といふを（東京日本橋區本町）設けて、

あらゆる料理法を教授すといふことは、かねて、第百六十五號廣告欄に見えたり。さて、その開校式をせりとて、平のなみ子といへる人より、左の記事をおこせられたるが、いと〳〵こまかなれども、まづはとて、其のまゝをのせつ。

割烹學校の開校式

こたみ、石井のうしの割烹の學校を設けたまへるが、其の開校の式を、かみな月の朔日、二日の日になんしたまふよしは、はやく、なが月末つかたにきゝつれば、いとよろこばしうて、たよびなりて、ひと日ふた日、はた、あすよあすとかぞへきたりて、けふなん朔日といふに、つれにはあるいがちなる身も、とくおきいでゝ、うちあふぐに、空はひとつらに雲たちおほひて、あめさへほろ〳〵とおつるに、なにくれの設したまふと聞きつれば、あやにくの天氣やと、うらめしう思ひわびつゝ、しばしたゆたひしに、うれしうも、やゝやゝに、そらはれゆきて、あめもやみぬ。あめいみじともさだめたりしに、心いそがれて、とみにとてゆく。

處は、日本橋ちかき本町、開きたまへるうしは、日本の食物料理の元とりたまへる石井のうしにて、とひよる人いとさはなりけり。まづ目とゞめつるは、女の手業の内にかぞへらるゝ、繪がき、花結の花結を水引にてものせる包物結物の陳列なり。四條流長柄銚子提子の包のはなやかなる。奈提之吉がされに、なでしこ結つけたる。伸蚫の包。柳重の式紙包。櫻重の短籍包などの古代なる。小笠原水島流の提子かざりの近き代ぶりなるもめづらしう、又、ながのし包を衝重にすゑたるが、金紙、白、赤の重なる、きは〳〵しきなど、なにも〳〵、あらまほしう、つくりなされたりしなり。

そがなかに、ともにつられたりし、普通料理の繪卷は、たやすき樣をなしへんとにて、高等料理用杉箱の圖は、ておもなる樣をも數へんとてつられたまへるならまし。

つぎに見もてゆく物は、大人がをしへ子たち、はたさならぬ人々のなりもつらなめたる、擺敷物の樣なり。こはひとつ〳〵につくりつる人の名をしるしたる籍あり。されどあまたの人たちがこみたれば、よみゐがてなり。かつ〳〵とゞめねたるものゝ樣は、

○筏士の掉さしたるに、都鳥の飛かひたる。筏士を芋にて、筏を牛蒡にて、鳥を大根にて

○さゞん花を花がめにさせる。

○蓬萊の龜といふものを、頭と手と足とをさつま芋にて、甲を南瓜にて、みの毛を、なご海苔にてつくりなしたる。

網干たる水際に、鷺たてり。菊さきたる形。網は大根にてたくみにつくりたり。鷺も、菊も、水も。

○三保の松原に人居たり。羽衣を見ておどろきたる形。

○伸蚫の上に、龜の鎮子おきたり。

○河骨の花さきたる水面に、錦鯉の鰭ふれるかた。

○冬瓜の岡のかたなせるに、兎おほく飛くるひたる形。

○かめにさせる刻、花は大根にてつくれるなり。

○さまゞの菊のもとに、亀遊びたる形。菊はにんじん、牛蒡、蓮根などにてつくりたり。

○雀たかむらにさへづりたる形。

○廿日草、大根さつま芋とにてつくりたり。

○かきつばた、小がめにさせり。

見なはりて、つぎに目とゞめつるは、このくにの臣の方の料理人の遠祖と稱へまつれる、山陰刔の神床の樣なり。小餅を衝重に盛りたる。瓶子に口包せるなど、今の世にあひて、花やかなるさまなり。

挿花は、よくもおぼねざれば、このみちの人にとはゞやとて、つぎにつらなめたる盆石ともに、ひとつゝにには、志るしもおかず。花も、盆石も、志れる人は、いみじうつくりたり。ましたりなどいひあへりけり。

かく見めぐりて、まちわたるに、ほどもなう、庖丁の式はじめたまへり。

一長久乃鯉　四條流　三越己之吉

一片身作の鯉　生間流　平田　亀松

一水切乃鯛　四條流　田邊　三平

などなり。長久の鯉のめでたうとゝのへたる樣、片身作のたくみにつくりなしたる樣、水切の鯛のきはやかなる樣も、めづらしうはじめて見たることゝちなんするに、まことにはじめて見たらん人は、さぞとおもはるゝなり。

式もすみぬれば、たかなみうちよするやうに、人のとよみたつは、水切の鯛のすむ海路おぼねて、とみにたちいづる人は、片身作のたくみにぞ見ゆる。この學校のながくひさしかれと、とほぎたるには、大人も長久の鯉の鰭ふりて、よろこびたまへるなるべし。

つらなめたりし物の名と、二日の日の式のはしたきゝねたる一つ二つ。

二日の日の庖丁の式のついで、

一中切の鯛　石井　義昶

一ふみだこ　石井泰次郎

おなじ日におりし女禮の事

一長伸蚫進めやう　有住　鎌子

またとゝのへつらなめしもの

一にはつどり　中華亭

一鶴、松のもとにたてる形　石井　義昶

また一日よりつらなめたりし物

裁縫のもの

こは、二日の日に、共に、開校の式なせし裁縫女學校の部の陳列品なり。つぎのさし花も、まへの伸蚫の出し樣も、このかたのつらなめもの、このかたの式の內なり。

一一ッ身綿入　裁縫本科生　小宮なみ子

一同　同　千葉とゝ子

一四ッ身及三ッ身綿入　同　鈴木志げ子

一本裁綿入　同　戸田なか子

一一ッ身綿入　同　白井りう子

一四ッ身單衣　同　松永つれ子
一ッ身袖無　同　渡邊あさ子

挿花

このかたは、さきに設けたりしなれば、花のたなしたぐひおほきもゆるすべきこそぞかし

一柳らんぎく　池坊華道教授　開秀庵清風
一葉蘭　二秀庵
一萬年青　香雪庵
一海もごきらんぎくはぞぎく　半翠庵
一すゝきらんぎく　靜紹庵
一柳らんぎく　壽脩庵

盆石

こは、大人が、擁數の料にとて、學びつたへたる事とて、その道の人々よりつらなめられしなり。

一砂留 井出の玉川　砂留 養老の瀧　遠山流 楊春庵南鶯
一砂留 汐洲灘　五月富士　古松庵 田野宗和
一淡路 繪島　近江 粟津晴嵐　海生庵 石井嘉晴
一播磨 舞子の濱　武藏 調布玉川　碧濤庵 堀口霞山
一伊豆 雲見崎　鳴海潟　春信庵 江川南枝女
一瀧の音家　播磨 高砂　春樹庵 高波早鶯女
一攝津 和田ヶ崎　石山の秋の月　春曉庵 村石南月女

一明石の朝霧　矢走の歸帆　春櫻庵 金子紫鶯女
一山城 銀閣寺庭中　相州 鴫たつ澤　春生庵 芦川南榮女
一豐後 吹飯の濱　近江 唐崎　松島 臥雲
一備後 鞆の浦　筑後 早見の里　細井ふく子
一伊勢 二見が浦　播磨 須磨の浦　山木かれ子
一四季快晴差汐　淺井てい子

たちゐひのさまも、挿花のさまもめでたく見ゐたりと、ともだちはいへり。盆石のなかにも、井出の玉川の花の匂ひ、養老の瀧の白きに紅ふかき秋の色のちりかゝれるをはじめて、さりぐめづらしうつくりなされたりけり。

石井の大人こたび割烹學校を設けられしをほぎて　桐舎かつら子

いにしへの生井榮井のあさゝむる
石井の水や幾世すむらん

山田源子ぬしのひらかせたまへる裁縫女學校のいはひに　平のなみ子

このにはにけふおりそむるもみち葉の
にしきたちぬふ人なまたはや

●太田裁縫學校（在茨城縣水戸市）のことも、さきに委しく記せりき。（第百六十號參照）さて、其の講習を終へつとて、去月二十九日、試驗を行ひ、あ

くる卅日、證書を授與せりとぞ。かくて、左の人々は、小學校裁縫科准教員の資格を得たりといふ。（櫻井あさ子の報による）

（甲種）京西かれ、羽部まき、邑やす、見鹽みち、橋本きん、松田ふさ、山本きん、相羽こう、佐々木やう、長岡こと、関野たま、群司はま、江崎やす、小峰てゐ、岡崎あさ、久米つゐ、大竹みさを、猿田ひて、脊木よつ、松井さん、富田しま、鴻巣はる、大　つれ、入江つき、木村たへ、川又なつ、石崎なみ、松橋しけ、高丸きよ、大内ふみや、

（乙種）砂山いせ、大森ふぢ、大吉はる、小坂部せい、岡崎むめ、岡崎くり、衣戸たけ、中村せい、泳平ちう、堀江たま、川角すゐ、飯島なか、佐久間いの

●裁縫教授法研究　の爲にとて、秋田縣にては、各郡市の小學校女教員の中より、各一名を選抜して、縣費を以て、仙台市なる松操學校に留學せしむといふ。

●津島女子高等小學校　といふは、愛知縣海東郡に在り。元、一校にて男女を教授せしが、いにし四月廿九日分離せしなり。其後諸般整理して成績益々宜しといふ。

●東京女學館　にては、殊に體育を重んじ、生徒をして務めて運動を活潑ならしむ、故に令嬢等の學校より歸るを見れば、頭髪散亂して或は髻の解けたるもありといふ人あり。運動を活潑にするは大に善し。容恣を亂すはあるまじきことなり。

●小學校女生徒半途退學の原因　これは山口縣吉敷郡教育會にて調査せしものなりといふ。

教育上より起る原因

イ女兒は男兒に對し体力劣る所あるに係らず現今の教科課程は男兒と同一にして女兒に對して多きに失し且困難なること
ロ學科と教材と女兒に適切ならざること
ハ裁縫及び家事等女兒に必要なる學科の教授時間少くして學務技術に熟練せしめ得ざること

家庭及兒童自己より起る原因

イ古來の風習として女教育に重を置かざること
ロ早婚の弊よりして早く之に職業を授けんとする傾あること
ハ子守など家事の手傳をなさしめ又子守奉公をなさしむること
ニ女兒は比較的少數なるを以て勢力少く從て在學を嫌ふ傾あること
ホ女兒は雷同して退學する弊あること
ヘ身体の發育特に著しきものは在學を愧づる傾あること

●外國人設立の學校　は、全國中合せて千百校あり。之を種別して其校數及び生徒數を擧ぐれば實に左の如

しといふ。此等概していはゞ宗教臭味の學校なり。にが〳〵しきことなり。外人の教授を受くるは惡しからざれども、宗教に感染するは宜しからず。

小學校	百六十八	此生徒數	一萬千百五十八人
中學程度	六十六	仝	四千五百八十三人
各種學校	八百六十六	仝	三萬千二百四十六人

●東京慈善感化院　にては、去し六月教部會議の諮詢を經て、總裁土方久元伯より感化教本義及び家族、(即ち生徒)心得を發表せり。其の本義といふは、

一皇室を尊び國躰を重ずべし
二神明を敬ひ祖先を崇ぶべし
三忠義を重じ公法を守るべし
四聖賢の懿訓を奉じ司敎の教誨を守るべし
五學徳を修め世務を習ふべし
六智能を發達し肢躰を强健にすべし
七心を執る恭謙に身を持する儉素たるべし

扨又、其處の生徒十四名に、『紅葉』といふ題を與へて、十分を限り、和歌を詠せしめしに、皆能く詠出せりといふ。其二三を擧ぐれば、

うちそゝぐわしたの雨に色つきて
　錦をりだす庭の紅葉　十五歳　大心静

吹ちらす風もとがめずあさな〳〵
　紅葉における小初瀬の山　十四歳　吉道定

立田山峯の紅葉そめいでゝ
　風も色ある心地こそすれ　十三歳　何言

吹風に散らすも惜き唐錦
　路かふ人を招くかと見る　十四歳　關不忍

●感化　靜岡なる私立高等女學校の舍監に某といへる婦人あり此の人八十余歳の姑と共と寄宿舍の内に住みて能く之に奉仕すといふ。人之に感じて子女をして寄宿せしむるもの百二十四人に及び通學するもの僅に

二十六人のみなりとぞ。れはよそ舍監たるもの斯くあらまほしきことなり。

●秀惠會　といふは、山梨縣に在り。此は其處の師範學校教諭小田切浦野子が主稱にて設立せしなり。扨其主旨は同校女子部卒業生又女子にして教職に就事するもの毎月一回第一日曜日に其學校の寄宿舍内に相會して家事の實習其外有益の談話をして互に智識を交換し、女子の品位を高めんとするに在りといふ。よきことなり。

●女學校長會議　全國中、高等女學校の設立最も多きは山形縣なるが、此程、米澤、鶴岡、酒田、山形の四高等女學校長等、校務打合せの爲にとて、相會して協議せりといふ。

●東京府下女子遊學費　のれはよそなりといふを聞けた、左の如し。

學校名稱　卒業期限　月謝　校費修學費 舍費小遣費　宿料　合計　書籍

共立女子職業學校	三年	一、三〇	上五、六〇 中四、一〇 下三、六〇	上九、〇〇 中八、〇〇 下七、〇〇	上一五、九〇 中一三、四〇 下一一、九〇	
東京府高等女學校	四年	一、〇〇	同上	同上	一五、六〇 一三、一〇 一一、六〇	
跡見女學校	四年	三、七五	同上	同上	一八、三五 一五、八五 一四、三五	
立教女學校	七年	八〇	同上	同上	一五、四〇 一二、九〇 一一、四〇	
東京女學館	四年	一、五〇	同上	同上	一六、一〇 一三、六〇 一三、一〇	
頌榮女學校	三年	一、〇〇	同上	同上	一五、八〇 一三、三〇 一一、八〇	
明治女學校	六年	一、五〇	同上	同上	一六、四〇 一三、九〇 一二、四〇	一、〇〇

●夜遊禁止　さきに米國にては、學齡兒童に酒精類、及烟草を賣るを禁じたりしが、今、又、インヂヤナ洲の諸市町にては、夜遊禁止令を布きて、十五年以下の少年は、兩親又は後見人と同伴するか、又は特に其許

可を得たるものにあらざれど、夏は午後九時、冬は午後八時以後には外出することを禁じたり。扨其結果いと宜しく、少年控引者の數を減じたるのみならず、學校に缺席するものも無くなりて、其効著しとぞ。

●佛國の女教師　名に聞ゑたるパリー市は、人の生活に頗る容易ならずといふ。扨其處の女教師等免許狀を得ても容易く就職し難く、よし一旦就職すとも、折りよからずして退職することのやむを得ざるに至るもの多しとぞ。猶聞けど、女教師の甚しく窮せるもの、或はあるまじき醜業に陷り、更に甚しきに至りては自殺するもの尠からずと聞く、憐なることなり。

●口調三つ　小學校生徒の作文には、「神社とは社殿を備へ帝國の神祇を鎭祠して公に祭典を執行し公衆參拜の用に供する處をいふ」といひ。法律學を研究して參事官になれるもの丶いひざまには、「寺は寺院を備へ維持を目的とする法人をいふ」といひ。又尊王奉佛大同團にては、「寺は國家の元首及國家の安寧の爲め祈願をなすを要す」といふ、或は側面より、或は背面より、己が向へる方面をのみいひて其要を捕へず。かたはら痛きいひざま哉。

●流行の上下　甲斐の甲府にては、「工女等、髮の結ひざままで皆女教師の樣を眞似するといひ、攝津の大坂にては、女教師等、衣服の摸樣傘下駄等まで皆花街の樣を眞似するといふ、體度は各々分に相應して保つべきことなり。

●よからぬ風　九州の小倉にては小娘をして、下ざまの裝をせしむること甚しく流行して、父兄は、財を借りても、藝娼妓の風を眞似しむとぞ。如何なれぞか、心得ぬことなり。

●うらうへ　このごろきくに、伊多利亞にて、トリーといへる乞食みうせたるが、遺產八十萬圓ありきとぞ。又、我が國にて、千葉縣、上總の國、夷隅郡、御宿村の濱中といふ處に小屋を宿として住める乞食等は、海の渚にうち寄せたる藻しほ草を、かきあつめて

は、之をやきて灰とし、これをうりて、金を貯へ、このほど、地の豐ならぬ人々に、之を、貸し附くると聞く。「塵も積れど、山となる」の諺むなしからず。乞食といへども侮るべからず。ようせずど、乞食にも劣るに至るべし。

●いまはしき倶樂部もあれたありけり。米國のニユーヨーク府に、婦人自殺倶樂部といふがありて、之に加はれるものは、抽籤法によりて自殺するなりと聞く。

●學說も、あまりになづみては、却りて、世にうとし。地球上の海水を、悉、蒸發せしめなど、厚、一哩、「五百萬平方哩の鹽を得べしとぞ。さもあるべし。されども、到底、出來ぬ相談といふべし。

●喫烟の視力障害　いましむべきは喫烟なり。更にいましむべきは、兒童の喫烟なり。このごろ、米國の烟草製造所にて、こゝに出入する喫烟者によりて、くはしく、視力の檢査をせしに、健全なるもの一人もなかりきといふ。さて其の中、四十五名は、視力大に減衰し、又、三十名は、色覺をさへ障害せられ、中にも、一名は、赤色を、褐色、又は、灰白色と誤覺し、又、一名は、綠色を靑色、又は、橙黄色と誤覺し、其の外、多くは、黑色中の白點を視覺することを得ざりきとぞ。いましむべし〳〵。

●寄書　女德頽廢の起因なりとて、左の一篇を寄せられたり。說の當否は、記者、其の責に任せず。しばらくのせて、世の參考に資せんとす。

女德の頽敗、近者、漸々甚だしきものあり。而して、之を救濟せんと欲せど、先づ、其の起因を攻究せざる可らず。左に、擧げたるもの、固より、以て、盡し得たるものに非らずと雖も、或は、以て、其一斑を窺ふに足らん。余は、更らに、識者の攻究を切望す。

一、小學校教育の不完全。　教育の基本たる小學校は、最も綿密なる注意と、嚴格なる監督とを要するは云ふ迄もなし。然るに、從來、此の基本たる教育も、男女と同じく、男教員によりて、訓導せらるゝなり。男

教員は、果して女子を教育して間然する所なきか。又教員たるものにして、品行の見るべき者なく、仰ぐに足るもの尠なきは、蓋掩ふ可らざる事實なり。其の說き來る修身倫理の講義は、其の熱誠に出るなく、唯機械的にかくすべし、かくせざる可らず、然らざれど、遂に、此の如くならんと云ふにすぎず。此の如きは男生と雖も、之を托すべき價値なし。況んや、家庭の賢母となり、將來の繼續者を養成する大任に當るべき女子を教育するに於てをや。

二、家庭注意の不充分。　女德の涵養に、最も、必要なるは、家庭の嚴密なる注意に存ずるは明なり。余は、敢て注意皆無なりとは云はず、唯、其の不充分なるを云ふのみ。間々學校に委するを以て、足れりとして顧みざるものあれども、是等は、暫く例外とせん。何が故に、不充分なるかと云ふに、學校にては、如何に教育しつゝあるかをも顧みず、學校は學校、家庭は家庭、個々別々なるものとして、教育するものあり。又、人は、かくあらざる可らず、女子とは、此の如くすべきものなりとし、時世の推移を顧みず、唯自己の誤解の理想を以て、判斷に、以て、之を養成せんとするものある是なり。是れ豈、子女をして孰れを是とし孰れを非とし、如何に去就せんかに昏迷せしむるものと云はざるを得んや。此の如くにして、遂に、倫理の存在を疑はしむるに至る。

三、社會道德の頽敗　蓄妾の盛行、上流社會の淫猥、學校教員の不始末、家庭の亂脈、此等一として、女德頽敗の起因をなさゞるはなし。

四、學校、及、工場監督の不充分。　學校、及び、工場の監督の不充分は、女德の頽敗を招致すること大なり。幾多流布せられたる女子學校の惡弊は、多少他の猜疑によるものあるべけれども、而かも、火のなき所、煙は擧らざるなり。然れども、女學校が、監督の方法に就きて、何等の改良をなし、又何等の注意をしたるを聞かず。唯規則的に修業せしむるを以て學校の職分を盡したりとするのみ。工場に至りては、殆んど、勞動以外には、何等の監督をもなさず。甚だしきは、不品行を賞賛し、獎勵し、以て恰かも、一個の働きをなしたるものゝ如くするものあり。殊に、工場に宿泊するものゝ如きは、其の惡弊の更に大なるを見る。又、余は、此の如き事を耳にせり。「工場にして、品行を保持せんとするものは、多數不品行者流の爲めに、譏誣せられ、酷待せられ、遂に居に堪へざらしめらる」と。茲に至つて、亦、極まれりと云ふべし。其の馴致する所、概ね此の類なり。余は、父兄に、教育者に、あらゆる識者に對し、考慮一番、適當なる救濟策を攻究し、以て實行せられん事を切望す。（永井生）

敎の庭



十月廿日兼題　落葉浮水

天　伊豫　丸山郁子

やまひめのおりしにしきは水鳥の
かづくふすまとなりにける哉

地　三河國下地町　永井さい子

水ぞこにみえにしかげも波の上に
ちりて浮べるきしのもみぢ葉

人　肥後國飽託郡横手村　仁保しま子

染めつくす紅葉を風のはこびきて
にしきおりなすいけのおも哉

秀逸（二十首）

吹くかせにちれるもみぢは山川の
よどみにさらすにしきなり鳧　肥後　德永廣子

この頃は月もやどらずなりにけり
落ち葉うかる庭のいけみつ　備前　髙井孟子

めでられし岸のもみぢ葉散はてゝ
にしきとかはる水のおもかな　肥後　田代艶子

てりわたるつきのひかりに大井川
浮ぶもみぢのかずも見えつゝ　尾張　淺井靜子

みつの面にかゝる錦をおらはやと
こずゑの紅葉ちりいそぎけん　備前　西艶子

池の面にちりて浮べるもみぢをは
水のあやとぞ見るべかりける　磐城　根岸里子

池の面に浮ぶもみぢのをかしさは
うらみし風のしわざなりけり　下總　澤田せい子

ちらはちれ梢にかせはふくとても
池のにしきをわれはめでなむ　千葉　佐久間八重子

くれなゐの浪かと見しは池みづに
散りてうかべるもみぢなり鳧　信濃　金原吉子

ちりてうく木のはを見れは飛鳥川
秋もふちせはある世なりけり　伊豫　杉山緑子

水上のやまのあらしやさそひけむ
色なきみづももみぢしにけり　愛媛　長谷川松江子

よひ／＼の月も宿らずなりにけり
もみぢ散り浮く庭のいけみつ　廣島　香川顯子

たにかはに浮きて流るゝ落葉こそ
行きにし跡のかたみなりけり　廣島　香川知恵子

今朝みれは水際の紅葉ちりうきて　上總　高石登代子

池はさながらにしきなりけり　東京　横山柳子

龍田姫てぞめのにしきふりにけむ
かけてさらさぬ山かはもなし　東京　屋摩高繁子

水際なる木々の紅葉むちりしより
水のおもこそにしきなりけれ　伊勢　魚住愛子

たかねにはけふも嵐やすさふらむ
おち葉たえせぬたにかはの水　岡山　降田滿起子

山おろしはげしかりけん谷かはに
流れもあへずこのはうかべり　筑前　林久子

くむ人もなきやまの井の水の面に
あはれちりうく峰のもみぢは　長野　赤羽もと子

澄む水にふたつみつよつあやなして
うかぶもみぢのおもしろき哉

（以下原稿到着順）

池みづのかがみをてらすもみぢ葉を
つれなきかぜぞよそにさそへる　溝口良子

木がらしのふきしつまりて朝ぼらけ
みつに木の葉のふれそうかへる　石井豊子

もみぢはの水見えぬまでうかぶかな
ゆふへのしぐれけさのあらしに　竹内頼子

こころなき風のさそひしもみぢ葉は
いけのかがみのくまさなりぬる　佐々小琴子

山ひめのさらすにしきやかはみづに
ちりてながるゝもみぢなるらん　佐々有鄰子

秋かぜに散りし木の葉をうかべつゝ
いづこのきしべながれ行くらん　内藤きよ子

池みづのにごらぬおもにあきかぜの
さそひておつる木の葉ふれかな　山内かず子

池のおもにつれなくちらすあき風を
うらむさもせてうかぶもみぢば　久米貞子

やまかはの岸のもみぢのちりそめて
くれゆくあきぞみづにうかべる　横山峯子

もみぢ葉は枝にさまらでわがやどの
いけにうかびてのころあきかな　横山秀子

影うつすかゞみのいけのみづおさも
かなしく見せてうかぶもみぢば　曾山治子

はら〳〵さ岸のもみぢの散りそめて
うかびてゆくかあきのくれかた　遠藤銀子

かはきしの紅葉もけさはちりそめぬ
みづにうかびてながれゆくらむ　吉川久子

たつた川きしのもみぢの散りそめて
くれなゐふかきみづぞながるゝ　水島貝子

こずゑのみもみぢにけりさ思ひしに
はやちりそめてみづにうきたり　芝田源子

かはみづにうきて流るゝもみぢばに
あきのひあしのはやきをぞしる　西村登羅子

昨日までにしきさめでもみぢばも
けさはちりつゝみづにうかべり　溝口寛子

ちるが上にまたかさなりていけみづに
うきてながるるもみぢありけり　松井住子

ながれゆくみづに木の葉ぞ交りける
このみなかみにあらしふきしか　小川金子

ふく風に木々のもみぢはちりはてゝ
ながるゝみづにまじりてぞゆく　小川富子

山の井にうかぶ木の葉をかきわけて　澤田俊子

くむやあさけのまうけなるらむ

あきくれて池さへいろのかはるかさ
見ればうかべるこのはなりけり　越山雪子

ゆく秋のかたみさやみんちがやどの
いけにうかべるちゝのもみぢば　細井糸子

そさひゆく風のまに／＼けさはしも
散りてうかべりいけのもみぢば　白井玉子

水かみはかぜいかばかりふきにけん
ながれもあへぬ木々のもみぢ葉　井口素子

たつた川きよきながれにかけ見ねし
もみぢはちりてみつにうかべり　安村歌子

よあらしに落葉かさなるいけのおもに
にしきのさこになしやいぬらん　竹村竹里子

もみぢばのにしき曝せるさまにゝて
くたすいかだもこゝろおかるゝ　根岸豊子

くれなゐの色にそみ出しもみぢばも
いまはないけのにしきなりけり　山本あい子

こずゑふく風に木の葉はさそはれて
ちりてはうかぶみつのおもかな　眞島千鶴子

たつたがは水もにしきと成りにけり
みだれてうかむきしのもみぢに　森きく子

吹きおろす風のまに／＼やまかはに
ちしほのにしきさらす葉みぢば　栗生菊子

にしきなすもみぢは風にさそはれて
いけのものさもなりにけるかな　佐々聰子

ふくかぜに花ちさりくるもみぢけの
みづのうへにもにしきなそしく　山根久子

ひきはねしにしきさみしは山かはの
みづにうかべるもみぢなりけり　徳永萬壽子

木からしに峰のもみぢはちりはてて
やまかはの瀬はにしきなりけり　小森田歸子

もみぢ葉のうかべる池のなみのおもに
にしきおりなす夕日かげかなも　江口隼子

もみぢはのうかぶをみればおほゐ川
きのふのあきもさまるなりけり　中山さみ子

立田ひめおりしにしきもいまははた
たにまのみづにいろあろふかな　曾根雪子

もみぢ葉のながれざりせばたきの川
いろなきみづを人やめてまし　遠藤亘久子

水のおもにちりてうかるもみぢばは
くれゆくあきのかたみなるらん　羽室衆子

おほゐ川ちりてながるゝもみぢばに
みれのあらしぞおもひしらるゝ　金森俊子

ふく風にみぎはのもみぢちりうきて
みつのおもこそにしきなりけれ　高橋かれ子

池みつのかゞみもちりにくもりけり
きしのもみぢ葉ちりそめしより　田代綾子

たつた川あきなのせてやながるらん
もみぢのふれのうかひそめけり　藤村識子

木がらしのさそひしあさの池の面に
小ぶれさ見しはおちばなりけり　中村きさ子

くみあげし水にちりうくもみぢばは
たなりしよりもうれしかりけり　羽田三緒子

たねずちるみれの紅葉はながれきて
にしきをさらすたにがはのみづ　河田いし子

こがらしによその落葉もふきよせて
にしきうかべるいけのおもかな　河田ふく子

もみぢ葉のちりて浮べるたにがはに　東野さく子

きのふのあきのいろぞとゞめる　早川信惠子

降るあめと思ひにしまにいけみつの
にごるとみしはおちばなりけり　楢崎縫子

たれ人の敷きしにしきときてみれば
水面にうかふみれのもみぢば　椎野ぬき子

みればたやきゝの木末をそめつらん
もみぢながるゝたにがはのみつ　小池芳子

一むらのにしきながれてたつたがは
うづまくなみやもみぢなるらむ　橋本とよ子

夜もすから吹きしあらしの跡見ねて
いけのもせまく木の葉うかべり　新浦美津子

紅葉せしこずゑをはらふあさかせに
おちはひきなまにはのいけみつ　白石由子

くれなゐに染しこずゑもおちはして
なかばはみづのうへにみねけり　遠藤まん子

しらなみの風のまに〱うかべるは
ふれにはあらでこのはなりけり　幡谷よう子

みづさりのうきれと見しは月さゆる
ながはのおものおち葉なりけり　辻本ひさ子

うきれするなしの夋はからにしき
あやせのかはのもみちなりけり　石川らく子

木がらしにちりて浮べるもみぢはな
秋きのかたみと見するいけみづ　石川類子

谷かはもうづむばかりになりにけり
間なくもみぢのちれるこのごろ　石川なね子

もみぢ散るこさなげきそいけ水に
ふかくめでなんいろぞみせける　六鹿ひろ子

吹く風に木の葉みだれていけの面の
みづもにしきとなりにけるかな

夜もすがらこゝろかゝりし紅葉ばも
散りてうかべりたにがはのせに　楢崎千歳世子

よあらしに岸の木の葉そ散りにける
ひろきいけさへこころせきまで　高山信子

吹くかせにたつたの川のみつのもは
にしきしくまでもみぢちりけり　駒澤まつ子

みつのおもにうかぶ水の葉の一入に
さびしさまさるあきのゆふぐれ　瀧田貞子

これやこの冬のはじめのしるしなる
しぐれのかはにうかぶ木の葉は　塙いさむ子

うちわたすかはに千鳥のうかむかさ
見ねしはあはれおち葉なりけり　佐藤きよ子

木枯のさそふまにまに散り敷きて
したゆくみつもにしきしてけり　安孫子かづ子

吹く風に木々のもみぢばちりしきて
にしきをあらふいけのさゞなみ　福原菫子

おくれじとおつる古葉にみづのおも
いろづきわたるあきの野あらし　生駒ふれ子

もみぢはのちりてながるゝやま川は
みづもにしきのいろに出にけり　野口さん子

いくたびもはらへと浮ふいけみづの
おちばのしたにうをやさるらん　橋口たき子

夜あらしに梢のもみぢはらはれて
おちはたゝよふにはのいけみつ　川上喜代子

きのふみし梢のもみぢちりはてゝ
いけのおもてそにしきなりける　川上博子

くつるまで水かへで見んもみぢはの
いけにうかぶもなごりなりけり　綿野りゑ子

池のおもにさむけくすめる月かげも　伊東鶴子

池のおもにうつれる月をふくかせに
　もみぢのにしきかされけるかな　山本さし子

白さりのもりのもみぢや散りにけん
　小がはのおもににしきながるゝ　所佐以子

やまの井の水にうかべるもみぢ葉に
　のこりしあきのこゝろをぞくむ　大寺浪速子

あらしふくみそのゝ池のみつのゐの
　木のはのあめはにしきなりけり　塩引ゑん子

いけみつにもみぢのにしき浮べるは
　よべのあらしのなごりなるらむ　青木たま子

いつのまに秋はふけけんみつの面は
　にしきにまごふもみぢゝりけり　末次たみ子

たぐひ來るかけひの水のもみぢばは
　いつこのあきのなごりなるらん　日高かず子

もみぢばのちりてうかべるたつた川
　ふたゝびみつにあきをみせけり　白石椿子

もみぢちるたつたの川のくれなゐは
　ちりにまじらぬにしきなりけり　曾根勇子

もみぢ葉をおろすあらしにたつた川
　ふゆこそみづのあきはみゐけれ　平野しづ子

吹く風もなきにこのはのふたつみつ
　みつにながれてうかびつるかな　林　文子

水のおもに秋のかたみさのこるらむ
　あかてちりにし木々のもみぢは　名取よ志子

大井がはながるゝみづをせきとめて
　うかぶもみぢのかぎりをぞ見る　坂田きよ子

木がらしのあさをさゞめて紅葉ばの
　志からみかけしよさのかはなみ　名取正代子

あすか川なゝせによどむもみぢばは
　たつたかはさぞうたがはれけり　磯野こと子

けさみればよのまの風やさそひけむ
　もみぢ葉うかふやまのゐのみづ　山口千枝子

山おろしふきなちらしそかはたもに
　にしきおりなすちゞのこのはを　牧　いつ子

山かはに志がられかくるもみぢ葉を
　にしきのおびとひとや見るらん　山田璋子

水ぞこにかげをうつしていけの面に
　うかべるもみぢうるはしきかな　大矢正子

もみぢばの今日を限りのたまの緒を
　つれなくさそふ野田のたまかは　石井寧子

このあさげ汲むにはの井の水の面に
　きりのひとはの散りてうかべる　都水はる子

はなかげをうつしゝ春はゆめにして
　おちばぞうかぶいけ水のうへに　目黒佐蕗子

ふくかぜに庭のもみぢば散りしきて
　いけのおもてにあやぞおりける　高島[illegible]子

よあらしにゝはの池おももみぢして
　げにまばらなり木々のこずゑは　濱田直子

流れゆくあきをしむらんたつたがは
　もみぢのにしきかくるしがらみ　笹子茂子

おちつもるもみぢ葉ぬきに立田がは
　かはのゐせきにゝしき織るなり　敷島花子

みくさおひあれたるにはの池の面も
　けふはもみぢのにしきをぞしく　高橋ちん子

ふなひとのこぎ行く方もわかぬまで
　もみぢみだるゝたつたがはかな　谷口ふさ子

すむ魚のかげもみゐずぞなりにける　武田豊子

かたよりしてもうかふこの葉に

みあかねにはやちりそめてやま川に
にしきながすきゞのもみぢば
下元もと子

あすか川ふちのみぎりもくれなゐの
せさかはるまでちることのはかな
野中朝子

さゞなみのよするまに〳〵たゞよふは
かぜにちりしくこのはなりけり
高橋より子

もみぢばのちりてなかるゝたきの川
くれなゐふかきなみたちにけり
森　こと子

木枯の　さそふもみぢをあやとりて
にしきたりなすいけのさざなみ
関口光子

うなゐ等よかきなみたりそいけ水に
散りうくもみぢそのまゝに見む
三幣操子

いかだしよこゝろしてゆけ川つらは
にしきなすまでもみぢ散りたり
並木春子

たづた川もみぢみだれておのづから
みづの上にもにしき志きけり
仲田繁子

波のうへにおれるにしきと思ふかな
もみぢばうかぶ山かはのみづ
仲田榮子

こがらしのふきそめしより山みづの
いろみねぬまでうかぶもみぢば
橋川稲枝子

山の井にすむましみづの見ねぬまで
木々のも葉ぢばちりうかびけり
橋本たつよ子

はら〳〵と木々の木末のちり志きて
みづのたもこそにしきなりけれ
吉江いく子

ふく風にみきはのもみぢちり志きて
にしきまりなすいけのおもかな
米澤たい子

もみぢ葉の浮べるまゝに志もおきて
さむけく見ゆるいけのたもかな
寺尾まさ子

かきわけてくむとはすれど紅葉はの
ひまなくうかふやまのゐのみつ
續木香芽子

秋かぜにさそはれ落ちてたつたがは
みづのうへこそにしきなりけれ
山口ふみ子

池みづに散りてうかべるもみぢばを
からくれなゐのなみかとぞみし
吉岡歌子

くれなゐの錦と見ねしもみぢ葉の
ひらひらちりぬみづのおもてに
宮井つね子

せきとめて秋の名ごりと志ばし見ん
木のはうかべるにはのいけみづ
川濱花子

蔦かへでおのがいろ〳〵に匂へるを
ひとつにみするいけのおもかな
服部かつみ子

あさかぜに庭のもみぢの落ち散りて
くれなゐなせるいけのたもかな
大友つき子

昨日までこずゑにみてしもみぢばの
いけのにしきとなれるけさかな
無　名

いろこくも染みて流かるゝもぢばの
にしきはみづのうへに見ねけり
池谷さみ子

おもしろくいはまし〳〵にうかひつゝ
ながれてすくるたにのもみぢば
小曾根しう子

さや〳〵と風にたさしていけみづに
あきのなごりとちる木の葉かな
中桐杏子

くれなゐの波のたつかと見ねつるは
うかぶ木の葉の色にてありける
諸井久良子

いけみづに秋のかたみともみぢ葉を
うかべていつちかぜやゆきけん
吾妻ちか子

よあらしのなごりしられて谷かはに
うかぶにしきはもみぢなりけり
戸塚てい子

ゆくすゑもしら浪たかきたにかはに
館脇ます子

うかびてすぐるやまのもみぢば

あきかぜに散りて亂るゝもみぢばの
うつらふかげははなかさも見ゆ　大野文子

みなぞこにしづまぬうちやたつた川
散りしもみぢのさかりなるらん　四元照子

大井がはみづは木の葉にうづられて
いかだも今朝はくだしかぬらん　泉久耳子

吹く風は木の葉さそひてさきの間に
にしきをながすたにがはのみづ　泉さい子

川ぐちのよどみにうかぶかれびさは
いづこのさとのおちばなるらん　柳瀬貞子

なり〳〵はしひの實おつる音すなり
木の葉ちりうくやまの井のみづ　高砂き代子

こゝろして見ればしづかに流れけり
木の葉ちりうくさゝがはのみづ　高砂菊代子

きのふまで淵にながめしもみぢばも
ちりてはかなく瀬にそちくなる　岸なみ子

さま〴〵に色あやなしてたつたがは
さらすにしきのうるはしきかな　秋葉霜子

いましばしたつた川かぜふきたゆめ
もみぢのにしきさらしつめたり　根岸豐子

いかばかり深山のあらしふきぬらん
にしきを染めしたにがはのみづ　吹田たけ子

そこ清きながれにうかぶもみぢばの
ふかきいろかをくむひさはたれ　秋野つゆ子

人みなのめでたゝへたるもみぢばも
ちりてうき瀬のなみにたゞよふ　齋藤よし子

すさびにしあらしの絶えし夕ぐれは
いろなきみづももみぢしてけり　玉井ふく子

庭のいけに三つ四つちりしもみぢば
かはぬひこひのうくさ見えけり　最上ゑげ子

吹くかぜにみぎはのもみぢ散る折は
うちよする波もはなさ見えけり　紀内清子

おのづから時雨にそめしもみぢばの
かれ行くみづにうかびけるかな　原田雪子

こがらしも吹かぬゆふべを池の面に
ひさ葉こぼるゝきしのもみぢ葉　内藤貞子

水の上にからくれなゐのさむしろを
しくかさはかりちるもみぢかな　坪内晴子

もぢみばのちりうかびたり大井がは
すきゆくふれのあさ見えぬまで　日吉あさ子

吹く風にみだれて落つるもみぢばは
おほゐのかはゝにしきなりけり　高屋はぎの子

もみぢばはあらしの風にちらされて
おほゐのかはもにしきしてけり　絹川ますゑ子

水けむりしろう見えたるたにがはの
なみにうかびてたつるもみぢば　渡邊みれ子

秋かぜにさそはれおちてもみぢばの
みづのうへにぞにしきあやどる　秋風ふく子

あはれにもちりしもみぢの水の上に
うつりてまたもにしきおりかく　美濃君子

水さりのあそぶさみれば池のおもに
ちりてたゞよふ木のはなりけり　長松かれ子

たにがはのみづゆかしくも色つきぬ
みやまのもみぢちりそめぬらん　田中所子

賤の女がくまんさしたるましみづに
はら〳〵ちるもりのもみぢば　長尾郁子

風による木のはのふれもやまかはに　白石藤子

なみこくさまのおもしろきかな　野崎草子

ますがたは大うなばらがたにいはに
木のはのふれのかずぞうかべる　野崎屋蕗子

まなく散る峰の木のはにたにかはの
なみのあやさへ見えわかぬかな　林治子

行く水に名ごりさゞめてもみちばの
まはしよさむもうかしかりけり　尾立英子

ゆふ川にもみぢはながるあしびきの
やまにもあきやくれんさすらん　尾立富子

をくら山みねのもみぢはちりうけは
ながるるみつもにしきしにけり　秋原草子

立田がはの水にうかべるもみぢばは
にしきをさらすこゝろこそすれ

十月廿日兼題　亡友を思ふ

天　東京四ツ谷傳馬町二ノ卅七　目黒佐喜子

風なきに散る庭の木の葉、雲井を渡る厂の聲、見るも聞くも、なべて思ひの種となるは、秋のならひと知りつれど、わきて今年は、我ながら怪しき迄に袂露けきは、何故ぞ。さるは忘れんとして忘れがたき友の、世を去り給ひし去年の秋を思ひ出づれどなりけり。あはれ去年の秋、まだ病の床にふしはせし頃は、君も人も、かくならむとは思ひかけざりしを、変たてや無常の風に誘はれて、心強くも櫻の質のひとりの母君を殘し。夕の露と消え給ひしこそ悲しけれ。思ひかねては、いく度か墳墓に歩みを運び、亦折々は母君許訪ひて、慰め參らせむとすれど、生憎に我身を見ては君を思ひ出で給ふ種となりてか、母君の思ひ餘りては、いとれふけなき事ながら、竊に神佛をも恨むなりと仰せ給ひしもことわりと覺えて、諸共に袖を絞りにき。君が手馴れの玉の緒琴は、世に居ます時と所を換へねど、懷かしき其爪音は、長へに聞く由もなく、成り果てぬ。あな悲しげなる今宵の月の面影哉、冴かなる影は見せずて、いつになく曇りがちなる有樣は、汝も亦同じ心に悲しぶらむ。あはれ、しのびても〳〵、はふり落つる涙をいかにしてか止めむ。うら枯れの草葉陰れに、弱りつゝ音に鳴く蟲よ、今宵は、汝と諸共に、堪へぬ思ひをなきて明かさむ。

地　伊勢國南飯郡松坂殿町　大平淑子

續みがたきが浮世とは、いつの世よりか定めけん、あすかの川のふちも瀬も、昨日にかはる習ひなりとはうべなりや。今宵は葉月十五夜とて、すみたる月は殘る隈なく照り渡り、千草にすだく虫の音も、やう〳〵によわりゆき、かすかにきこゆる砧のひゞきも、何となううらかなしき折柄、思ひ起せど去年のこよひは、心あひたる友垣の花子の君ともろ共に、月のあかきにあくがれ出で、かたみに手とり交して打興しつゝ、またの年にもかくてこそと、かたくちかひしものを、はかなや月は去年に變らねど、ちぎりし君はあはれ先つ頃

かりそめのいたつきとて枕につき給ひしより、日毎に重りゆき、つひにみとりの甲斐もなく、夜半の嵐にさそはれて、歸らぬ旅にいてましぬ、もとより君には萬の道にすぐれさせ給ひ、わきてみ心ばへさへ優にやさしくまし〳〵かで、師ともあねともたふとびしたひ、入るも出づるも共になし參らせしに、いかに浮世とはいひながら、あはれはかなの有りさまやと、たゞこし方のなつかしく、亡せにし友の戀しさに、忍ぶとすれど我袖はいたくぬれまさりぬ。

人

福岡縣久留米市京町　佐々木　つね子

秋風にもろくも散りし桐の一葉と共に、失せ給ひし我が二つなき友よ。今は何地に在すらん。月を蔽ふ村雲、花を誘ふ夜嵐は、空蟬の世の習ひとはいへ、けにかなしき事のかぎりなりけり。花のあしたも月の夕べも、手に手を取りて、面白くたのしく暮し居たりしも、今は早千年待つとも歸りこぬ、あの世の人とはなり給ひぬ。實にはかなしとも、口惜しとも、いはんかたなしや。國の爲めにとつとめしを、家の爲めにと學びしを、朝夕共になれにしを、よるひる共に文見しを、今はこの世に住み給はぬ事の口惜しさよ。あゝこれよりは、浪風さかまく學ひの海に、たれと共にか棹ささん。事草しげき文の林に、たれと共にかわけ入らん。君の外にはむつまじく交はる人はあらぬぞかし、君ありてこそ、花も月もうとはしけれ。君なくして、なにかたのしき事あらん。あゝ思へば〳〵、先立つものは涙なるかな。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

古今集の哀傷歌に、ねてもみゆねてもみえけりおほかたはうつせみのよぞ夢にはありける、とあり。むかしも今もかはらぬは死別の情になもありけむ。中垣のへだてなかりし友も、常なき風にもみぢ葉のちりゆくごとく、朝露と消えにし昨年の今日をおもひいづれば、現とも夢ともわかちかねて、秋にあまる涙をたゝへて、古今集の歌をくりかへすのみ、あなかなしや。

野村ここ子

哀れしたはしきは霜子の君よ。君がまがつみの神に誘はれて、俄かに歸らぬ旅に趣かれしは長閑けき春に彌生の中ころなりしが、夏さり秋きたりても、なほうつゝとも覺えすなん、悲しきかな痛ましきかな、君世にまし〳〵しなりは、さらに教の窓にもの學ひ一日も相見ぬ事なく、けにはらからと睦びつゝ、互に勵み勵まして問ひ問はれして、相勸め、出ては野山に徜徉し、居りては道義を語り合ひ、水魚と契る交りも、後には閨秀界に入りたき心底にて、うきふしもうれしきなりし、さもしくに、霜の朝や雪の夕、月影白く風きよく、愁のまさなさしのぞき、寢食を忘れて心身を勞せしかひもなく、今は君何處の空に魂すみて、誰をか友とし給ふらん、呼へと應へぬ大空に、かける御魂よ、月の出てたらん夜は見おろし給ひて、わらはがかゝる歎きをあはれとおぼしめし給ひてよ。（變体假名を用ふべからず）

佐々敏子

物のあはれさは、秋の夕暮に增すものぞなき、日は西の山に沈みて、文字も見えすなりゆくまゝに、窓おし開くれば、空晴れて月影いと清らかに、雁がねの鳴き渡るさへかぞへつきぬさまなり、いで此景色見は

きんと、庭におり立ちてある程に、月影は池の面に宿り、鏡の如く見えていとおかし、岸の千草の枯れしなれたる下に、虫のなく音のしきりなるに、そゞろに亡せにし友の事を思ひ起しぬ。去年迄相共に今宵の月の觀しも、月こそ變らぬに、はかなくも返らぬ旅路に向ひぬ。かくはかなくならんとは、いかで去年觀し時思はしや、幼き時よりもろともに同じ學びの庭に生ひたちて心を磨きしなど妹の如し、殊に學びの業に勝れさせ給ひしのみかは、御性のいと優にすなほにましたれば、行く末たのもしく思ひ居りしに、はかなくなり給ひたる口惜しさ、この後は誰と共にか樂まん、たれと共にかいそしみはげまんと、ひたすら悲しみに沈める折から、遠寺の鐘の夜ふけにけりと告ぐる音に驚されて、ふしどに入りぬ。

中山さみ子

花の咲き滿ちたる春の朝、月のさやけき秋の夕、何くれとなく思ひ忍ばるゝは、姉ともたのみて無二の友たりし花子の君の事のみにて、行く末を語り合ひしも水のあわとなりしこそかなしけれ。そも花子の君は、物のわざいとたけ給ひ、み心清らかにやさしく、學校にても、指をりの一人たりしもあはれこその夏、思はぬ病にかゝり、遂にはかなき露と消ぬ給ひしぞ口惜き、常に花子の君の事のみ忍されて、思ひ出でらるゝあまり、今日はめい日にも侍しれにとて、おくつきに詣て、四方山の話をなし聞かせしに、答の言の葉もなく、只虫の音あはれに、松風淋しく吹きわたるのみにて、いとゞ忍ひやらるゝあまり、忘れ草にもとかくはものしつ。

東野さく子

秋雨の。しめやかに降りさひしあまりに、寫眞箱取り出て見るに、中より亡き友の姿く來ぬ、見るより何となう物哀にて、せきくる涙を硯に受けて、つくづくと思ひ見れば、六とせのむかし、同じ學びの庭に、螢の光まどの雪、文讀む月日を重ね、小學高等を終へ、其後二三年も家に有りて、種々と物學ひしある中に、にとみに東京へなれぬ旅れして、或女學校へ入學し、さてのちの成績も人にすぐれたまいたきは、故郷の兩親も、いとゞ喜ばれて、只月に二三度の通信をのみ樂しみありしかひもなく、月に村雲花に風のたとへの如く、去年の秋風にさそはれて、悲しくも黄泉の客となり、歸らぬ旅に出てたまひぬ、己れ聞し時の驚きは、たとへんに物なし、親しき中にも親しく、杖とも柱とも頼みし我友は、業の半途にして亡き人となるこの寫眞を取り出てゝ見る度毎に、物言はぬなたけく外もなし、あはれ日出度き花の匂とも、末たのもしく思ひしものを、嗚呼人の命は朝露の如しとは、誰か云ひ初めし言にか、昨日の喜びは今日の悲しみと變り行きぬ、我友いと才のかしこきは現なり、業も人にすぐれ、物の言ひ樣、たちゐふるまひ、いと靜かにして、他の人の及ばざる程にてありつるものを、噫天道は是なりや非なりや。

竹良よし子

花につれなき春風か、木のはなちらす木がらしか、知らず人の命をなぞひゆく風は、月影かくすむら雲も、いつかは晴るゝ時のあり、風にちりゆく櫻さへ、またこん春にあふものを、ゆきてかへらぬ人の命こそ世にはかなきものゝきはみなれ。朝はうれしき學びの窓に、夕はたのしき花園に、勉めつ遊びて、姉妹のごとくむつみしを、如何に神の覺し召しけんけかれはてたる世の中に、ひとり我をば殘しおきて、あはれ友のみ久方の天つ國へぞ誘ひ給ひける。されば淋しき秋となりて、かなしき上にかなしき事のみ多く、とり〳〵心いたましむる中にも、ひとり庭の松風のみは、けがれなき天つ國に、戀しき君が調べ給へつる琴の名殘かと思へは、なつかしくも又何となり心うれしくてなむ。

四　雛子

人しげき都に住み、いと廣く交際してだに、なほ、魂あへる友は得がたしとかや。されば、かゝる、かた山里に住居したる身の、いかでかは得らるべき。古人を友とすといひけんも、實にと思ひ知らるかし。さりながら、近き頃は、學のわざ、いとたく進みて、彼の雜誌てふものゝ、いと盛に行はるゝものから、海山遠くへだゝりながら、あるは文をたゞかはし、あるは歌をよみ競ひて、互に名のみ知りかはし、紙上の交際、いと厚く、其人の歌文を讀みては、まのあたり、談ふ心地して、又無き友と、

心ゆるせる人、將た少なからず。其が中にも、別けて妾の、慕ひ參らしたる、人こそあれ、そは越前敦賀港に、住みませる、久間春子の君にぞある。女鑑は更なり、少年文集に出し給へる、君の、めでたき歌文をよむごとに、いとも〱、逢ひまつらま欲しき心地して、いかで、紙上の交際をだに、ねぎこゝろみんと、思びながら、猶ほ、はかなき行く末をたのみて、かばかり、思ひ渡り居れば、など一度、逢ひまつらぬ事の、無かるべきとて、打過ごしつるを、あな悲し、あなあたらし、君には、唯かりそめのいたづきとて、伏し給ひしが、漸々重り行きて、遂にいぬる、六月の廿七日といふに、なき母君のあとを、追ひ行き給ひぬとか、噫神佛も、おはしまさぬ世にや、ゆかりなき、遠きこゝらの袖までも、いと露けきを、父君、兄君、のみこゝろや如何ならん。かゝる事あらんと、知りたらば、とく心の程を、聞こえあげて、一日たりとも、紙上の交際を、結び置くべきものを、口惜しとも口惜し。まのあたり言葉をこそ、かけまつられ、こゝろ深くも我が友と、思ひたのみし、君は逝きぬ。今よりは誰と共に、奧深き、文の林を分け入らん、錦ならす山の紅葉、露に匂へる庭面の菊を、見るに付けても、噫、君まさば、如何にめでたき、此の紅葉にも立勝りたる、文のあやをや、織り出で給ふらん。歌の道、文の林に、此の菊の如く、香り給らんものを、めであふぎたる、楓の一本に、折れて、今年の秋は、文の林も、ながめ淋しき心地ぞする。あはれしのすゝき、かばかり思ひ亂るゝも、我れのみかは。其がゆかりの、人達のこゝろの中、はるかに思ひやりて、

いかばかり露けからんこの秋の
あはれをしめし人のたもとは

大平喜代子

秋もやう〱くれかたの、千草にすだく虫のさま〱、早やあるかぎりの聲をつくして、きり〱す唯一つ覺つかなげに鳴き出でたるもうらがなしき夕まぐれ、訪ひくべき友もなくて、折々まどにおとづるゝは、まだき木の葉の散るにやあるらん、いと堪へがたき淋しきを、かゝる折しも、春子の君のましまさば、うちよりてさり〱の物語をもし、あるは歌なんど詠みて、如何にたのしくこの夕を送らん物を、悲しやな、君には去年の夏かりそめの病にて打ちふし給ひしより、日々に重り行き給ひて、木枯の風ふき荒ぶ頃、遂にゆく水の歸らぬ旅路に立ち給ひぬ。あはれ後れ先立つ世の習ひとは、いひながら、萬の業に勝れさせ給ひ、取り分け御心ばへいとやさしく、ことに御姿さへうるはしかりし盛りの花の實をも結ばで、あたら嵐の爲に散り給ひしこそ、かへす〱もはかなけれなど、思ひ出づれば、君がやさしきこわ音耳に聞え、うるはしき御姿さへまのあたりに見ゆる心地せられて、果ては目もあやに、心かき亂れていひ知らずかなしきに、落つる涙はせまき袂に包みかねつゝ堪へ難きを、慰めばやと、つと立てまど押し開けば、何時しか空の雲はれて、月影のみ去年に變らで、白くすみわたるも、いどゝあはれのたねなりかし。

塙　いさむ子

降り續く時雨のあめいと物淋しう、庭の芭蕉の葉に音つれて、賤が伏屋はいとゞ物悲しさを添ふる夜半、獨書齋に文讀みてあれば、浮雲の名殘なう澄み渡りたる空に、月影いと哀れにさし昇りて、窓の呉竹さわ〱と秋風に亂れあひて動くさま、室の壁に映りて物すごきに、千草にすだく虫のねは、憂世をかこちて、坐に昔を偲ふ涙を催さるゝものから、一向思出てらるゝは、亡き友艷子の君の在しゝ昔なり。數ふれば早や三年の昔となりぬ。あれれ、君はしも、妹とめで惠み給ひし妾を振り捨てゝ、遠く歸らぬ死出の旅路に立ち給ひしかば、妾は其れより誰をたよるべき方もなく、つれ〱に泣き暮して、一日だに忘るゝ間なく、夢現のまに、はかなく今日迄過ごしつるよ、思へば〱悲しさの限りよな、艷子ぬしに、、妾が年少きゆゑわざもも懇くみ給ひて、學校に在る時は更なり、朝な夕な、何くれと敎へ導き給へば、妾も姉君と敬ひなづきて、隔てなく心の中を語り合ひ、こよなき樂みと思ひゐしに、つれなき風に誘はれ給ひて、此月のこよひにあたる曉がたに、山の端に隱るゝ月影と諸共に、なき數に入り給ひけり、噫妾は死ぬとも君を戀ふる涙は盡きじ、あな雲間を渡る雁がねよ、なれは艷子ぬしの在す山路を越え來しか、いかに、噫今宵も亦今より多寳院のおくつきに詣でむいざやいざ、諸行

無常の鐘の聲を聞きては、などて堪ふべけむ。

佐藤喜代子

朝はまたきに起きて、共に朝けのいそぎな爲し、夕は燈火のもとに、二人机を併べて語りあひ、又夜な〱、師の君の御許に集ひて、文よむ道のしるべなど伺ひ奉りつゝ、二人むつれて、睦ましく月の傾くも知らであくがれしは、はや去年の今日にてありしよ。親しき花子の君には、常なき風にさそはれて、逝きましゝよ、月はこゝひもかはられざ、共はながめし花子の君はましまさず、師の君の御許に、去年の儘に侍べりぬれど、共にみことばを伺ふ君はましまさず。日々のつとめはかわられど、手に手を取りし花子の君のまさで、哀れにも一入淋しく、机の辺にうつくまりて、いさゞしく物思ひに沈みぬれば、泪の雫に墨すりて、おぼつかなきながらかくなむ。

根岸里子

顧み思へは六とせの昔、君とわれとが、手をとりて學びの庭をあさりつゝ、歌への草をつみためて、やかてうれしき春の日に、おなじ故郷に歸り來りき。にしきならねど、容飾りて歸る此日のたのしさは、そも何をもてたぐひてん、およびおりつゝ、待ちませる君とわれとのかぞいろは、共に喜び玉ひにき。よろこび玉ふひまもなく、月の十度も經ぬ中に、君は病に侵されて、なさけしたゝるたらちねやしたへる友をふりすてゝ、この世の外に去り玉ひぬ、かはるは早き世のならひとはいひながら、うたてしや、夜半の嵐に散る木の葉、惜むも甲斐はなけれども、人にすくれし君なれは、友とも頼み師とも仰ぎ、まゝはらからと契りつゝ、問ひつ問はれつ勉めたる、昔も今は夢とさめ、學びし業をかにかくに試みばやと約せしも、今はうたかたの泡と消ぬ、われのみひとりさまよひて、せきあくる胸、きぬかへる心、誰に向ひて語らまし、誰に向ひて晴るまし。光りさやけき望の月、とこよにかへる雁のむれ、ながめはいさゞ妙なれど、物思ふ身は、いつれもあはれのたねにて、千草にすたく虫の音の、なくより外はなかりけり。

福原すみれ子

肌へつんざく冬の日も、金溶かす夏の日も、共に携へて歌の庭に、いそしみ勵み、同窓にもまして親しうせし年々の、昨日今日と思ひしに、隙ゆく駒のあし早く、わが親しき竹子の君が、かへらぬ旅にいで給ひてたり、早一とせ餘りの年月とはなりにき。或は、花の朝、月の夕、ものにふれ、事に逢ひ、過ぎし昔を思ひいでゝは、いさゞ胸せまり、念ひを君が書き遣し給ひし文に、やるこゝとあり。或は思ひ寝の夢に、君とあひ、さめて後も、猶現世にます心地して、中々に涙せきあへぬ事あり、あゝ君に千代の齢を保たしめなば、いかに行く末たのもしきよ、思へば〱夢の世の夢なりけり。けふすも、君のなつかしき寫し繪とりいで、賢く優にすなほなりし性の追慕せられて、かくはつゞりぬ。

高嶺ぞいまは仇なるこれなくば
思ひいづべきこともあらなくに

小川すて子

かすみたなびく春の日も、月かげきよき秋の夜も、ともにむかしに變らねど、變りはてにし我が友は、常なき嵐にさそはれて、あまたの望みをいだきつゝ、思はぬ旅にいでたちたまふ心の中やいかなりしならん、ともありしそのかみしのばれて、涙の袖をぞしぼりける、あはれ悲しきかな、亡き友はいまはいづこに在すらん。花のあしたも月の夜も、同じ學びのまどにゐて、共にいそしみはげみつゝ、ゆくすゑ〱は、御國のために盡さんと、ちかひし言の葉も、いまははやかたみの昔の葉とはなりにける。あはれかなしや、なき友に、しづかにねむりていますらん。その奥津城どころおとなへば、てらす夕日の影うすく、折りて手向けし其花に時雨をそゝぐ人やたれ、君のみたまよ、つゆのまごゝろをあはれと思したまはゞ、此の香花をうけたまひてよ、あなあはれ。

渋井うら子

世の中にいとむつまじき友どちと、長き別れなせしほど、悲しく心憂きはなし。去年の秋、はらからもおよばぬはかりいともしたしく、春の朝秋の夕、楽みかたらひける友の、ふと風のこゝちとうちふししが、散りてゆく桐の一と葉ともろともに、あらぬ旅に出でたち、北邙一片の烟と

化り果てしこのいた、花を見月をながむるも、いづれも涙の種にて、見るもの聞くもの、樂しからず、みなあはれにのみ感しぬ。まして、つゞれさせてふ虫の音も、きれぎれに、木枯らしの身にしむきのふけふ、つれづれなるまゝ、琴なさかなで、うち慰めんと取り出したる品は、これなん其友の我が身に殘しゝ琴にて、却て過ぎにし事ども思ひ出し、遺物こそ今は仇なれ、いとゞかなしさいやましゝ折しも、秋々として露にむせぶ庭の虫、皎々として照り渡る霄の月、斷腸のおもひにたへられずなん。

渡井基子

物を思はぬ時だにも、秋の心はかなしきに、いにしみな月ついたち頃、あしたの露と諸共に、はかなくなり給ひし師とも姉とも、たのみまつりし學びの友雪子の君の忍ばれて、かなしさやるかたなく、花は嵐に散るといへども、又咲く日あり、月は村雲におほはれて光をうしなふとも、いつか雲間をもるる時あり。されど、人は一度野邊のけむりと消ぬうせては、再びかへりくる日はあらず。思へば思へば、實に人の命ほどはかなきものはあらじかし。去年の秋、てを取りかはしつゝ小山に登り、大空にすみ渡れる月を眺め、草村にあはれを告ぐる虫の音を聞きては、いづれもあはれ深しなど語らひしも、なにはゝのみじかきあしのふしのまに、はや今宵は涙のたれとなりぬ、ははれ雪子の君、いましなば學びの業もいみじう進ませ給ひつらんに、など、同じ繰り言に胸くもり、窓の燈の影もしめりて、うたた袖もつゆけく、あゝなき友のこひしくもなつかしくもあるかな。

梅村うめ子

秋も最中となりて、人々待ち得たる今宵の月、明らけきに、吾のみは更に浮世の中の面白さも、嬉しさも得覺えで、あはれなき友の事の思ひ出でられ、ひたひらかなしきふしのみ殘らぬ折となれるこそ、世にはさちなきものゝきはみなれ。花も何かはあらん。月も何かはあらん。花を愛でもわが亡き友のうつくしくやさしきこゝろにたぐひて見し心にてありけり、月を賞せしもわが亡き友のすゞしくあきらけきこゝろにたぐひて見ればにてありけり。今はむなしく花散りて、涙に月の曇りがちなるこそあだなれや。夜はいたくふけにけり、虫はいよいよ聲たかし、春郷大人の

秋風に尾花る野のきりぎりす
　いたくななきそ物思ふ頃に

とは我心をや詠まれけん、あなう、今宵を如何に明かさん。

生駒ふれ子

同じ學びの友の内、いとも親しくむつびかはして、あるは野邊、あるは山にと、あくがれて、樂しき事、かなしき事、はた苦しき事をも、ともにとひとはれつゝ、膠漆も物かはと、親はらからよりも親しかりしに、月に村雲花に風のたとへにもれず、我友よし子の君には、かりそめのいたづきより、日々に重りゆき、遂にあへなくもなき數に入り給ひぬ、しばらくは我片うでを取られし心地せられて、文見んも物憂く、友の寫眞を取り出でゝ、秋をうるほしゝこと幾千度ぞ。嗚呼はかなきは浮世なりけり、今日は命日なれば、菩提所にまうで、香花など手向け、「ナムアミダ」と合掌する折しも、なゝふは子さまかと、影もおぼろにあらはれ給ひぬ、その給ふはよし子の君にや、恙なりおはせしか、なつかしやと、手を取れば、あはれ秋の夜の夢は空しくさめはてぬ。

綿野りき子

數はたらでと、古人のなげき給ひけりとなん。よろづにつけ、しのばるゝは、亡き友のありし昔なりけり。去にし年、諸共に此松山に遊びし折、茲に松茸ありと、嬉しげにさけび出したまひける御聲、今も猶耳にのこりてあれど、あはれ御身は、野末の露と消ねたまひ、再びあふべきよしもなし。あな今日の山あさりのはねありしよ、君いましたらんには、しめぢはつたけ、とりどり如何に喜ばせ給ふらんに、みつればかくる世の悲しさと、かたへの友をかへり見れば、何れも皆同じ心にや、打ちしほれぬ。嗚呼今何處にかおはすらんと、思ひあまりて空打仰げば、早や夕暮にやなりにけむ、茜さす日は、あなたの木陰にかたぶきて、田面に落つる黄金の壁、いともの悲しく聞ねてなん。

清田　みさを子

あはれ悲しきものや、鈴木靜子は、我心あひの友なり。家居さへ近ければ、朝に夕に、學びの園に行くも歸るも、諸共にせしをはかなくも、いぬる月の十五日の曉方、隈なき月の西峰に入ると共に、黄泉の客となりにけり。思へば今年十四才、渡るべき世のなみぢをも渡らで、父母の君に先立ちし靜子の心、如何なりつらん。後れ給ふ父母の君の御心は如何ならんと、思ひやるに堪がたし。あはれ婦徳美しき人を亡ふ程口惜きはなし。我日毎に通學するも、たのしき事なく、歸りし後復習するに不審を明らむる友もなし。文をひもとくも、いつしか心は靜子に奪はれて、思はずも、君がかつて作れる文とも取り出し見るに、かなしさいはん方なし。をりしも日はくれ果てゝ、さと吹く風の、呉竹の葉末の露、はら〳〵とちりて、あたり靜に只虫の音のみぞ高き。

佐久間　八重子

今よひは、後の月とて、かれて、たらちねの、こゝろまかひせられしものかわらはの、いと好めは、いと赤き柿と、いと美はしきいしにこゝ、と學枝豆などをものせられて、月にも供へ、わらはにも、賜はりぬ。さて、今宵は月影いとさやかなれど、何となう、ものたらぬ心地せられぬ、よさ、ゆくりなう、打ち案じつる程こそあれ、あやなく桐の一葉ちり落ぬれは、夢の世のいと哀れにて、忽思ひ出でらるゝは、之なむ學びの友の、いと親しかりし、山田ふく子ぬしにぞありける。其のありし世のこゝろばへは、最やさしく、學びの道にも暗からで、殊に、手をよく書かれ、歌をよく詠まれ、ねもごろに、撫子を培はれ、世の人のなべての覺ねも、いとよかりき。而して、そが家は、安房の郡八束村大洲とて、程近き片山里の、山の麓にありて、春秋のながめ、何れもをかしきが、わけて、月の夜は、田毎の月もかくやと思はるゝ處にて、去年の今宵は、わらはを招ぎて、あるじまうけせられ、いといと嬉しく、かたみに打ちかたらひ、打ち興じ、又かたみに心の花をもよみいでゝ、月にあくがれしが、今年の花咲き鳥囀るせつばかりに、かりそめの病の床に、打ちふされしが、神かけし祈りごとも、そらだのめにて、醫師の藥も、そのかひなく、なましずむ父母同胞にも先だちて、花の盛りの十九歳を一期にて、あだし風に吹きちらされぬるぞ、いと口惜しく哀れなりし。其時、わらはのかなしかりしは、そでに包まんやうもなく、はらからに別れしにも、いやまさりて、胸もちぎるゝばかりに、いともいたましかりしが、今宵ゆくりなう月の光と、桐の一葉に、思ひ浮び出でゝは、亦、今更のやうに、うらかなしく、千々に心みだれぬ。あゝ月の影は去年にかはらねども、今は、はや、その人の面影さへめず、まいて互にかたらひ、互に興ずるなさは、夢ならでは其かひなく、あはれあはれ、あなあはれ、さやけき月も忽涙にうちくもり、たらちねの心盡しも、手をつくべき心も出てず。いと昔の偲ばれて、夢の世の常なさ、實に果敢なきわざに思はれて、かくなむ。

名取　正代子

かたみこそ今はあたなれ、これなくば忘るゝ時もあらましものを、さても君が書きまし給へる此水莖の跡のうるはしく、將なつかしさよ。思ひめぐらせば、かへらぬ旅にいでたち給ひしも、はや三とせのむかしとはなりぬ。今やいづこの野邊にかものし給ふらん。あはれ幼きよりはらからも及ばぬまでにむつびかはして、春の花秋の月見は更にもいはず、朝にはふみの理をあげつらひ、夕にはかたみに心のたけをかたりあひつゝ、出づるに入るに、志ばしもはなるゝとなく、樂しきもうきもつらきも共にして、身こそふたつなれ心はたゞ一つなるがごとくなりき。さるを、君が遠き境に入り給ひてより、我身は片手うしなひたらんが如く、物たらぬ心地のみして、君がありし昔をしのびいづるをり〳〵に、かたみの文をとりいでゝは、逢ひまつる心地やするとて、見るさへ涙の種なりや。

うたゝねの夢の中にもまたはしき
君にあふ夜はうれしかりけり

澁川　いよ子

昨日今日病やう〳〵怠りぬ。秋の行く方も知らまほしければ、暫時端居して見渡す。庭より續く野邊の氣色も、いつしか色付き渡りて、千種の

花の、巳がじしなるも、取々にをかしうなん。夕日の影に、今西の山端に沈みて、名殘の色の錦を織れる木々の紅葉に照り添ひたる、又云はん方なう美し、斯る野山を、意のまゝにふみもなしはぬ本意なさに、樂しかりし去年の秋さへ忍び出でられつ、其折よ、親しき友と、終日野邊に山邊に遊び暮らしつ、越し方行く末の事語ふ程に、近き日都に上りて、物學びせてはと、打勇む友の末賴母しく、折り採りし色濃き紅葉頭上にさゝせて、錦着て歸り來まさん秋、又此處に遊ばんなど、盟びてし事などありしが、いかに學の道のつらかりけん、其中端をもし終へで、此春花誘ふ嵐と共に、都の空にて失せぬるぞかし、げに數々思ひ殘せし事もありつらんを、いかに口惜しかりけん。あはれ秋は來りぬ、吾が病も愈ゆる時あらんか、何時かは、友の錦飾りて歸り來ん。思へは、胸ふたがりて、堪へがたき心地しぬるを、せめては秋の一枝、心計に君に手向けんと、力なく庭に下り立てば、空の色やう〳〵薄らぎて、遠山の鐘の音かするに、折柄桐の一葉落ちぬ。

戸塚銕子

思ひいつれば、はや信子の君のみまかり給ひてより、七年の秋はめくりきぬ。そもおのれは東にうまれ、兄弟もなく、いとたより少き身なれは、只友どちをのみ力草とたのみつる中にも、君とは一つ學びの庭へ鳴、何事もへだてなくかたらひ、もろ共によしあしにつけて、樂しくそこかしこものして、たがひに姉妹とよびなして、いとむつましう、幾とせか長の月日を送りしうち、がひもなう、君には重き病の床につかせ、程もなくかへらぬ旅路へ出でたゝせ給ひし時のおどろきは、實にいはん方なく、わらはもともにとまでかなしう、何の言の葉もいでざりき。今さらくゆるもせんなき事ながら、別れしはなほきのふけふなる心地せられ、年々共にながめし秋の夜のくまなき月みれば、君が眞心おもはれて、一しほなつかしく、ことに此としは、七とせにめくりあひたれは、御墓へもまうで、亡きたまをなぐさめはやと思ひ居しに、はからずもこたびへたる國の熊本へうつりきては、思ふにまかせず、さはいへ、すておくは心もとなく、實に君が日頃のいさを、常々のいと志し深き御こゝろ、わらはが如き拙き筆にしては、中々盡されず、只々なき君のみかげのしのはれて、かくはかきつられつ。

三瀦操子

秋の夜の更けゆくままに、隙もる風の膚寒く、淺茅生の虫の音さへ、わびしさをそへて、物はかなくあはれなるに、先おもひ出さるるは、蕭の君になむ。つく〴〵と思ひめぐらせば、親しき友どち、いと多かる中に、蕭の君ばかり、うるはしきはなかりしを、いにし春の末つ方、はかなき風にさそはれて、山の櫻とともにちりゆきぬ、山の櫻は、こむ春には、また咲き出づべきを、蕭の君は、いかなる春にか、色香ゆかしう咲きいづべき、おもへば、見るもの聞くものにつけ、涙の種ならぬはあらずかし。あはれ蕭の君、此の世にあらませば、共に手を携へて、莫[illegible]の山の紅葉ながめ、三島の野べに、秋の七草をめで、あるは、月あかき夜、共に庭の松影をふみて、歡語りし、冬の夜は、埋火たきおこしつつ、共に行く末の目的など、語りかはさば、いかに樂しからむなどおもふにも、この世のはかなき事のみ、うちかこたれてなむ。いにし日、君がおくつきに詣で、日頃好ませたまひし、女郎花を手向けばや、と道すがら手をりつつゆくに、道のくま〴〵、薄尾花のうち招くを、見るにつけても、返りきまさぬ君の上のみ忍ばれて、いと悲しかりきなと、おもひつゞくれば、目も合はず、なりしも、曉告ぐる遠寺の鐘、二こゑ三こゑ軒端を傳ふる夜嵐にさそひくる、あはれさいはむかたなくなむ。

並木春子

月は淸うてりわたりぬ、夜はまだふけもやらぬに、はやものしづかになりゆきて、尾すゝきのさびしうなびきあへるに、秋風さへおとづれて、なんとなう身にしみわたる庭のけしき、思へばはや一とせにもなりにけり、我親友菊子の君と、月見にとて打つれいでしは、そのなか月なかばにて、露けき小草をふみわけて、春日野わたりそゞろのありきせしに、月ははやう出でながら、一むら雲のあやなくもさやけきかげをおほひければ、いと心ゆかぬに、君まづ「萩すゝきわけて月見にきしものを鹿の音ばかり空にすみけり」とつぶやきたまふ折しも、かの雲やう〳〵

すらぎて、やがてくまなきひかりのあらはれいでたれば、おもはずもろ手うちて、まなめでたき影やとうちあふぎたまひし君がすがた、今もまのあたりあるやうにおぼゆるを、今宵もおなじく月はくまなく、尾花も萩もさきみだれ、遠く鹿のこゑさへきこゆるに、などてかくかの夜ににるやうもなく、いとゞさびしさのみますならん、げにかの君は、今年の春の花よりさきに、つれなき嵐にさそはれたまひつるなりけり、あゝ月かげは面がはりせず、いでゝ入れども、君がいりにしはいづこの山やらん、またまみゆるすべもなし、あゝかなしきかも、

青木毅子

小住の身には、只さへうらさびしきに、をやみもなく降る秋雨の日を、病にうちふせる身には、そゞろにもの悲しく、長き一夜を寝覺め勝にのみ過せば、あはれと思されてか、母君の枕邊にそなへたまひし寫し繪詞かれと眺めゆくに、こゝにも涙そふる種一つあり、幼かりし其昔より、只二人のみ友と睦みし人の面影、今見る如く見ゆれど、早其人は遠く此世を去りて、呼へどいらへもせず、われのみ一人殘し置きて、何處の空にあくがれゆきけん、思へば此友人のうせにしも、かゝる秋の日なりけり、長き病のとこにおちふして、やせ行く影を、日毎見る身の、いかに悲しかりけん、まして其秋は、ともに紅葉狩になど、まだ青葉の頃より約しつるを、其木の葉よりももろくちり行くとは知らで、やがて癒ねなばなどいふを、甲斐なしと知りつゝ、聞く身のいとゞつらくこそありしか、あはれ悲しと見し友の上は、早三とせの昔にして、われは此秋、同じいたつきのとこにつけど、其時のわれのごと訪ふ人もなき身には、一入の悲しさまさり來て、今はそゞろに己が上思ふ時、ぬれてや鹿の汝のみかは、涙を絞るわれありと知らでや、枕邊近く啼く聲、筧の音に打ちまじりて、またも聞ねつ、またも聞ねつ。

寺尾まさ子

四の國の人、親しき友なくは、世界はやみなりと言ひきとか、げによくあたれる、言にこそ、かぞふれば早や一年にもなりぬれど、あけくれに心はなれずこその秋庭の八千草咲く頃に、思はぬいたつきにて、紅葉のちるをもまたで、露ときえたまひし、我が君には、こぞしもやうやう、寒さもまさり行くに、木の葉にうつもるゝ、こけの下にて、さぞやはかなき世を、かこちたまふらん、と思へば、いとゞかなしく、朝夕ともに、學の業にいそしみて、よきはほめ、惡しきはいさめつゝ、いさめられもして、親しみかたらひしに、今はさせる人のなきより、まことに物うく、おこたりがちにのみ、成りもて行きて、たゞ〳〵ぬは玉のやみ路を、たどる心地して、秋の月のおもしろきも、木々の紅のうつくしきも、我が君と、ともにながめたらんにはと、何につけのなみだのたねとのみなりて、たがひに取かはせし寫眞の今はかたみに成りけると思へは、見るさへいとゞ心くるしや。

吉岡歌子

蘇武が胡國に趣きしも、漢家萬里の月に歸り、阮君が仙洞に入りしも、晋室七世の風に歸りきとかや、實に假令湖山遠く隔つとも、命しあらば、相見る事の難かるべきにてらず、或日徒然なるまゝに、文箱をあさりつゝあるに、亡人の紀念の文と共に、一葉の寫眞をぞ見つけたる、別れにし其折の心地して、香をたき、花を捧げ、徐かに昔を忍び奉れば、あはれ、如何なる契りありてか、姉と敬ひ、妹と睦び、學の窓に人多かれど、かゝる交りあらじとは、人も許して、替りなき心の友の例に引かれ、長岡山の花の陰、神通川原の秋の月、樂しきにつけ、憂きにつけ、共に語りし君なるを、一夜の嵐は君をさそひ、春猶深き苔の花の、行く末遠き望もて、ちりて歸らずなりたまひぬ。あはれおのれ、君を失ひまゐりしより、花鳥の色音も心にそまず、若葉の陰も樂しからず、軒の橘かをるにつけ、時鳥まちにし夜半を偲び、荻吹く風の淋しきにも、共に語りし昔を思ひ、泪の外に語らん友もなく、君ならで心を慰むよすがもなし、あはれ、花の笑顔、月の眉、ありし姿は其儘ながら、かゝる形見を世に殘しおきて、今は苔むす墓の下に、とへど答へぬ身となり給ふか、とかう考ふれば、一入悲しさのそはり來て、花の御姿だに見ねずなりぬ。あはれ、世にます君なりせば、湖山遙しても見ゆべきを、雁の玉章通はずとも、事とふ折もあるべきを、死出

の山路、三途の川、世を與にせる別れ路は、誰かは相見しものあらん、あはれはかなしの世や。

大友つぎ子

月に二度つゝは、必文おこせ玉ひし、久間春子の君の、絶ねて音づれ玉はず、女鑑にも御手ふりの見ゑされは、いといふかしく思ひて、文、たてまつり今日かあすかと、御返りまちつるかひもなし、はや身まかり玉ひぬとの御知らせに、夢かとはかり驚きて、悲しさやるかたなし。あはれ此君は、妾よりは二とせの姉君にましましゝ、御手いときよらかに學びの山の奥ふかくたどり玉ひて、古への清原紫のおもとには及び玉はずとも、縣居の門に名を知られ玉ひし、閨秀の方々には、はるかに越ゑさせ玉ひしに、世の才あるものは早く身まかるといふふうん諺の、ねたくも誠となりしこそうたてけれ。只文通はす友たにも、涙にくれておくられし心地するを、生みゝ父母の君たち、如何に悔しくましますらん、生る者は必滅ふとかや、今は只残りし寫眞と、御文こそせめてもの形見とせめ。

無名

軒はに騒ぐ秋の葉風も、静まりたる頃、ふと目さむれば、閨の戸をほとしく、打たゝく音す。あやしとて立ち出づれば、日ごとにうとはしき友と、戀ひしたへる、栞の君こそ立たせ給へれ。嬉しき音はんかたなくうはし打ちまもるに、あまり月のなかしかけりれば、うかれ出でたるなり、君とは久しう散歩もせねば、いざ給へと、そゝのかし給ふまにく、そこはかとなく、たどり行きて、とある川邊に出でぬ。水ぎはにいこひて四方を見やれば、遠近の田の面に、おひ茂れる稲葉の露のきらめきたる、まづをかし。草村にて、鳴きつかれたらんやうなる虫の音の、こゝかしこに、聞ゆるなど、又なくあはれなり。一日あひ奉らでだに、かなしう覺ゆれば、さいつ頃よりは、身も消ゑなんばかりに、こそ侍りつれと、いへば妾もわびしき、月日を過しつるよと、かたみにつもる物がたりする、ほどに、月はいよく、すみ渡りて、夜はいたく更けぬ。いざ歸らばやと、立ちあがる折しも、彼の君何とかし給ひけん、足すべり給ふよと、見る間もなく、水煙立てゝ落ち入りましぬ。あなやとさけぶ聲に驚けば、身はふしどにありて、枕邊の燈火吹き入る風にまたゝいけり。つくく思へば、彼の君は去にし年の此頃、桐の一葉と共に、ちり給ひて、今は、吳竹の世をへだて給ふものを、あひまつりしは、あはれ夢なりけり。實に盧生が見しといふさまには、かはりためれど、さめてかひなき、夢にこそ有りけれ。あはれ君は行正しう、菰の巣に秀で給へれば、師ともちぎりたのみつるものを、定めなき世とはいへ、口惜しき事してけりと、朝夕思ひなやみし心のつかれにや有りけん、さるにても、昔忍ぶることよと、夜の物うるほすほどに何所の寺よりか、曉告ぐる鐘の音、枕がみにひゞき渡りぬ。

泉　久良子

この程の秋雨つゝきに、讀み出でにしふみにも倦みて、友なつかしくおぼゆるまゝ、絶ねてとりかはしゝ、友かきの寫眞帖をとり出でたり、見れは、忽ち今こゝに、あひ見る心地して、嬉しとも嬉しき中に、獨り何子の君は、その性温和にして、慈愛ふかく、學ひの道にも、心さとく、天晴世に名を揚げつへき君と、人もいへは我も思ひ、殊に親しくなれ睦み、誰れはありとも、この君はと、月雪花の折々は、杖つられて諸共に、よきもあしきも語り合ひ、なくさめ合ひて、行く末の契りも、いとゞ深かりしを、先つとし、心ます事のをはすとて、東京にと、登り給ひしを、このとしのはしめより、腦とやらを病み給ひ、醫藥も其甲斐なく、終に返らぬ人となり給ひしとぞ。今はたゝかたみのこの寫眞のみ、ありし世の、花のかんばせ月のまゆ、とへは答へんさまながら、我ふりうゝく涙の雨いかにかなしくおぼすらん、こと葉の露のむつたまあひて語らん、友なきぞ哀しき。

泉　さい子

鳴呼夢とや言はまし、うつゝとや言はまし、我友つて子君、世をさりたまひしは、昨日けふと思ひつるも、はや、こぞの、けふになん有ける。いたましきを、君は其性、怜悧にまして、學ひの道の、いそしみ、曹に螢につとめ、はけみ、何くれとなく、うるはしき、さかなりし

なふと病のためにくるしめらし、かぞいろの心盡しも、醫師の藥も、水の泡と、消ゑ行きて、遠寺の鐘の、聞ゆる時、あはれはかなく、うせたまひぬ。あなうらめし、あなかなし。われもともに、同じ道にも、つれなひて、よなと、なきからにきこゑ、かなしみしは、そも此日に有りけるこそ、千と世のうらみなれと、かく思ひつゝ、皆此君のめてたまひし、くさ〴〵の、香をとりいたし、ひたすらくゆらし、此窓に立ちそひて、花のゑまひの、面影もやさ、そゝろに心せきとめかれ、ひさ時雨の催すころは、大陽西にかたむきて、學ひの窓は薄くらく、夕かすの、ねくらに迷ふ聲なと、何れもあはれならさるはなく、いよゝむかしの思はれてなん。

本田いれ子

月にむら雲花に嵐、はかなきうき世のならひは、我等の外とのみ思ひしが、けに去年の今日までは、學ひの窓を共にし、世のうきことも打語らひて、女子の本務はかくぞなどちかひてし、親しき友の身の上に、いかなればあだちる露のおきそめて、無常の風に散りゆきけん。あなかなし、何時ても面影ばかりは消れうする日のなきものを、ぬしの此世におはしまさざれば、こしかたゆく末の事ども思ひつゝけて、心のくまのはるゝひまなきぞ、世にもうたてき限りなりける。あはれちりゆく花ならば、またこん春は、枝にもどりて咲き匂ふべきを。

渡邊みれ子

秋もやう〳〵深くなりゆくまゝ、悲しき事こそ多からめなど思ふにも、草間にすだく蟲のねにまづぞかなしきとも、或は時は分かれど秋の夜ぞ物思ふことかぎりとも、古の人もいひけむ、わらはは、一夜、燈火かゝげて、文などくりひろげたりしが、やゝふくる頃、こぞの日記とうでゝ見ることあり。人も靜まりて、虫の音高きに、こぞの今宵は、我何してありけむなど、なかしう思ひて、尚よみもて行くに、さては悲しうなりて、袖ぬらしけり。そは我が親しき友なりつる、金子愛子孃の事になむありける。孃とわらはは、すみかの州近くて、年のほども同じければ、幼き程より、かたみに相親みて、學びやにも同じ様に通ひつるを、去年の秋、いろづく木々の葉と同じう世をさり給ひしこそかなしけれ、面影や言の葉など、今見る樣にも聞く樣にも思はるゝを、今は相見むことも叶ひがたし、こぞの睦月には、歌留多なども取り合ひしを、今はこれもさめぬ夢とぞなり、人の命は、いはゞ朝顔のつゆとや、露おちて花のこり、のこるも朝日にかれ、花は萎みて露きゑぬも、夕をまつとをなしとか、物にも書けり、わらはと孃とは、花と露よりもなつかしみつるを、露はちりたるに、花むなしく殘り、花は萎みて、つゆむなしく消ゑやらぬこそはかなけれ、互にはげみ、互につとめける道にも、わらは獨りぞ殘りたる、いづちにかも君は行きけむ、やよ君よ、我をすてゝ獨旅路にいそぐを願はれてか、なごりをしや、わらは、今うつしゑなど拜みて、獨淚にむせぶを、苔の下なる君よ、我を思ひいで給はぬか、あはれとねたねで、此夜はなきあかしてけり。

丸山郁子

世の中に樂しきものゝ數はあれど、村肝の心へだてぬ友垣と、睦みあふ程樂しきはあらじ、巳ふりわけがみのいとけなき時より、朝夕になれしたのしみし友を、花子といふ、小學校に通ふにも、日每に袂を連れて、往きつ歸りせしが、年稍長して、君が高等女學校に入り玉ふときくや、巳も父母に切に乞ひて、諸共に同じ路にと進みけるが、君には、いと懇に巳を導き玉ひて、巳が定らざるを補ひ、過をさとし玉ひ、又花とゝ朝、月すむ夕、樂しきにつけ、わびしきにつけて、必互に語らひ、喜を共にし、憂を分ちけり、さても、此友は、淑德いといみじうて、敎の親達も、常に巳等に向ひて、やさしき姫百合のかゝみとするは花子ぞ、とのたまひし程なりしが、其の才智も、亦人に勝れさせければ、實に得難き淑女よと、人皆のほめたゝふれども、君はつゆをごりたかふりたる氣色も無く、いよ〳〵身をつゝしみ、業をはげみ玉ふの外なかりけり。然るを、うたて〳〵、去年の秋、無常の風は學びの園にも吹きすさびて、あたら花の蕾を、桐の一葉と共にちらし了りぬ。あはれ、此のつぼみをして、さはり無く生ひたゝしめなば、いかに美はしき花をや開かん、いか斗りめでたき實をや結ぶらんと、けに恨めしきは無常の風なり、いたましきは蕾の花

なり、已此の善き友を亡ひよりは、さながら嬰兒の母にわかれし如く、只管に悲しくて、袖に時雨のかゝらぬ時もく、常に君がうつし姿に向ひては、なつかしさの限りをかき口說けども心なき寫眞は、何のいらへもせず、果は淚の淵に沈むのみなり、あはれ〳〵せの中に悲しき事の數多あれども、たまあへる友に先たゝれたるほど、悲しきはあらじかし。

降田蒔起子

一日の夕つ方、徒然なるまゝ、數多の寫眞とうでゝ見る中に、さいつ頃、身まかりたる友の姿のありければ、あらなつかしさ、取りあげ、つく〳〵とながむるに、肥ゐふとりたる頰、秀でたる眉、愛らしき口元など、如何に思ふも、世になき人とは思はれず、いかなれば、君はかくも短き命なりけん、君が父母の君には、まだすこやかにおはするを、其すぐれたる才、やさしき性質、行く末如何にめでたからんと、人々の云ひあひしを、いとも〳〵惜しき限りになん、あはれ、今も世にましまさんには、此事も、共に學び、彼の事も、諸共になしてんに、今は幽明と境を隔て、またあふよしのなきこそかなしともかなしけれ。など、種々に、ありし昔のしのばれ、萬感胸にせまり、はふり落つる淚とゞめもあへず、さなきだに、露けき秋の袂の、ゐとごにぬれまさるに、日はいつしか暮れ果て、はしためのあかしまゐらせんとて、燈火もて來りしに驚き、そこらちりたる寫眞とり納め、机によりゝ、かくはかきつくるになん。

田中廣子

二なき友の、なき人のかずに入り給ひにしころ、いとも〳〵かなしけれ、思ひめぐらせば、去歲の秋、我なきはらからは、つれなき風に誘はれて、あはれむなしうなり給ひにき。されば、雨の夕、あらしのあした、さては、月に花に、折にふれては、一入戀しうなつかしう、束のまも心にわするゝ時ぞなき。あはれ、はかなき彼の君よと、心わななき、身ふるひて、三とせの昔、互に取りかはしゝ寫眞取り出で、ながむれば、いよよむかしのしのばれて、はらわたちぎるゝばかりになむ。あなあはれ、はかなきものは命なりけり。

（以下延着）

なかれゆくもみぢの色はやまかはの
　きよきこゝろのにしきなるらん　笹子歌子

ちりてよりまたひさしほのながめ哉
　たにのしみづにうかぶもみぢば　村尾郁子

けさこそは見ごころましぬいけ水も
　うかぶもみぢのうつりかぞする　小林文子

ながれくるもはふたはのもみぢはに
　みやまのおくのあきをしるかな　島山百合子

小林文子

思ひ出るもはかなしや、ふりわけがみの其昔共にあそびしのも山も、今にかはらぬ松が枝に千歲をかけてちかひてし、ちぎりも今はあだ浪や行きてかへらぬ死でのやま、峰の白雪ふみわけて葉末のつゆときえし君、あななつかしの我が友よかせのあしたも雨の夜も、思ひはたえず涙川きのふのふちは今日のせと、かはるならひはあきつ身の、この世のつれなきうき雲の、はれまもまたずあだ櫻ちりてはかなき浮世をば、いとひし君は今いづこあふぎてよべば尾花ふく、風の音のみいとたかしなりしも空になくかりの、こゑはあはれをそへにけり、月も心や知りてけん、まなくゝもりてかげみせず。

初霜

有明のつきの光とながめしは
　けさおきそめし庭のはつしも　福原藍子

立秋

我宿の窓のくれ竹さや〳〵と
　風ふきわけて秋は來にけり　近藤美津子

銀行

一人つみ二人つみつゝ日の本の
こがれの山の高くもあるかな　失名

古戰塲虫

ものゝふのきにし跡をきてさへば
くさばかくれにむしそこたふる　林文子

宮津より朝歸りつる途中にて

まほかたほふさのいりなの朝きりを
わけつゝすゝむあまのつりふね　仝

風前露

つらぬける玉さ見ねつるしら露を
むすひもさめぬあきの夕かぜ　山田璋子

月前萩

さねわたる月のひかりにあきはきの
したはのつゆもみゆるよはかな　畠山千代子

虫

長き夜にたれをまつむしきりぎりす
こゑをかぎりになきあかすらん　畠山百合子

●女鑑歌文月並兼題

十一月五日｛歌……深夜鹿　文……長壽を祝ふ｝　十月廿五日〆切

十一月廿日｛歌……枯野　文……書翰文の効用｝　十一月十日〆切

十二月五日｛歌……松の雪　文……居宅新築を祝ふ｝　十一月廿五日〆切

十二月廿日｛歌……風船　文……拾子｝　十二月五日〆切

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　……………………　住所　姓名

文書式

題　……、……、……。……　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。

肝付海軍大佐題辭　小笠原海軍大尉序文及作歌

伊東海軍中將手翰　木村海軍大尉校閲

●西主一 ●野口衛佐美 合著

訂正三版

新案海軍遊戲法

菊版美本

詳圖入

全一册　定價金二十錢　郵税金四錢

本書は我海國男子を養成するに最も適切なる良書にして其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戲法を至極面白く簡易にしつ明瞭に解きたるものなり世の父兄たるもの宜しく一本を繙て以て家庭の資とすべき有益の書なり

●●●學校用としては殊に妙なり●●●

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）　國光社

清風一秀美

國の[illegible]

獄(ひとや)の花(はな)

高節一優雅

總クロース金文字入　菊版本製美麗　全一册

正價金五十錢　郵税金六錢

口繪　富岡永洗筆　極彩色　無比密畫

挿畫　數圖

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安善を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其の幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最も名譽ある儀表の下に最淸廉なる結婚をなすに畢る嶄新奇警高尙なる小說にして其の寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が淸淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備へて座右の友とせられん事を

試に書中の目次を掲ぐれば

目次

發行所　東京橋區築二丁目　國光社

賣捌所　各府縣書肆

最寄書林に無之時は直接本社へ御注文被下度

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

金銀摺彩色表紙　大和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢　郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもゝ之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　（電話本局八八）　國光社

第四版

三輪田眞佐子女史著

女子處世論

定價金廿錢　全壹册　郵稅金四錢

本書は女教育に有名なる三輪田眞佐子女史が日常實踐躬行に徴し女子たるものゝ世に處するの道を詳說せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出て一も虛搆の文字なく其理義を丁寧反覆す此に依りて益々女德を養ひ以て國民の慈母たらんに資すべく實に婦女子たるもの坐右一日も缺く可からざる良書たり

今左に本書敍する處の目次を示せむ……

目次

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　（電話本局八八）　國光社

●割烹學校開設廣告●

割烹の女子教育。家政上の旨眼たる理由は更に言を要せざるべし、然るに未だ其職に有る者の、是を教授せる教場の設置有を聞かざるなり、偶二三女學校に割烹科の編入有りと雖も、正質丹錬なる割烹專門教師を舉ざるが如し、されど日常普通の料理法は調じ得るも、賓客の饗應、諸祝儀の料理法を調じ得る事を得ざるなり斯くては其科目の設けありとも割烹習學の本旨を得る事非ざるべし、爰に於て本校を設立して、割烹全科を教授し、習學者をして、其一方に偏せるの遺憾なからしめんと欲す、朝野の有志、令閨令嬢たち幸に來修して、此擧を賛成せられん事を希望す

本校規則

第一章　總則

第一條　本校は日常雜菜料理より諸祝儀式料理に至るまで速成簡易に教授す

第二條　本校の學則は修業成績の可否に依る、されど別に是を定めず

第三條　本校所定の學科を卒業したる者には卒業證書を授與す

第二章　教則

第四條　授業時間

女生徒　毎日曜日午前九時より午後四時まで

男生徒　毎土曜日午後一時より五時まで

第五條　教授科目は左の如し

○雜菜料理法○普通料理法○茶會席料理法○諸祝儀式料理法○婚禮式料理法

第六條　右の科目教授法は左の如し

○切方○煮方○燒方○擺敷物（野菜むきもの造物の事）なり○獻立方○給仕方○庖丁式○包物○結物

第三章　試驗規則

第七條　修業成績に依りて臨時試驗を行ひ及第の者には卒業證書を授與す

第四章　入學退學規則

第八條　本校へ入學を請ふ者は左の書式により東京在籍もしくは寄留の者にて身元確かなる者を以て保證人と定め保證書を差出す可し

保證書

何府縣何市郡何區何町村何番地
族籍戸主又は何誰何男女或弟妹
何　某

印紙

右の者入學致候上は御校則を守り申すべきは勿論萬一何の事故出來候節は拙者に於て一切引請可申候右保證候也

東京市何區何町何當地
明治何年何月何日　保證人　何　某　印

割烹學校御中

第九條　退學せんと欲する者は保證人連署にて本校幹事へ届出て學籍削除を乞ふ可し

第五章　費目

第十條　本校へ入學を請ふ者は入學金五十錢を納むべし（但九月中入學者に限り是を要せず）

第十一條　每月第一授業日に月謝金五十錢を納むべし

第六章　開校

第十二條　來十月第一（土、日）曜日ヨリ開校

教授ス

明治三十一年九月
東京市日本橋區本町壹町目拾二番地
割烹學校
四條流庖丁師範
教授主任　八世　石井治兵衛

女禮式出張教授

○教場
麻布區霞町一番地牛久保方
○稽古日
每木曜日午前九時ヨリ午後二時マデ

十月
故實禮節教授
有住常子

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
十二冊前金（半年分）	壹圓
全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十一年十月十九日印刷
同　年十月二十日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

文明之先驅

萬盛堂美術商店販賣品廣告

一 貴婦人用金銀時計各種

一 金製諸寶石入指環各種

一 金製彫刻付並に新形七寶入 根懸各種

一 金銀彫刻付並に諸寶石入 帶止各種

一 鼈甲珊瑚珠製作品類

一 貴婦人儀式用品數種

從來世間にありふれたる品々と何卒御比較被下度願上候也

東京市神田區小川町一番地

貴金屬美術裝飾品 諸寶石小間物商

弊堂製作の諸裝飾品は堂主が多年間研究熟練に依り發明せし者にして意匠模樣は其神髓を日本固有の美術に採り之れに歐米技術の巧妙を加へたれば製作品之優美にして精巧なるは申迄も無之眞に文明的商人の体面を保たんと勉むるに依り何卒御愛顧御引立之程偏に希望仕候 且弊堂は世間幾多の同業者とは全く其規模を異に致し產出せし者なれば御得意樣の御便利を專一とし堂員一同必死に奮勵仕り御注文品は出來の期限等聊か相違之無樣相勉め十分責任を負ひ百事注意可仕候間何卒御愛顧御引立之程偏に希望仕候但し市內は日々確實なる店員を以て商品携帶仕らせ派出仕候間御一報を賜り候へば御都合に依り何時にて參邸御用向相伺はせ可申上候

萬盛堂 敬白

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 東京開光社印刷部）